平成27年度

活動報告書

AGORA

岡山大学
地域総合研究センター

OKAYAMA
UNIVERSITY

おかやまのまちづくりを応援しています

CONTENTS 目　次

ごあいさつ …… 1

1　地域総合研究センターについて …… 2

1-1　設立経緯と学都の定義 …… 2
1-2　主要ミッション …… 3
1-3　平成27年度事業計画 …… 3
1-4　組織体制 …… 5
1-5　アドバイザー委員会 …… 5

2　学都研究 …… 6

2-1　専門委員による学都研究 …… 6
2-2　大学機能強化戦略経費学都構想推進支援 …… 22

3　まちなかキャンパス事業 …… 49

3-1　城下ステーション …… 49
3-2　まちなかキャンパス …… 50
3-2-1　LOHAS …… 50
3-2-2　哲学カフェ …… 52
3-2-3　ポートランド視察報告会 …… 53
3-2-4　GISを使った都市計画 …… 54
3-3　学都チャレンジ企画 …… 55
3-3-1　職員企画 …… 58
3-3-2　学生企画 …… 60

4　シンポジウム・報告会など …… 78

4-1　国際学都シンポジウム「最新のフランスまちづくりを岡山に活かす」 …… 78
4-2　センス・オブ・プレイス …… 79
4-3　金沢・熊本・岡山三都市シンポジウム …… 80
4-4　若者と政治シンポジウムー18歳からの選挙参加で明日の日本を創るー …… 81
4-5　ヨシダソース会長特別講義 …… 83
4-6　「地域経済分析システム『RESAS：リーサス』」講座 …… 84
4-7　犯罪被害者支援シンポジウムー被害者にも加害者にもならないためにー …… 86
4-8　ポートランドのまちづくり2015ーおかやま版エコ・リバブルシティへ！ー …… 89
4-9　スポーツによる地域振興シンポジウムー市民参加による岡山市の地方創生ー …… 91
4-10　平成27年度成果報告会 …… 93
4-11　グローバル実践型教育特別シンポジウム …… 94

5　まちづくり実践活動・研究会の発足 95
5-1　西川緑道公園界隈の活性化 95
5-1-1　岡山市との協働調査および受託事業 95
5-1-2　回遊性調査 96
5-1-3　ヒアリング調査 97
5-1-4　西川アゴラ開設経緯と利用状況 98
5-2　総社市山手地区における地域包括ケア 100
5-3　瀬戸内市裳掛地区における地域活動 102
5-4　新見市神郷における環境保全型森林ボランティア 103
5-5　「岡山まちとモビリティ研究会」設立 103
5-6　おかやまスポーツプロモーション研究会 104
6　留学生のまちづくり事業 106
6-1　目的・ねらい 106
6-2　協働体制 106
6-3　まちづくり実験室 106
6-4　ラジオ番組制作 107
6-5　依頼業務 109
7　シンクタンク業務 110
7-1　岡山市「西川緑道公園及び界隈まちづくり組織設立のための基礎調査事業」 110
7-2　岡山市「健康寿命に関連する要因分析業務」 112
7-3　岡山県「岡山県国民健康保険団体連合会データヘルス事業」 112
7-4　商店街等調査事業実行委員会「岡山市商業調査」 113
8　地域連携と窓口機能の展開 114
8-1　各種講演 114
8-2　外部委員・協議会等の参画 115
8-3　岡山市都市戦略懇話会検討部会 116
8-4　岡山市とのコンベンション包括協定 117
8-5　内閣官房まち・ひと・しごと創生本部・内閣府地方創生推進室 117
8-6　平成27年度（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+） 118
8-7　美作市上山地区地方創生プロジェクト 119
8-8　倉敷市連携中枢都市圏構想 120

9　学内連携 122
9-1　ネットワーク・アゴラ 122
9-2　岡山大学若手職員塾 122
9-3　研究推進産学官連携機構（知恵の見本市） 123
9-4　言語教育センターとグローバル・パートナーズ 123
9-5　センター教員担当授業科目 123
10　実践型社会連携教育プログラムの取組み 125
10-1　実践型社会連携教育プログラムの定義と評価基準の検討 125
10-2　コンサルティング業務の試行 125
10-3　実践型社会連携教育プログラムのリスクマネジメント 126
10-4　平成27年度開講の実践型社会連携教育科目の概要（AGORA 教員実施分） 129
10-4-1　倉敷市水島から学ぶ地域社会と環境 129
10-4-2　地域社会貢献型学習支援活動 132
10-4-3　大学とまちづくり -NPO等との連携を通じて- 134
10-4-4　多職種連携と地域包括ケア 139
10-4-5　創造的討論技術を学ぶ 143
10-4-6　フィールド調査の基礎を学ぶ 143
10-4-7　レポートの書き方講座～フィールド調査編～ 144
10-4-8　グローバル人材育成に寄与する 144
10-4-9　現代ブラジルの社会と環境 148
10-4-10　障害予防の科学 150
10-4-11　地域高齢者と介護 152
10-4-12　森林利用グローバルインターンシップ 154
10-5　スクールボランティア支援システムの構築 162
11　その他 169
新聞掲載記事一覧
資料編
設立趣意書
運営委員会名簿
専門委員会名簿
アドバイザー委員名簿
岡山まちとモビリティ研究会名簿、分科会趣旨
成果報告会資料

ごあいさつ

平成 27 年度の事業報告書を刊行するにあたり、一言ご挨拶を申し上げます。

平成 27 年度の事業もまた昨年同様に、大きく２つの柱をもって展開されました。第１の柱は、大学と地域が連携して魅力的な学都を創生する事業であり、もう一つの柱は、実践型社会連携教育プログラムの推進です。

第１の柱の主要なものを挙げるとすれば、１．学都研究、２．まちなかキャンパス、３．西川・中心市街地活性化事業、４．留学生のまちづくり事業、５．地域との連携・協力事業などです。

これらの事業のなかでも、とりわけ岡山市との連携･支援事業として展開している「西川アゴラ」の設置とその事業展開は、大学と地域の基幹的な連携として注目に値する事業であります。西川活性化に取り組む各種 NPO の活動の支援や、岡山市の委託調査活動事業の展開、ポートランドのまちづくり事業との連携活動等を通して、学都創生事業の歩みをより確実なものとした取り組みであったと思います。

第２の柱の実践型社会連携教育プログラムの展開については、まちづくり、ものづくり、地域教育、地域医療教育の４分野にわたり連携教員を配置し、各分野での実践型社会連携教育のモデル事業の展開に取り組み、すでに一部は後期から開講しました。来年度から新たに全学体制で始まる教育プログラムの実施に向けて、重要な基礎固めを行った一年といえるでしょう。

また今年度グローバル実践型社会連携教育プログラムとして実施した、カナダのブリティッシュ・コロンビア大学森林学部と連携し、県内企業５社、１研究所と岡山大学が共同で取り組んだ林業インターンシップ（Co-op プログラム）も、本センターの総力を挙げて取り組んだ大きな成果の一つです。本格的実施の初年度として多くの教訓を残しながらも、大学と企業がタッグを組み一つのプログラムを成し遂げたことは、これまで閉鎖的になりがちであった大学教育においても大きな一歩となったことでしょう。

こうして毎年着実に実績を上げていることにより、本センターの存在意義、そして地域からの期待の高まりをますます実感しています。来年はこれまでの事業展開がいよいよ一つの成果を生み出す年であり、教職員の今後の一層の健闘が望まれます。

岡山大学地域総合研究センター
センター長　荒　木　　勝

1 地域総合研究センターについて

『学都』とは、固有の歴史と文化を持った地域と高度な教育研究機関である大学が、豊かな人間関係を築き、協働して創りあげる地域をいう。すなわち、そこでは人権と福祉が保障され、文化的、経済的、環境的に豊かで魅力的な空間が形成され、そこに『学び』を求めて世界から人々が集う地域のことである。

岡山大学は、平成22年７月、地域連携の進め方について検討する「岡山大学戦略的社会連携・地域貢献ワーキンググループ」を設置し、翌年２月末までの８か月間にわたって国内・国外の現地視察を含めた調査検討を行った。その結果、部局や教員個人レベルでは多くの地域連携活動が行われているが、他方で、岡山大学全体の地域貢献の姿が不明確であることも明らかとなった。今後はこれまでの成果を踏まえ、さらに岡山県内自治体や経済界、各種団体との組織的な協力によって、大学と地域が全体的ビジョンを共有し、取り組んでいくところに、一つの活路があることが浮かび上がった。平成23年４月、新しく森田学長が就任し、「森田ビジョン」を掲げ、大学と地域が協働して美しい学都を創造する方針を明確にした。私たちは、この新しい学都構想の具体化を目指し、同年11月15日にリージョナル・センターの中核となる岡山大学地域総合研究センターを設置する運びとなった。

<資料編>設立趣意書

1－1　設立経緯と学都の定義

地域総合研究センターの設立の理念は、「森田ビジョン」によって提起された新しい学都構想の中に明らかにされている。すなわち、大学と地域が連携して、魅力的な美しい学都を創生し、「国際的な学術ネットワークの中で、人文社会、環境、自然、医療の分野を包含したリージョナル・センターを持つ、真に個性的な、卓越した大学となり」、「岡山の地にあって、世界から人が集まり、世界に輝く大学となること」、さらに、「地域の方々と連携しつつ、地域の善き頭脳となり、地域のための優れた人材養成の場となって、地域の自立と創造的発展に貢献する大学となること」である。地域総合研究センターはこのような学都を実現するための知的拠点として設立された。『学都』とは、森田ビジョンにあるように、大学と地域が協働で作り上げていく魅力的な空間である。そこでまず『学都』の構成部分が明らかになる。大学という高等教育機関と、都市とその周りに存在する地域社会が不可欠の構成部分である。さらにこれまでの我が国の『学都』という言葉に込められた意味として、歴史的に形成された高度な学術機関の存在、またその歴史のなかで形成されてきた、固有の佇まい、風景、地理的集積というものがある。したがって、それらの構成部分が『学都』に不可欠であるが、さらに今回われわれが追求している『学都』は、これらの構成部分が有機的に結びあい、協働して『学都』を創生するという動的な、機能的な、意志的な側面が含まれている。したがって、当面『学都』を以下のように定義することとした。

> 『学都』とは、固有の歴史と文化を持った地域と高度な教育研究機関である大学が、豊かな人間 関係を築き、協働して創りあげる地域をいう。すなわち、そこでは人権と福祉が保障され、文 化的、経済的、環境的に豊かで魅力的な空間が形成され、そこに『学び』を求めて世界から人々が集う地域のことである。

1-2　主要ミッション

学都実現の拠点として設立された当センターの主要なミッションは、次の５つである。

1．学都構想の実現

美しい学都を創生するために、産・官・民と協議し、美しいキャンパスをもつ国際的な学術都市を創生する中・長期的なビジョンを作成し、実現可能な政策については、適時、関係団体と協働のプロジェクトを作成し、国その他の資金協力を得て実行していく。特にグローバル人材養成の拠点として国際学術都市政策の策定と、研究・教育・地域貢献において地域の人々との絶えざる交流を志向するまちなかキャンパスの展開を具体化する。

2．大学の社会貢献活動の調整・強化

これまでの部局で積み上げられてきた多方面の地域貢献の諸活動を支援し、地域の人々、諸団体にこれらの活動を紹介し、さらに大学全体の視点にたって、これらの活動を重点化し、強化していく。

3．地域諸問題におけるシンクタンク機能の発揮

地域の諸問題に対し、国際的学術視点も加えながら、地域の将来の発展に資するシンクタンク機能を果たす。

4．地域連携に関する大学の窓口機能

大学に対する市民の要求を受け止める窓口機能を果たし、地域の諸団体が行っている活動を支える。

5．情報発信

大学と地域の連携に関する学術研究の蓄積を行い、地域の創生に必要不可欠な情報を発信する。

6．人材育成

地域の諸問題や様々なリスクを主体的に捉え、リーダーシップ、チーム力、判断力、勇気と気概を持った、将来にわたっての持続可能な社会の担い手を育成する。

1-3　平成27年度事業計画

1　研究活動

⑴　専門委員による学都研究

当センターのミッションである大学と地域の連携に関する学術研究の蓄積を行い、学都創生に必要不可欠な情報を発信するため、４つの柱（「地域と医療」「地域と環境」「地域と教育・スポーツ」「まちづくり・地域創生」）を中心とした学都研究を行う。

⑵　大学機能強化戦略経費 学都構想推進支援

専門委員による学都研究の実施に加え、各部局から学都構想推進に資する取組を募集し、要件を満たす取組に対して、支援を行う。

⑶　国外・国内研究

視察調査を行う。（国外：ポートランド、ストラスブール　国内：熊本、新潟）など

2　実践活動

⑴　シンポジウム・報告会

・　学都のモデルとなる都市の研究を行い、国内外のモデル都市から識者を招いてシンポジウムを開催し、学都の創生について学び、その方策を検討する。
（三都市シンポジウム（金沢・熊本・岡山）、国際学都シンポジウム）

・　学都研究及び職員・学生による学都チャレンジ企画の中間報告会、成果報告会を実施する。

⑵　岡山市都市戦略懇話会、国際学術都市構想会議

行政や経済団体とともに国際学術都市として魅力あるまちづくりについて検討を行う。

⑶　留学生のまちづくり

留学生が、小田郡矢掛町のまちづくりに参加し、まちを好きになることで、大学と地域は岡山の友好親善大使を育てる取り組みを行う。
（ホームステイ、園児・高齢者との交流、栗ひろい、田植え、稲刈、サムライトリップインやかげ）

⑷　まちなかキャンパス事業

Ⅰ　職員・学生企画（学都チャレンジ学生・職員企画）
職員や学生自らがまちづくりに積極的に参加できるように、活動企画を募集・審査し、基準を満たした企画に対して活動を支援する。

Ⅱ　地域総合研究センター単独企画
まちなかキャンパスにおいて、さまざまな話題を地域の人々とともに考え、語り合う。

3　シンクタンク機能の発揮

地域の諸問題に対して、学術的な視点から、調査・分析し地域発展に資する提言を行う。

4　窓口機能の強化

市民、NPO、企業から寄せられるまちづくりに関する相談窓口体制の整備を行う。

5　情報発信

成果報告書・学都研究報告書・留学生のまちづくり報告書の発行（各年１ 回）
実践型社会連携教育プログラム実施報告書

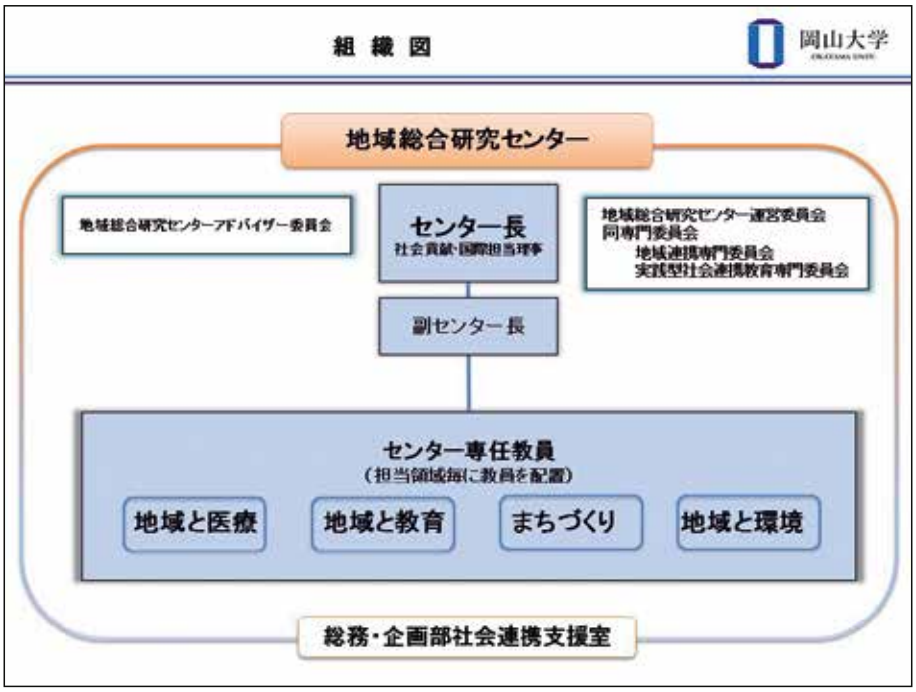
6　概算要求関連（実践型社会連携教育プログラム）

実践型社会連携教育プログラムの構築として、平成 28 年度からの教養教育科目の本格的実施に向けて計画・実施する。

1-4　組織体制

４月から山田一隆准教授が着任し、担当領域毎の教員配置が完成した。また、同月から総務・企画部に社会連携支援室が設置され、地域総合研究センターを専ら担当する事務組織が設置された。

＜資料編＞運営委員会名簿、地域連携専門委員会名簿、実践型社会連携教育専門委員会名簿



1-5　アドバイザー委員会

平成26年度、当センターは業務・活動を通じた学都創生の実現にむけて、自己点検・業過活動の客観性・公平性を担保し、教育・研究・社会貢献の水準の更なる向上を図るため、学内外有識者による意見を伺い、その意見を業務改善に反映させることを目的として、アドバイザー委員会を設置している。

７月28日、第１回アドバイザー委員会を開催し、岡山県内のアドバイザーにお集まりいただいた。岡山大学「第３期中期目標・中期計画」と地域総合研究センターの活動方針の報告およびグローバル人材育成と「おかやま地域発展協議体（仮称）」設置検討について討議した。

▲第１回アドバイザー委員会

＜資料編＞アドバイザー委員会名簿

2 学都研究

2-1　専門委員による学都研究

当センターのミッションの一つは、大学と地域の連携に関する学術研究を蓄積し、地域創生に必要な情報を発信することである。学都岡山の創生のため、平成26年度に引き続き「地域と医療」、「地域と教育・スポーツ」、「まちづくり・地域創生」、「地域と環境」の４つの研究の柱とした、学都研究を実施した。

当センター地域連携専門委員会において、研究分野の担当を分担し、専門委員の各教員が中心となって次の研究を行った。

これらの学都研究については、平成28年１月15日開催の平成27年度成果報告会において報告を行った。詳細は後述（４章シンポジウム・報告会）に記す。

研究の柱

- **地域と医療**

  地域との協働による「地域と医療」プロジェクトの展開

  浜田淳（大学院医歯薬学総合研究科・教授）

  山川路代（地域総合研究センター・助教）

- **地域と教育（１）**

  教育を受ける権利と学校のガバナンス改革 ―実践型社会連携教育プログラムいじめ授業の開発―

  中富公一（大学院社会文化科学研究科・教授）

- **地域と教育（２）**

  学生のスクールボランティア活動を通じた学都創生研究

  佐藤大介（地域総合研究センター・助教）

- **地域とスポーツ**

  地域スポーツ振興をめぐる論理の多様性と統合のエスノグラフィー

  高岡敦史（大学院教育学研究科・講師）

- **地域と環境（１）**

  瀬戸内の島々でのEV（Electric Vehicle）実用化に向けた研究

  河原伸幸（大学院自然科学研究科・准教授）

● **地域と環境（2）**

水島の地域資源を活かした環境学習教材の開発

石丸香苗（地域総合研究センター・准教授）

鷹野郁子（地域総合研究センター・非常勤研究員）

● **まちづくり・地域創生**

西川緑道公園におけるまちづくり活動の実態調査

前田芳男（地域総合研究センター・准教授）

岩淵泰（地域総合研究センター・助教）

＜地域と医療＞

地域との協働による「地域と医療」プロジェクトの展開

地域総合研究センター　山川　路代／大学院医歯薬学総合研究科　浜田　　淳

■研究概要（意義・目的）

森田ビジョンの「より戦略的かつ組織的な地域づくり」を行うために、地方自治体との協働による実践活動を行うとともに、学生に対する実践型社会連携の教育の取り組み、地域と医療に関する研究という三つの取り組みを展開してきた。

■成　果

（1）「地方自治体との協働」として、望ましい医療提供体制の構築に向けて岡山県の地域医療構想の策定作業に関与するとともに、岡山市、笠岡市、真庭市などの地域包括ケアの体制づくりに参画しているほか、笠岡市、備前市、西粟倉村等の国保データヘルス計画の策定作業、県のデータヘルス事業のアドバイザーとしての参加等を行ってきた。このような事業については、医学科、保健学科、岡大病院、地域総合研究センターなど岡山大学の各分野の教員が関与している。

（2）教養教育において、「多職種連携と地域包括ケアのワークショップ」「地域高齢者と介護」「介護予防の科学」という実践型社会連携の授業を2015年度から開始した。「多職種連携と地域包括ケアのワークショップ」は2010年から６市を巡回して実施。2015年度は笠岡市の北木島で実施したが、オリエンテーションとしての講義、フィールドワークとワークショップ、住民の方々中心の公開講座を組み合わせて、講義として実施した。「地域高齢者と介護」は岡山市北区清輝橋の佐藤医院のデイサービス・デイケアの皆様の全面協力のもとに、講義、施設での介護実習と利用者のお年寄りに対する運動、脳トレの企画と実践、ワークショップを行った。学生の満足度は非常に高かった。

（3）地域と医療に関する学都研究として、政府の介護特区である岡山市で、健康寿命の延伸方策の策定を目的とした分析業務を実施。岡山市が保有する約５万６千人分の健診データを活用して、効果的な健康寿命の延伸につなげるために、健康寿命に影響を及ぼす要因を検討するもの。一方、各都道府県における医療・介護の提供体制や地域医療構想の策定状況を比較、分析する研究を現在とりまとめている。

■今後の展開

この活動の目的は、①地域との連携関係の構築②岡山大学の社会実践型教育への貢献③学都研究へのとりくみである。今後とも、この三つをバランスよく展開していく。

（1）地域との連携構築では、市町村における地域包括ケアの構築をめざす作業、岡山県における地域医療ビジョンの策定作業と地域での関係者の協議の場に参画して、地域における望ましい医療提供体制、地域包括ケアの実現のために引き続き努力していく。望ましい医療

提供体制を作るには、身近な生活圏での在宅医療や介護等の体制整備が前提になるため、県レベルの議論、二次医療圏レベルの議論、市町村レベルの議論に関与し、必要に応じてコーディネートする役割を担っていく考えである。

（2）これからも岡山大学における社会実践型教育の充実に貢献していく。そのため、介護施設・医療施設での実習を授業に取り入れる、国際保健や旅行医学など岡山大学のインド拠点等と連携した授業を導入する、多職種連携のワークショップや学生の自主的な地域実践活動を引き続き支援する、といった活動を行っていく。

（3）学都研究では、岡山市の健康寿命に関する研究をまとめるとともに、医療、介護の提供体制の構築やそこにおける大学の役割に関する研究報告書を取りまとめる。

＜地域と教育＞

教育を受ける権利と学校のガバナンス改革
―実践型社会連携教育プログラムいじめ授業の開発―

大学院社会文化科学研究科（法学部）　中富　公一

■研究概要（意義・目的）

いじめに適切に対処するためには、教育委員会、校長、教師らが、取るべき責任体制について理解していることが重要である。特に、いじめ防止対策推進法が成立した今、法が責任体制をどのように構築しているか理解を促す必要がある。同時に、子ども達に、自分の身を守り、相手の人権を尊重することの意味を教えるとともに、相手を理解し、尊重する心を涵養することも重要である。

今年度は、SNSで生じる事例を素材とし、上述のことを考えさせる教材（事例集および設問）を作成し実践することを目的とした。

また、その事例集を学生とともに作成し、その授業のチューターを担ってもらい、学生にとってのサービス・ラーニングとなるよう心がけた。さらに、教師等を対象にしたいじめ授業では、それが彼らの職業教育となることをも目指した。

また、この企画に、地方議会議員、弁護士、地域の学校・教師、地域の教育委員会にも協力してもらうことで、地域の連携の輪を広げることも心がけた。

■成　果

本年度は以下の事業を実施した。

1　教育委員会改革に取り組んだ「地方教育行政の組織及び運営に関する法律の一部を改正する法律」(2015年４月１日施行）を素材として、学校のガバナンス改革についての理論検討を「地方教育行政と首長の権限」として論文にまとめた。荒木勝編『現代公共政策のフロンティア』（岡山大学出版会・2015年）に所収。

2　この間行ってきた、いじめについての法理論的検討を『自信をもっていじめにNOと言うための本』（日本評論社・2015年）にまとめ出版した。

3　地域との連携活動の一環として岡山県議会公共政策セミナーで、「憲法の基本問題」について講演を行った（2015年９月10日）。

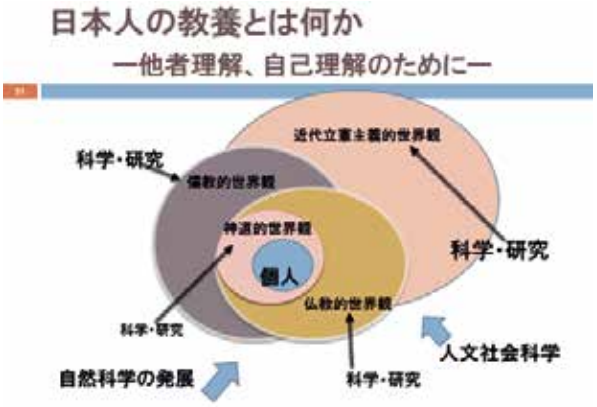
4　2015年法学部演習Iaを対象に、いじめ問題を理論的に考えさせ、同時に、身近な経験を素材に、いじめ事例集を作成した。

5　同ゼミの学生とともに香川県教育委員会、高松市教育委員会のいじめについての取組についてインタビューを行いともに議論した。（９月28～29日）

6　城東高校において２学年360人を相手に、学生と共に作成した教材で、いじめ授業を行い、学生はチューターを担った。(10月17日）

7　神奈川県青少年センターにおいて、教師、教育委員会職員、市民等を対象にいじめ講義を行った。(11月22日）

写真　城東高校での授業実践2015年10月17日



■今後の展開

・自分の身を守り、相手の人権を尊重することの意味を教えるとともに、相手を理解し、尊重する心を涵養することをより効果的に行いうる、事例集と設問の作成を進める。
・教師の専門職教育を意識した事例集を作成する。
・ネットで生じるトラブルを素材に事例集を作成する。
・教育委員会とも連携し、岡山大学の内外に教員と学生と地域人のネットワークを構築し、地域支援と学生教育をともにめざす。
・上記のことを前提に、実践型社会連携教育を実践する。
・法学部の専門授業に、アクティブ・ラーニングを取り入れた授業を行う。

＜地域と教育＞

学生のスクールボランティア活動を通じた学都創生研究

地域総合研究センター　佐藤　大介

■研究概要（意義・目的）

教育再生実行会議や文部科学省の答申等において、教師の資質向上を目的として、学生による学校現場でのインターンシップやボランティア活動の推進が強く求められており、学生ボランティアを受け入れている学校園等からも取組に対する肯定的な意見が多い。しかし、活動の実態を把握することが困難であることから、岡山県が抱える教育課題に対してどのような支援が可能であるかを十分に調査・検証がなされることがなかった。

また、文部科学省は全国的にコミュニティ・スクール制度の導入を進めており、岡山県でも導入・設置が進められている。このコミュニティ・スクール制度の導入は「地域とともにある学校づくり」の基盤を形成するものである。しかしながら、学生はこうした取組について十分に（または全く）理解する機会が提供されていないにも関わらず、卒業後学生は、学校と地域が協働して子どもの成長を支える地域住民としての参画が必要となると考えられる。以上のことから、学生によるスクールボランティア活動を通じた学都創生を目指すため、以下の２つを研究目的とした。

①学生が学校教育の改善に寄与できる支援活動として、学生の意欲・ニーズについて傾向をとらえ、学生の立場から教育支援ボランティア活動の進め方について検討
②学校と保護者や地域住民との協働による様々な教育支援活動に対して、学生が興味・関心を示し、卒業後も積極的に関わろうとする気概を醸成する実践の開発

これらの研究を行うことにより、学校教育を軸とした学都創生につなげたい。

■成　果

以下で報告する２つの取組は岡山大学教師教育開発センタースクールボランティアビューロー学生スタッフと協働し、学生目線に立った企画を行い実施したものである。

（1）「岡山大学スクールボランティアフェア 2015」※1の開催

学生が教育支援ボランティア活動に積極的に取り組むことができるよう、学生とブース出展者とが直接交流・対話し、活動先をマッチングすることが可能となる場として、2015年４月29日（水・祝）に当フェアを開催し、他大学を含む117名の学生が参加した。大学と地域の教育団体が連携した先進的な取組である。

出展ブース一覧（22団体）
国立吉備青少年自然の家、岡山県庁県民生活部くらし安全安心課、岡山県警察、岡山県教育庁高校教育課、岡山県教育庁生涯学習課、岡山県生涯学習センター、岡山県青少年教育センター閑谷学校、岡山県渋川青年の家、岡山っ子育成局、岡山市教育委員会、岡山市立岡山中央中学校、岡山市立岡北中学校、岡山市立妹尾中学校、岡山市立御津小学校、岡山市立少年自然の家、倉敷市教育委員会学校教育部、総社市教育委員会、瀬戸内市教育委員会、赤磐市教育委員会、浅口市教育委員会、早島町教育委員会、就実中学校

本フェアに参加した学生を対象に、研究目的①に関連したアンケート調査を実施した。学生の回答結果から、岡山県が抱える教育課題への支援活動内容に対する学生の意欲・ニーズには傾向があることが分かり、以下のような考察を行った。

●学生の多くは児童・生徒の学習や授業での支援について支援可能と考えており、岡山県の学力向上に対して学生を活用した方策を検討してもよいのではないか。

●岡山県において全国平均を大きく上回る「暴力行為」への対策支援について、支援意欲の高かった学部４年以上の学生による支援が現実的である。

●部活動等課外活動への支援は、学生自身の部活動経験や得意分野などを十分に把握しておくことによって円滑なマッチングを図っていけるのではないか。

●全国的に教師の仕事時間として多くを占める「一般的事務業務」への支援に対しては、ボランティア活動経験がある学生は支援意欲が減退している結果が出たことから、学校現場を理解し、現実的には支援が難しいと考えている。ただし反対に、学校現場をさらに理解する機会を提供することもボランティア活動では必要なのではないか。

（２）「スクールボランティアツアー」の開催

この企画の趣旨は、学生ボランティア募集を行っている地域と連携して、ボランティア活動に興味・関心を持ち継続して参加するよう学生に促すため、活動未経験の学生等を引率し実際に体験してもらうことであるが、それにとどまらず、研究目的②のため、学校と地域の連携取組を理解するための企画をツアーのプログラムに組み込み、長期的・将来的な目標として、学校現場の子どもたちの成長に寄与する気概を醸成することができる学生の育成を目指し、以下の２つのツアーを企画・実施した。

●早島町教育委員会と協力：「そうだ、早島へ行こう」子どものやる気応援ツアー（2015年７月４日）13名参加

●岡山市立妹尾中学校と協力：いっせ～のおでっ中学生の夢応援（2015年12月５日）５名参加

取組効果を検証するため、ツアー終了時に参加した学生にアンケート調査を実施した。その結果、学校教育への学生の参加の必要性、将来地域住民として学校との連携活動や教育活動への参加意欲に対して強い意識を持っており、また、地域活性化においても学校と地域の連携の必要性も実感していた。また、地域の文化・歴史を知り、地域に暮らす住民との関わりにより、地域教育活動への参加意欲を向上させられると考えており、こうした視点で実践を開発していくことが有効であると考えられる。

■今後の展開

中央教育審議会答申では、今後のコミュニティ・スクールの仕組みの在り方や拡充・充実のための推進方策の必要性について言及しており、さらに地域と一体となった学校教育の推進が求められる。そのため、学生によるスクールボランティア活動は、大学として教職課程を履修している学生に対してのみ展開するのではなく、すべての学生に対して裾野を拡大する必要がある。そのため、本研究で実施したツアーのような企画を増やしたり、地域と学校教育を理解するための授業を展開する等について検討しなければならない。

※1　当フェアは公益財団法人福武教育文化振興財団の平成27年度教育研究助成を受けて実施した。

＜地域とスポーツ＞

地域スポーツ振興をめぐる論理の多様性と統合のエスノグラフィー

大学院教育学研究科　高岡　敦史

■研究概要（意義・目的）

産官学金言スポーツのマルチ・ステイクホルダーが構成する地域スポーツ振興の取り組みが、従前の社会的ネットワークをどのように変容させたか、を明らかにすることを目的とした。

■成　果

【方法】

産官学金言スポーツという多様なステイクホルダーがスポーツを生かした地域活性化に向けて2014年10月に設立したおかやまスポーツプロモーション研究会（SPOC研究会）が、それまでの社会的なつながりをどのように変容させたかを理解するために、SPOC研究会のメンバーに対して、他メンバーとの出会った時期（３年より以前、３年～SPOC以前、SPOC以後）と付き合いの深さ（私的付き合い、公的付き合い、SPOCのみ）を問うアンケート調査を行った。この調査によって収集される関係性データを元にしたネットワーク分析（Cytoscape3.3.0）によって、SPOC研究会メンバーが構成するネットワーク（SPOC-network）が認識され、ネットワークの特性を理解することができる。2016年１月末時点で回収数22（有効回収率30.1%）である。

【結果・考察】（社会的ネットワークの変容のみ）

３年前のSPOC-networkは、産・官（岡山市）・学（岡山大学）・言（メディア）・スポーツ（岡山シーガルズ）にクラスタを認識しうる構造を成していた。ネットワークは、クラスタ係数0.557、中心性0.542、密度0.137、異質性0.974という特徴を持つ。（図１）

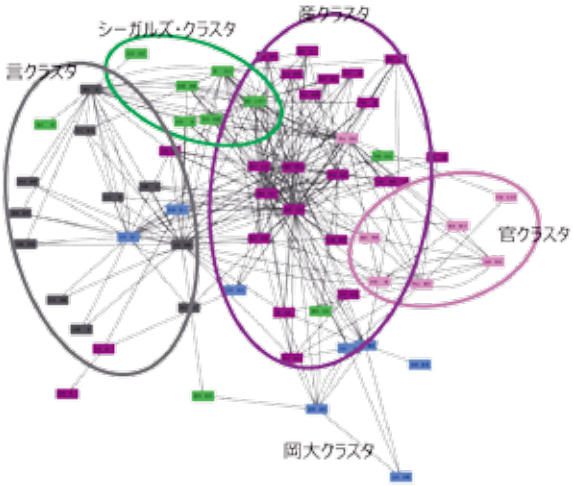


図１　３年前のSPOC-network構造

３年～SPOC研究会設立以前のSPOC-networkは、SPOCメンバー（ノード）をつなぐ紐帯（エッジ）は密になり、クラスタの重なりが認識できるようになった。クラスタ係数0.485、中心性0.665、密度0.269、異質性0.690という特性を持つに至る。（図２）

そして、SPOC研究会設立以後のSPOC-networkは、さらにクラスタが重なり、もはやクラスタ別の認識は不可能になり、クラスタ係数0.849、中心性0.490、密度0.524、異質性0.600である。（図３）

SPOC-network特性の経時的変化は、SPOC研究会設立を契機として成立した社会的ネットワークは、既存の社会的ネットワークの密度を向上させ、異質性を低減させたことを示している。（図４）

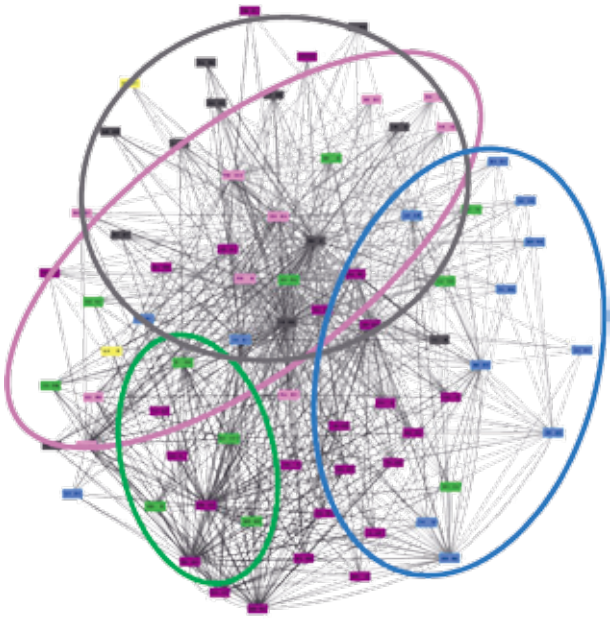


図２　３年～SPOC以前のSPOC-network構造

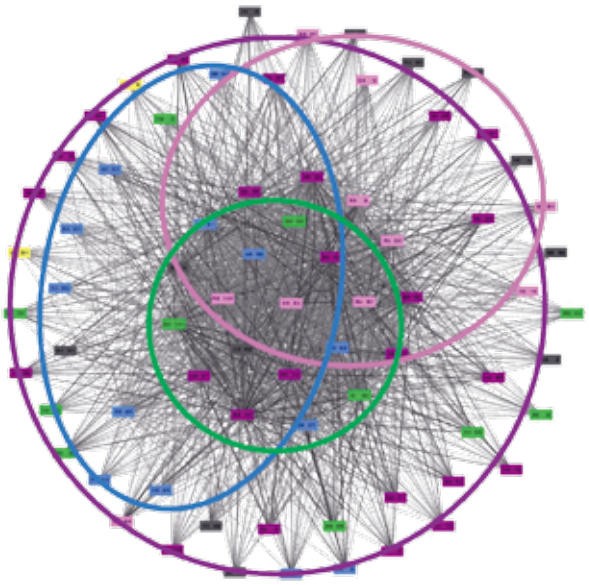


図3　SPOC以降のSPOC-network構造

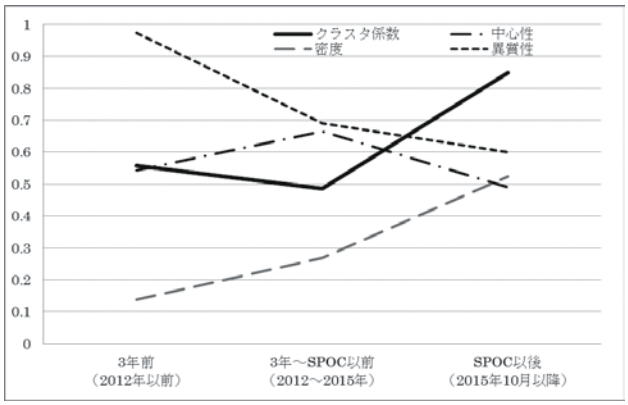


図４　SPOC-networkの経時的変化

【結論】

地方創生に向けたネットワーク創生は、新規のネットワーク創出だけでは不十分であり、既存の社会的ネットワークを内包している必要がある。SPOC研究会の設立は、岡山市を中心とした既存ネットワークを内包しながら、分離していたクラスタを重複させるという仕方で、新たな社会的ネットワーク構造を生んだと言えるだろう。

■今後の展開

SPOC-networkの分析はまだ途上である。産官学金労言による地方創生の取り組みが一定の成果を上げるための重要な要素のひとつとして社会的ネットワークを捉え、その変容・創出を理解することは岡山という社会の変容を理解することに他ならない。また、社会ネットワーク変容・創出に対して大学がひとつのノードとしてどのような役割を果たしうるのかを理解することは学都研究の中核になりうるだろう。

＜地域と環境＞

瀬戸内の島々でのEV（Electric Vehicle）実用化に向けた研究

大学院自然科学研究科（工学部） 河原　伸幸

■標　題

本プロジェクトでは、地域のエネルギーモデル構築ならびにエネルギー拠点となるべき学都を研究するとして「岡山知恵とエネルギーネットワーク構想」を推進してきた。４年目のテーマを「瀬戸内の島々でのEV（Electric Vehicle）実用化に向けた研究」として目標を段階的に高めることにより、実際の都市交通計画に展開することにより、学都創生の具現化を進めるための研究・計画検討を行った。

■研究概要（意義・目的）

「知恵とエネルギーネットワーク」を念頭に、３つの異なる地域、「瀬戸内の島々」、「岡山市」、「岡山県北部」でのEV／超小型モビリティの普及可能性を探るための情報収集、研究会・シンポジウムへの参加を行い、岡山の独自性を考慮した環境共生型社会実現に向けた活動を展開した。

■成　果

●瀬戸内の島々でのEV／超小型モビリティの活用：次回、瀬戸内国際芸術祭において、クリーンエネルギーを利用したパーソナルモビリティ（EV）により島内移動の安心・安全を確保するプロジェクトへの参画依頼があり、活用事例を検討した。新たな観光動線ルートとしての岡山市内と瀬戸内海の島々を結ぶルートを検討した。

●岡山市におけるEV／超小型モビリティの活用：岡山市でもEVの本格的な導入に向けた計画が検討され始めた。岡山大学都市交通研究チーム発足を検討し、チームの活動コンセプトを検討した。また、チームメンバーに関しても意見交換を行った。

●県北部でのEV／超小型モビリティの活用：中山間地域での移動確保のため、EV活用を検討した。岡山大学都市交通研究チームが発足した際には、中山間地域での利活用を含めた検討を行う。

■今後の展開

状況の異なる３箇所の事例を踏まえ、「環境共生型社会実現に向けた地域資源としての大学の役割」を果たすべく、専門的な知見と学生教育の両面で、具体的なロードマップを描き、学都の実現を目指したい。

＜地域と環境＞

水島の地域資源を生かした環境学習教材の開発

地域総合研究センター　石丸　香苗／地域総合研究センター　鷹野　郁子

■研究概要（意義・目的）

地域総合研究センターは、平成24年以来、公益財団法人水島地域環境再生財団（みずしま財団）の協力を得て、水島という地域を、留学生を含む岡大生の環境学習のフィールドとしてきた。平成25年、みずしま財団は環境省の事業として、「“環境学習で、人とまちと未来をつくる！”協働取組事業」が採択され、企業・行政・市民による「環境学習を通じた人材育成・まちづくりを考える協議会」（以下、協議会）を発足し当副センター長の三村教授が委員として加わっている。

協議会で立ち上げられた「環境学習推進ワーキンググループ」の一員として、当センターの石丸と鷹野が参画している。ESDの観点から水島の地域資源の活かし方を探り、その一環としてワーキンググループとともに環境学習教材（来訪者向け簡易リーフレット、常設展示向け映像DVD）を作成する。

■成　果

■取り組み内容

表１　学都研究の実行スケジュール

	10月	11月	12月	１月	２月	３月
映像資料		インタビュー先選定	インタビュー・映像編集			
リーフレット	素案作成	写真・文章選定	写真・文章選定	一時稿完成・検討	校正	完成 配布開始

表１のスケジュールのとおり、学都研究として下記の３点について取り組んだ。

⑴　環境学習の素材となる地域資源の洗い出しと選択。文献や画像などのアーカイブズおよびヒアリング調査により実施し、協議会ワーキンググループとともに検討を行った。

⑵　上記素材により、ワーキングクループで検討の上で水島のESDに係る環境学習教材としてリーフレット案をワーキンググループとともに作成した。Ａ４一枚（両面）を使った簡易なものとし、学習者が自ら考えることを目的に歴史的事実を客観的に写真とともに記述する。

⑶　地域資源となる水島の環境に係るさまざまなステークホルダーを対象にした、個人の経験談を記録した映像コンテンツの蓄積を目的に、今年度は試行的に１名の映像資料を作成した。今後引き続きワーキンググループで対象者を検討し、展示資料として倉敷市環境学習センター展示室で公開する。

また、四日市で行われた公害資料館連携フォーラムおよび富山で開催された公害資料館ネットワーク学校編に当センター研究員の鷹野が参加し、公害資料館の取り組みについて情報収集を行った。（写真１）

写真１　フォーラムチラシ

■成果

成果として（1）で得られた資料を用いて作成中の（2）リーフレットがみずしま財団により二月中旬に印刷・来年度より配布予定であり、（3）ワーキンググループ一員である元JFEの福留正治氏を対象に映像を作成した（写真２）。展示コンテンツが充実し、環境が整い次第、倉敷市環境学習センターにて常設展示として展示予定である。

写真２　映像資料キャプチャ

■今後の展開

この活動は、来年度計画中の実践型授業の学生活動に向けた試行を兼ねており、同時に地域に根差したESDの企業・地域住民・外部者の巻き込み方をも模索している。来年度は実践型授業の一環として、学生が自らのアイデアによって水島で地域の方々と共に環境学習教材を作成し、水島という地域ならではの地域発信型の環境学習の場づくりのきっかけとなるように発展させる。同時に、環境学習教材を作成するにあたって必要となる、技術的知識や手法についても授業の中でどのように伝えるかを検討する。

また、環境学習センターの常設展示コンテンツについても、ワーキンググループと協議を行いながら充実するよう協力をしていく予定である。

＜まちづくり＞

西川緑道公園におけるまちづくり活動の実態調査

地域総合研究センター　前田　芳男／地域総合研究センター　岩淵　　泰

■標　題

1）西川緑道公園のまちづくり史（岩淵　泰）

2）西川緑道公園のまちづくりと実践型社会連携教育の活動（前田　芳男）

■研究概要（意義・目的）

1）西川緑道公園のまちづくり史

2015年、岡山市は、西川筋と県庁通りで５月、10月、11月と３度の回遊性向上社会交通実験を行った。当日は、オープンカフェや自転車優先道路ができるなど、歩きやすいまちづくりに向けた取り組みが行われた。研究では、大森市長のイニシアチブで行われたこの社会実験は、岡山市民におけるまちづくりの悲願であるのか、否かを、歴史軸から明らかにする。

2）西川緑道公園のまちづくりと実践型社会連携教育の活動

実践型社会連携教育の活動フィールドとして、西川緑道公園を中心とする中心市街地エリアを取り上げ、学生がまちの賑わいづくりや回遊性向上を検討するための基礎調査を行うことで、新しい科目開発と大学の地域貢献を推進する。

■成　果

1）西川緑道公園のまちづくり史

西川緑道公園のまちづくり史を紐解いていくと、西川筋の歩行者天国や社会交通実験は、1970年代、1980年代、1990年代、2010年代と４期にわたって行われていることが分かってきた。ここで重要なことは、誰がイニシアチブをとったのかという視点である。1970年代は、岡山青年会議所の夏祭りであり、1980年代は、建築家から構成されるチーム25というまちづくり団体であり、1990年代は、岡山商工会議所とRACDAを中心とした実験であることが判明した。興味深いことは、西川筋が、中心市街地の賑わいと回遊性の中心となってきたが、それぞれの車輌止めは異なった団体が行っていることである。西川緑道公園や県庁通りの歩行者優先化は、岡山のまちづくりの悲願と言えるかもしれないが、バラバラの主体が行ってきたと言えるのである。

2）西川緑道公園のまちづくりと実践型社会連携教育の活動

西川緑道公園でのイベント開催時の来街者、イベント主催者や出店者への聞き取り調査、交通量や歩行者通行量の調査、ビルの床利用調査などを実施し、その結果を岡山市役所やイベント主催者に報告した。当事者が感覚的に把握していたまちなかの課題や問題点を数値として示すことができ、今後のまちづくりの検討に役立つ成果を得た。また、授業成果発表会において市役所職員などの参観を得て、学生へのアドバイスをもらうことで教育効果が高まった。

■今後の展開

1）西川緑道公園のまちづくり史

大学と地域のまちづくりを目指す学都研究であるが、以後、岡山市と連携を取りながら、2016年度の調査を進めることになる。本研究を成果として、他団体への巻込みが必要であることは明らかだ。

2）西川緑道公園のまちづくりと実践型社会連携教育の活動

今年度の取り組みを通して、互恵性を念頭に置いた実践型科目のプロトタイプの開発ができたと言える。次年度以降も地域社会の実際の課題を拾い上げた実践型科目を展開することで、教育活動を通して大学（学生）もまちづくり活動団体の一つとなる。

2-2　大学機能強化戦略経費学都構想推進支援

専門委員による学都研究の実施に加え、大学機能強化戦略経費を活用して、学都構想の推進に資する取り組みの実施を支援するものである。今年度は、実践型社会連携教育科目の開講を目指す取り組みの準備経費として、次のとおり支援した。

No.	部　　局	代表者	事　　業
1	文学部	北川　博史　教授	実践型社会連携教育プログラム「地理学野外実験」の開発と授業実践
2	文学部	今津　勝紀　教授	地域歴史遺産保全活用論実習の開発
3	法学部	中村　　誠　教授	岡山県法教育事業の展開
4	経済学部　外	鈴木　真理子　助教	異分野連携によるESD推進の実践型教育プログラムの開発
5	歯学部	鳥井　康弘　教授	実践型社会連携教育プログラム「在宅介護歯科医療演習」の整備
6	工学部	小郷　義久　技術長	小学生対象の地域貢献型工学実験教室への取り組み
7	環境理工学部	難波　徳郎　副学部長	実践型社会連携ESD環境教育プログラムの充実
8	大学院教育学研究科	桑原　敏典　教授	岡山カルチャーゾーンの教育利用による学社連携の推進
9	大学院教育学研究科	早川　倫子　准教授	岡大発　親子が共に育つ子育て支援プロジェクト
10	大学院教育学研究科	寺澤　孝文　教授	財政的に自立した遠隔教育支援の仕組み構築（赤磐モデル）
11	大学院教育学研究科	齊藤　　武　教授	音楽教育講座定期演奏会
12	大学院社会文化科学研究科	成廣　　孝　教授	「学都岡山」実現のための官学市民社会連携多文化共生プロジェクト
13	大学院社会文化科学研究科	平野　正樹　教授	郷土の歴史に学ぶ財政論
14	大学院保健学研究科	大井　伸子　准教授	「地域に根ざす女性・子ども応援講座」教育プログラムの開発
15	大学院環境生命科学研究科	国枝　哲夫　教授	地域における野生動物との共存を目指した実践型社会連携教育
16	スポーツ教育センター	鈴木　久雄　教授	学生ダンス教育プロジェクト

＜学都構想推進支援①＞

実践型社会連携教育プログラム「地理学野外実験」の開発と授業実践

文学部　北川　博史

■**取組概要（意義・目的）**：本事業は、平成28年度より実施する予定である地理学野外実験の準備事業である。地域づくりには地域社会を構成する諸要素とそれらの関係性を理解することが不可欠である。大学と地域とが有機的に結びつく学都構想ならびに実践知教育は、そうした地域づくりとそれを担う人材の育成にとって重要な意義と役割を有している。本事業は、こうした学都岡山創生プロジェクトに応えるための実践型社会連携教育プログラムの開発および授業実践として位置づけられる。

■**成　果**：本事業においては、地域を授業の場として、資料収集やアンケート調査を含むフィールドワークを行い、これにより得られた地域調査データの解析、考察ならびに報告書作成までの一連の実習を行った。調査先は主として、行政機関、農協や工業組合などの各団体ならびに個別農家や事業所などである。この実習を通じて、受講生は、地域調査法、地域分析法、表現方法などの実践的な知識・技能を習得とともに、報告書の作成を通して、地域の見方や捉え方に関する高度な見識を備えた地域づくりに貢献できる人材へと成長したのではないかと考える。なお、当授業は、地域調査士資格取得に必修の認定科目となっており、当プログラムを修了した学生は、地域調査士資格が取得可能となった。こうした資格取得要件が得られることは、副次的ながら本事業の成果といえよう。

■**今後の展開**：本事業の第一義的な成果は、学生の「地域を見て、地域について考える力」を涵養し、今後の地域づくりに資する人材の育成を図るための基礎となる授業実践を提供できたことにある。これをより高度化するために、本事業において掲げた到達目標である「地域社会との相互性のもとで、地域社会を構成する諸要素とそれらの関係性を理解し、地域の現状と課題を明らかにすること」の精緻化と具体化を図ることが必要であろう。こうした実践知教育を通して、各自治体や地域のNPOなどとの連携による互恵性を保持しつつ、様々な研究領域の次元において、本学と地域社会との関係の拡大を目指したいと考える。

＜学部構想推進支援②＞

地域歴史遺産保全活用論実習の開発

文学部　今津　勝紀

■**取組概要（意義・目的）**：地域社会とそれを支える歴史認識についての基礎的な関係を理解するとともに、地域歴史遺産のうち、とくに古文書・絵図等の地域資料に直接触れ、その解読と整理、さらにその指導方法について学び、現地において、地域遺産の保全と活用に関する実践的・応用的な知識・技能を習得する。この作業を通じて受講生が、今後、それぞれの職場や居住地などにおいて、歴史と文化に根ざした町作りについての高い見識を備え、社会において指導的な役割を担い得る人材へと成長することを目標とする。

■**成　果**：全体の授業計画のうち、現地に入って体感する「県内地域歴史遺産巡見」を本事業により実施した。参加学生13人に対して事前学修項目を割り振り、７月25日・26日に津山市での歴史と文化による町作りの取り組みをテーマに巡見を行った。津山郷土博物館にて館長尾島治氏より津山市の取り組みについてレクチャーを受け、受講生が事前に調べてきた市内の地域歴史遺産について報告し､博物館学芸員を含めて講評を得た上で､町作りの課題などに関するグループ討論を行った。また、市中心部の日本旅館に宿泊し、津山市観光協会長竹内祐宣氏による平賀元義をはじめとする文化財のレクチャーを受けた。翌日は、城下町の地域歴史遺産の巡見を行い、現地において学生がそれぞれ事前に調べてきた事項を発表し、津山洋学資料館にて学芸員田中美穂氏によるレクチャーを受けた。

■**今後の展開**：授業全体は、こうした巡見の他に、講義と三泊四日の合宿による地域歴史遺産の整理作業で構成されるのだが、巡見部分についての教育効果はかなり高く、現地に臨み、現場で取り組んでいる方々のお話を直接伺うことは、学生の意識に大きく作用したといえる。今後は、事前学修部分の充実をはかるのが課題であるが、岡山県教育委員会文化財課の協力をえられることとなり、県内の文化財保護の現状と課題、岡山における文化財の指定制度の実態などについて授業をしていただくこととした。また、合宿調査については当初の計画通り倉敷市と連携して行う。さらに、こうした方面で活躍している文学部日本史研究室の卒業生の協力も得られる見通しなので、多面的な授業を展開したいと考えている。

左上：尾島治氏によるレクチャー
左下：津山郷土博物館での史料見学
右上：津山洋学資料館
右下：市内巡見（津山高校）

＜学部構想推進支援③＞

岡山県法教育事業の展開

法学部　中村　　誠

■取組概要（意義・目的）：本事業は、法の基本的な価値や考え方を地域の中学生・高校生に広く知ってもらい、法の知識を備えた人材を育成することを目的としている。

本学法学部教員、岡山弁護士会、学校関係者らで組織する岡山法教育研究会を中心にして、中高生を対象としたジュニア・ロースクール岡山を開催する。また、学校関係者の協力のもと地域の中・高等学校において法教育授業を行う。これらにおいては、法学部生をチューターとして参加させる。

■成　果：本年度は、以下の事業を実施した。

（1）第 11 回ジュニア・ロースクール岡山の開催

11月14日（土）午後１時～５時に、岡山弁護士会と岡山大学法学部の共催で、第11回ジュニア・ロースクール岡山を開催した。

今年度は、中学生７人、高校生20人、計27人の生徒に参加していただき、第１限「インターネットでのその書込み､大丈夫ですか？」､第２限「『正当防衛』ってどんなもの？」について、５人程度のグループで話し合い、考えてもらった。授業の進行は、第１限は本学法学部教員が、第２限は岡山弁護士会の弁護士が担当した。第１限では岡山大学法学部の演習Ⅱ（情報法）の学生が、第２限では岡山大学法学部法友会の学生が､教材作りに参画するとともに､グループ討議ではチューターとして助言した。グループ討議後の意見発表では、中・高校生は、事例についての法律の考え方をよく理解しながら、多様な意見を発表していた。

（2）清心中学校での法教育授業の実施

2016年２月15、16日に、法学部の演習Ⅱ（現代法）の学生が企画・作成した教材をもとに、３年生を対象にして、４クラスで各１回計４回の授業を行った。

内容は、「友達の持ち物を壊す」「落とし物を持ち去る」「超能力でケガをさせる」「トランプで賭け事をする」「傘さし自転車で衝突する」など、５つの身近な具体的事例をスライドとシナリオを用いて紹介し、各事例の中である行為が、民事責任、刑事責任のいずれに当たるか、あるいはいずれにも当たる、いずれにも当たらないかを各生徒に４択で考えてもらい、それぞれの解答について各班でなぜそのような責任があると言えるかについて討論して答えを出してもらう。この作業を通して、刑事と民事との相違について理解を深めてもらった。

（3）岡山一宮高校での法教育授業の実施（岡山県消費生活センターとの共催）

10月14日に、昨年度法学部の演習Ⅱ（現代法）の学生が作成した教材の改訂版を用いて、２年

生を対象に１日間に２クラスで各１回計２回の授業を行った。

内容は、様々な契約の事例を通して、どのような場合に買主が取り消しをすることができるかを考えてもらい、未成年者が契約の中で気を付けるべきことについて学んでもらった。まず①対等な立場で行われる基本的な売買契約の事例から始め、②買主が未成年者の事例、③未成年者でも小遣いの範囲で購入する事例まで、と少しずつ契約の形態を変えていくことで、契約の考え方を順次掘り下げて理解してもらった。

■**今後の展開**：これまでの法教育事業を引き続き実施するとともに、さらに拡大・深化することを目指す。

具体的には、第一に、新規の法教育教材の作成である。第二に、岡山県内の中学校・高校での法教育授業の展開である。これらについては、平成27年度より岡山県消費生活センターを中心に行う「幼小中高生向け消費者教育プログラム開発事業」にも位置付けられ、教材作成及び授業実施に関し、教育委員会、消費生活センター、小・中・高等学校との連携体制が整備された。今後、各学校で実施しやすい教材づくりとそれに基づく授業が広く行われることが期待される。

第三に、他大学、他都道府県の弁護士会、法と教育学会等との情報交換により、教材や授業の改善を図ることである。

これらを通じて、自由かつ公正な社会の担い手育成の一端を担うとともに、地域における教育の向上に貢献する。

＜学部構想推進支援④＞

異分野連携によるESD推進の実践型教育プログラムの開発

経済学部外　鈴木　真理子

■取組概要（意義・目的）：経済学部では実践型社会連携教育として2012年度より「実践コミュニケーション論」を開講している。昨年度、卒業生を含む履修者を対象としてPROGテスト（Progress Report On Generic Skills、コンピテンシーを客観的に測定するテスト）を実施したところ、受講時に修得・向上したコンピテンシーが時間の経過とともに低下する傾向があり、継続的な教育が重要であることが示唆された。また他大学の先進事例の実地調査で、教育効果は初年次において特に高いということが判明した。このため、今年度前期、主に１年次を対象とした実践型授業『プロジェクト・ゼロ』を新規開講し、「実践コミュニケーション論」と合わせて継続的な受講が可能な環境を整えた。

今年度のプログラムは異分野連携による教育効果を狙い、本学廃棄物マネジメント研究センターと協力して実施した。廃棄物マネジメント研究センターでは、2010年から市民・子ども向けのESDイベントを毎年主催しており、行政、NPO団体、環境生命科学研究科の研究室などが各々ESDを推進する企画を出展している。今回『プロジェクト・ゼロ』受講生も他団体と協力しながら「環境と経済」をテーマにチーム毎に企画したブースを出展した。

■成　果：受講生は、実践コミュニケーション論の既受講生や留学生も集まり、多彩なバックグラウンドを持つ１～４年の学年混成チームで、価値観の違うメンバーで合意形成し、連携して行動するなかで、コンピテンシーの中でも特に、多様性の理解、意見の調整能力を養う実践の場となった。

授業スケジュールを以下に示す。下線は学外の関係者に協力いただいた部分。

第１回　オリエンテーション
第２回　プロジェクトとは何か？
第３回　ミッションを受け取る（岡山市ESD推進課の外部講師より）
第４回　思考法の学習
第５回　課題発見力、情報収集力を身につける
第６回　構想力をＵＰする
第７回　質問力、プレゼン力をつける
第８回　フィードバックを受け再考する
第９回　関係者へのプレゼンテーション（行政、NPO団体、環境生命科学研究科の教員に対して）
第10回　フィードバックを受け再考する
第11回　プロジェクト遂行に向けて準備
第12～14回　プロジェクト遂行（約100名の小学生に対して）…次ページ、写真参照
第15回　振り返り

▲Aチーム「ポコポコ買い物ゲーム」

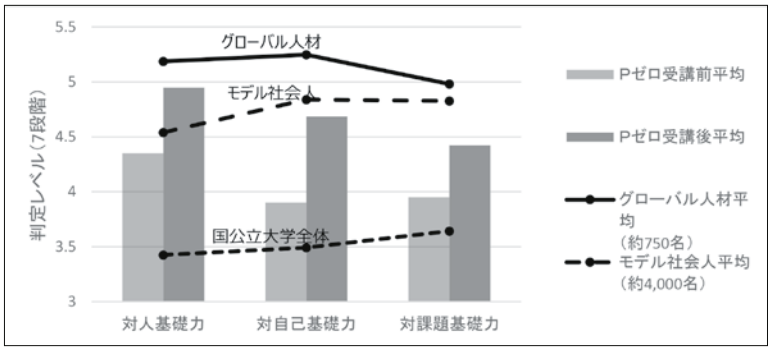
▲Bチーム「自分で電気を作ってみよう」

▲Cチーム「おこづかいと世界すごろく」

▲Dチーム「新聞紙でエコバッグを作ろう」

本取組の成果を下記に纏める。

・受講の前後でPROGテストの結果が大きく向上した（下記グラフ参照）。受講は「コンピテンシー」を強化する効果が高いと考えられる。



*モデル社会人：35歳までの日本国内の職場におけるハイパフォーマー、役職に就いている／２名以上の部下・メンバーを有している

*グローバル人材：25～49歳の日本人ビジネスパーソン、アジアにおいて、外国人マネジメント経験があり、かつ当時のマネジメントに満足している者、平均駐在期間：約４年

・WebClassやFacebookなどを活用し、教員－受講生、受講生－受講生の双方向コミュニケーションを積極的に促す環境を整えたことで、モチベーションが高まり、授業に積極的に取り組んでいたことが、受講後アンケートから明らかになった。

・受講後、社会と繋がる活動（NPOや地域ボランティア、学内サークル等）に引き続き関与する学生が多くみられた。

■今後の展開：今年度は初めての取組みだったこともあり、習得目標を「コンピテンシーの強化」として網羅的にカバーしたが、今後は、今回のPROGテストの結果から、経済学部生の課題と考えられる「課題発見力」「計画立案力」に重点を置いたプログラムに改良していく予定である。

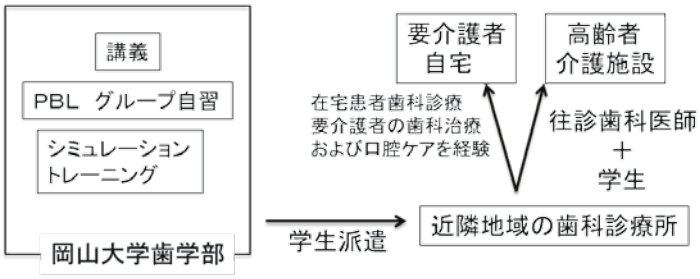
＜学部構想推進支援⑤＞

実践型社会連携教育プログラム「在宅介護歯科医療演習」の整備

歯学部　鳥井　康弘（岡山大学病院総合歯科）
宮脇　卓也（歯学部教務委員会臨床実習部会長）
森田　　学（歯学部教務委員長）／窪木　拓男（歯学部長）

訪問歯科診療を実施している近隣地域の在宅介護支援歯科組織と連携し、歯学部臨床実習生（５年次後半～６年次前半学生）を現場に派遣し、地域の在宅医療患者の歯科治療・口腔ケアを実際に体験させるプログラムの整備を行う。

■**取組概要（意義・目的）**：歯学部学生が５年次後半から６年次前半にかけて履修する「診療参加型臨床実習」は、岡山大学病院歯科系診療科において指導教員とともに学生が来院患者への医療活動というサービスに携わり、活動を通して歯科診療の知識・技能・態度を習得する。ただし、この実習は大学病院で行われ、指導教員と学生が歯科診療を行う患者のほとんどは通院可能な比較的健康な外来患者である。ところで、我が国は超高齢社会を迎え、高齢要介護者いわゆる「寝たきり老人」における歯科医療、口腔ケア、摂食・嚥下リハビリテーションなどは大変重要で、学生が将来歯科医療を通して社会に貢献するためにはそれらを学ぶ必要がある。しかし、このような高齢者医療、特に「寝たきり老人」への在宅歯科医療に関する教育は医療上の制約もあり大学病院では対応できない。そこで、外部歯科診療所に学生を派遣し、施設の歯科医師の指導のもとで体験するプログラム「在宅介護歯科医療演習」を新たに臨床実習の中に組み込み学生全員が受講することとして、超高齢社会である我が国の医療の問題を理解し、歯科医師としていかに対応・貢献できるかを考え、高齢者、要介護者を対象とした歯科医療の知識・技能・態度を習得することを計画した。平成27年度は臨床実習に本プログラムを組み込み試行した。まず、学生を派遣する外部医療機関は、歯学部教授会で資格審査され臨床講師（無給）としての称号付与した歯科医師の診療所で在宅歯科医療・高齢者介護施設での歯科医療を実践しており、当該方面で学生の教育ができる医療機関とした。



平成27年度開始時には21人の臨床講師を認定し、20施設に歯学部臨床実習学生を派遣した。学生は１人につき２日間外部医療機関に出向き、臨床講師とともに在宅歯科医療または高齢者介護施設での歯科医療に同行して診療介助および実際の診療を経験した。派遣に先立ち、歯学部において数人のグループごとに要介護老人シミュレーターを使用して、在宅歯科医療のシミュレーショントレーニングを行い、また、各自で在宅歯科医療の知識面での自習をさせた。本プログラム終了後、学生および臨床講師にアンケート調査を行うとともに、試行的に臨床講師に学生評価を依頼した。

■**成　果**：平成27年度は試行的に歯学部５年次後半から６年次前半の時期の臨床実習に「在宅介護歯科医療演習」プログラムを組み込み歯学部臨床実習学生全員である54人に対して本プログラムを履修させたが、本実習での学生１人あたりの訪問歯科診療した施設・家庭数は平均4.3施設で、経験した症例数は平均9.9症例であった。実習後に臨床講師および学生の双方から本プログラムについてのアンケート評価を行ったところ、学生からは訪問歯科診療では、事前には器具や設備等の体制整備の限界を問題視していたが、実際はそのような状況はほとんどなく、認知症で意思疎通が困難な場面が多くあることや治療に際して協力が得られないといった問題点を抽出したとの意見が多く見られた。また臨床講師からは、ADLの低下に関する知識や地域医療における歯科の役割についての学習が不十分であり、事前学習の強化について要望が寄せられた。さらに、臨床講師には受け入れた学生の実習態度、知識を含め評価を依頼した。その結果、態度面では96%が適切と評価されたが、知識面では84%で十分であるものの16%が不十分とされ、新たな授業科目を考案し歯学部学生への知識教育の充実が必要と考えられた。なお、総合的評価の試行では75%が優、23%が良、２%が可で、不可の者はいなかった。

また、平成27年９月24日（木）に歯学部第一講義室において、本プログラムを履修した歯学部学生全員および多数の歯学部教員の出席のもとで、実際に学生を受け入れた臨床講師２人の講演および総合討論会を開催し、履修学生による在宅介護歯科医療演習の振り返りと教育効果のさらなる向上のための方法について議論した。

▲シミュレーショントレーニングの様子

以上より、平成27年度では試行的に本プログラムを組み込んだところ、歯学部学生の超高齢者歯科医療の意義、知識、技能の多方面での理解度が大幅に向上したと見受けられた。

■**今後の展開**：今後は、PDCAサイクルを回すことにより本プログラムをさらにブラッシュアップし、臨床実習に組み込むことを目指すとともに、歯学部の他学年にも超高齢者歯科医療の知識面での授業を組み込む予定である。

さらに、本プログラムに関連して、在宅や施設での医療の現場で医師、看護師、ケアマネジャーなどの他職種との連携を学ぶための新たなプログラムも構築し、超高齢社会に対応できる歯科医師の育成を目指す。

＜学部構想推進支援⑥＞

小学生対象の地域貢献型工学実験教室への取り組み

工学部　小郷　義久

■取組概要（意義・目的）：工学部創造工学センター技術部支援部門では、平成21年度から体験型実験教室の開催、科学イベントでの出展に技術職員が協力して地域貢献活動に取り組んでいる。今年度は“実験を通じて家族で親しむ岡山大学”をテーマに掲げ、全世代で科学を身近に感じて楽しめる実験教室の開催を目指し、今年度は以下の実験教室を実施することができた。

⑴　わくわく体験教室2015（人と科学の未来館サイピア　5/31）
・ペットボトルで顕微鏡をつくろう

⑵　わくわく体験教室2015（岡山大学教育学部附属特別支援学校・高等部　6/3）
①芳香剤をつくろう　②ひえひえスライムをつくろう　③入浴剤をつくろう
④色を分けてみよう　⑤ぷくぷくカルメ焼きをつくろう

⑶　日ようび子ども大学（岡山県生涯学習センター　6/7）
①自分の指紋を観察しよう（午前）②ペットボトルでつくるキラキラ万華鏡（午後）

⑷　夏の夜空を観察しよう（岡山大学自然科学研究科棟　7/31）

⑸　こどもさんかくサマーゼミ～科学であそぼう～（さんかく岡山　8/5）
①入浴剤をつくろう　②スライムで遊ぼう　③芳香剤をつくろう
④ペットボトル万華鏡

⑹　小学生のための工学実験教室2015（岡山大学工学部　8/25）
①レーザーでプレートを作ろう　②ケプラー式望遠鏡を作ろう
③ガラスにプリントしてみよう

⑺　合同開催科学大好き岡山クラブ（岡山大学自然科学研究科棟　8/30）
・めっきで遊ぼう

⑻　わくわく体験教室2015（中国・杭州・長江実験小学校　9/15）
・きれいな水をつくろう

▲科学大好き岡山クラブ

⑼　わくわく体験教室2015（中国・厦門・演武小学校　9/18）
・きれいな水をつくろう

⑽　わくわく体験教室2015（人と科学の未来館サイピア　10/4）
・きれいな水をつくろう～英語で化学実験～

⑾　わくわく体験教室2015（岡山市立御野小学校　10/5）
・きれいな水をつくろう～英語で化学実験～

⑿　わくわく体験教室2015（岡山大学教育学部附属特別支援学校・中学部　10/16）
①芳香剤をつくろう　②スライムであそぼう　③ペットボトル万華鏡をつくろう
④入浴剤をつくろう　⑤ぷくぷくカルメ焼き

⒀　青少年のための科学の祭典2015（ライフパーク倉敷 倉敷科学センター　11/15）

・ガラス細工にチャレンジしよう

⑭　クリスマス観察会（岡山大学自然科学研究科棟　12/24）

⑮　かいのきわくわく実験教室2015（岡山大学工学部　3/30）

①レーザーでプレートを作ろう　②ケプラー式望遠鏡を作ろう

③ガラスにプリントしてみよう

いずれの実験教室も安全に実施することができ、好評であった。

▲青少年のための科学の祭典

■成　果：今年度実施した出前実験教室も大好評で、継続的な出展・開催が望まれている。地域との結びつきを深めるために始めた「小学生のための工学実験教室（小学４年生以上体験可能）」は今年度で６回目の開催となった。新しいテーマにも取り組んでおり、毎年、異なるテーマで申し込んでくれる家族の方もおり、夏休みの定例行事の一つになっている。本イベントのように学内の施設を使用する実験教室は、長期的将来における岡山大学全体の優秀な学生の確保に貢献できるのではないかと感じている。また、今年度は、岡山県生涯学習センター内にある“人と科学の未来館サイピア”での出前実験を行うことができた。立地条件の良さから家族で参加する方が多く、家族（親子）で楽しめるよう実験手順の再検討を行い、体験者からは「分かりやすい」と好評を得ることができた。

■今後の展開：大学コンソーシアム岡山や科学トライアングル岡山に協力し、岡山大学として参加する「日ようび子ども大学」、「科学大好き岡山クラブ」への出展や「小学生のための工学実験教室」の実施、および科学実験に接することが少ない特別支援学校での出前実験を技術職員で協力し、継続的に実施していく予定である。また、学内にある天体観測ドームを使用しての観察会も継続して実施したり、他学部技術職員との協力体制や意見交換会の場を持てれば、各学部の特色を生かした岡山大学ブランドの実験教室の開催も可能となると考えている。

＜学部構想推進支援⑦＞

実践型社会連携ESD環境教育プログラムの充実

環境理工学部　難波　徳郎

■**取組概要（意義・目的）**：本学では、平成28年度から学士課程教育が再編され、実践型社会連携教育プログラムの推進が謳われている。本学部で開講している科目「ESD実践演習」と「実践型水辺環境学及び演習」は、まさに実践型社会連携教育に資する代表的な科目であると言える。本事業では、環境教育に資する効果的な実演・実験プログラムの企画を行うとともに、より多くの参加者が実演や実験を体験することができるよう、機器や設備の充実を図ることとする。

■**成　果**：全国の市民団体等が国土交通省や財団法人河川管理財団と連携して実施する「身近な水環境の全国一斉調査」が平成27年６月７日に行われ、「実践型水辺環境学及び演習」の履修者が環境保全団体「児島湖流域エコウェブ」の会員とともにインストラクター役を務め、一般市民や高校生の指導を行った。また、平成27年度から新たに「蛍プロジェクト」を立ち上げ、学内水循環施設（ビオトープ池）に蛍生息地を創成する取り組みを始めた。具体的には、学生達が自ら企画書を作成し、それに則り蛍護岸工事等のハード面を整備し、カワニナ採集まで事業を展開した。これらの事業を推進させるために、工事現場の責任者や蛍生息地事業の専門家等の指導を受けた。さらに「児島湖流域エコウェブフォーラム24」において、本プロジェクトの中間発表を行い、地域にて蛍に関心のある市民団体の方々との意見交換を行い、環境保全に関する新たな知見を得た。これらの実践型社会連携教育を受けた学生達は、創造性・積極性・行動力・実践的判断力を身につけることができたと自己評価を行っている。

■**今後の展開**：60分授業、４学期制導入により、実践型環境教育は正規の授業時間外の活動にて授業内容をこなす必要性が高まってくる。次年度に継続される「蛍プロジェクト」は、蛍やカワニナの飼育実験など生物を対象とした項目が予定されており、今後は、授業時間外の学修活動における学生達の意識改革とモチベーションの向上を支援する教授法を「実践型水辺環境学及び演習」にて模索し、教育効果を検証する予定である。

＜学都構想推進支援⑧＞

岡山カルチャーゾーンの教育利用による学社連携の推進

大学院教育学研究科　桑原　敏典

■取組概要（意義・目的）：岡山市出石町周辺には後楽園を中心に県立美術館や県立博物館など文化施設が集中し、岡山カルチャーゾーンと呼ばれ注目されている。しかし、各施設が別々に運営されているため、施設同士の連携は必ずしも十分ではなく地の利が活かされているとは言い難い。本事業は、同地区の中心部にまちなかキャンパス「城下ステーション」を持つ岡山大学が核となって、岡山カルチャーゾーンの諸施設の連携を構築し、同地区を地域の教育の中心地として活性化させようとするものである。

本プロジェクトは、平成26年度に始まるもので今年度は２年目の最終年度にあたる。今年度は、これら４つの施設の教育利用を一層促進するための教員研修やワークショップを開催して大学と社会教育施設の連携を強化していくとともに、その企画や運営に大学生・院生に参画させ研修と一体化した教員養成プログラムの多様な形を提案していきたい。

■成　果：本プロジェクトは、カルチャーゾーンに位置する三つの博物館・美術館と連携をして遂行した。以下、各館ごとの取り組みを紹介する。

１．岡山県立博物館との連携プロジェクト

１）岡山県立博物館を利用した教員免許更新講習の実施

７月29日（水）に、岡山県立博物館の内池英樹氏と野田繭子氏と岡山大学の桑原敏典が講師となり、教員免許更新講習「博物館を利用した社会科教材開発の方法」を実施した。これは昨年から継続しているもので、今回も定員40名以上の応募があり、充実した研修が行われた。

２）学芸員とのコラボによる教員養成

11月27日（金）に、県立博物館の内池英樹氏を学部授業「初等社会科授業研究」に招き、特別講演「より魅力的な授業づくりをめざす―博物館を利活用して―」をしていただいた。内池氏は教育現場での豊富な経験もあり、それもふまえた実践的な内容の講義であったので、受講生も熱心に聴講した。

２．岡山県立美術館との連携プロジェクト

岡山県立美術館とは、学校と美術館との連携を促進することをねらいとする活動を中心に取り組んだ。桑原が、「岡山県立美術館　学校と美術館の連携委員会」の委員の委嘱を受け、同館の岡本裕子氏と事業促進のための協議を継続的に行ってきた。

１）先進事例調査

学校と美術館との連携推進事業「コレクション活用先進事例調査」が行われ、桑原と岡山大生も二度参加をした。第一回は11月１日（日）に行われ、学生院生４名が参加をした。訪問先は京

都国立博物館と京都文化協会であった。京都国立博物館では、来館者に対してボランティアが展示品の魅力を伝えるツールが開発され効果的に活用されていた。第二回は、１月15日（金）に行われ、名古屋ボストン美術館を訪問し、同館が来館者に行っている展示品への関心を高める工夫について聞き取り調査を行った。

２）小学校における美術館との連携に基づく教育プログラムの開発・実践

岡山市立三勲小学校の協力を得て、教育プログラムの開発に取り組んでおり、８月３日（月）、１月４日（月）に打ち合わせを学生を交えて行った。現在、岡山市立オリエント美術館とも連携をして、二つの美術館を活用した教育プログラムの開発を行っている。このプログラムは２月25日（木）に実施した。

３．岡山市立オリエント美術館との連携プロジェクト

１）子ども対象のワークショップの企画・運営

岡山市立オリエント美術館の須藤寛史氏と高見妙氏のご指導の下で、同館で開催された子ども対象のワークショップ「古代の謎を解き明かせ！オリエント調査隊」を企画・実施した。岡山大学教育学部生４名が中心となって、５月から定期的に同館に集まって企画会議を行い、８月９日（日）と21日（金）にワークショップを実施した。

２）美術館での研究会の開催

同館の須藤寛史氏と岡山県立岡山城東高等学校の古市秀治教員を講師として迎え、「博物美術館を活用した教材開発の可能性」を12月６日（日）に実施をした。県内外の現職教員と岡山大学生が参加をして充実した研修が行われ、今後も継続してほしいという感想を参加者からいただくなど高い評価を得た。

■今後の展開：上記の成果をふまえて、今年度の事業の総括のため岡山県立博物館を会場として、３月12日（土）に博学連携・融合シンポジウム「学校と博物館・美術館とのコラボを考える―Win-Winの関係を目指して―」を実施する。３館からスタッフが参加し上記の取り組みを中心の報告を行い、県内外の学校教育及び社会教育関係者と博学連携の促進について意見交換を行う予定である。今後は、さらに県内の他の博物館・美術館との連携も模索しながら、カルチャーゾーンの活性化を推進していきたい。

＜学都構想推進支援⑨＞

岡大発「親子が共に育つ」子育て支援プロジェクト

教育学研究科　早川　倫子・片山　美香

■**取組概要（意義・目的）**：本事業は、大学機能（教員の研究内容と環境）を生かした社会貢献として、アカデミックで親子が共に育つ子育て支援事業を行うことを目的とし、一昨年度より試みている事業である。

近年、社会においては様々な子育て支援事業が展開されている。それらを検討した結果、安心安全な子育て支援事業の必要性を確認した。今年度も引き続き、研究成果を生かした形で、岡山大学らしい子育て支援事業を行っていきたいと考えた。また、教員養成という点も生かし、学生との連携も取りながら行うことによって、親子⇔教員⇔学生の三者の学びも生まれ、教員養成における教育的意義もあると考えている。

■**成　果**：このプロジェクトの担当教員２名（研究チーム名：岡大Musicare）で、継続的に「子育て支援」に関する情報を収集するとともに、一昨年・昨年と実施してきたワークショップ及び交流会のアンケート結果や参加者へのインタビュー調査を踏まえて、よりよい子育て支援事業の内容について協議をすすめてきた。

今年度も引き続き､共同研究者（早川･片山）の専門性を活かし､子ども向けの音楽ワークショップや、保護者向けの子育てを考えるワークショップなどを実施し、親子が共に学べる機会を提供する。特に今回は、子どもたちと学生との交流音楽遊びの中に見られる学びの姿について、保護者の方々と参観し、子どもの発達や学びの在り方について協議する形態で実施する。

実際の様子については、実施後報告したい。

■**今後の展開**：近年の子育て支援における目標として掲げられている「保護者とともに子どもの成長の喜びを共有すること」や「親の養育力の向上」､「親自身の自己決定の尊重」の達成に寄与する、意義ある内容に引き続きしていきたい。また、教員をめざす学生たちがこのような取り組みに参加することは、普段経験することとは異質の、対象への多面的な理解を図る契機となり、教員養成における一助となるのではないかと考える。

また、全学への波及効果としては、次世代育成支援室や様々な専門分野の教員と連携できるようにしていくことによって、全学で取り組める体制を作っていきたい。また学外では、子育て支援や教育に関わる公的機関やNPO団体などとの連携も考えていきたい。

＜学都構想推進支援⑩＞

財政的に自立した遠隔教育支援の仕組み構築（赤磐モデル）

大学院教育学研究科　寺澤　孝文

■取組概要（意義・目的）：平成26年度に引き続き、地域の子どもの学力向上と意欲向上、および大学と地域をつなぐ新たなメディアの構築を目的として、新技術を実装した遠隔教育システムを利用した教育支援を、自治体と協同して赤磐市の小中学校に提供した。特に本年度は、大学の予算を持ち出しすることなく、自治体が実費を提供する形で支援を恒常的に提供できる仕組みと、学生が支援に関与できる仕組みづくりを目指した。

■成　果：以下では、昨年度から継続してきた①教育支援の実質的な成果、②本年度財政的に自立した教育支援を提供するために導入した、スマートフォンとタブレットによるe-learningシステムの導入経緯、および③学生が作成した、地域の小中学生に対する励ましのメッセージの活用法について説明を加える。

①新型ドリルによる地域の小学生の学力向上と意欲向上

平成26年度より赤磐市に新型ドリルを導入し、その成績と意識変動のデータを解析し、対象となった小学生に個別にフィードバックを行った。ドリルは紙媒体で提供し、そのドリルの回答データを全てスキャナで回収し、記録、解析し、子ども一人ひとりに対して、図１に示すような成績が上昇グラフをフィードバックすることを年間を通じて継続した。その結果、漢字の読み書きの成績は明確に上昇した他、特に注目できることは、フィードバックが有効に機能し始めるのに対応して、子どもの学習意欲や自己効力感が有意に上昇することが示された（世界初の成果）。その成果は赤磐市の議会でも報告された他、平成28年度も同様の支援を継続することになった。この支援は、朝日新聞の１面に掲載され、フジテレビの全国版で取り上げられた他、第12回日本e-Learning大賞「ニューメソッド部門賞」を受賞した。

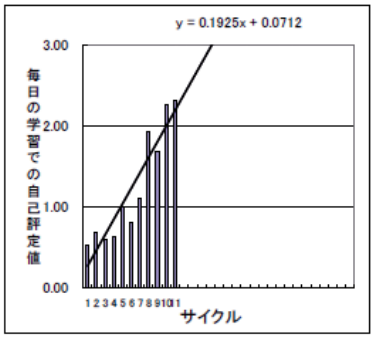


図１　フィードバックのサンプル

②スマートフォンとタブレットによる e-learning システムの導入

①の学習支援は紙媒体によるドリルであったため、子どもたちが最適な難易度を自分で選んで学習することができなかった。そこで赤磐市の予算に、兵庫教育大学連合大学院と就実大学（原研究室）から提供された研究費を加え約90台のスマホを購入し、赤磐市の小学校１校に導入した。そのセッティングに本戦略経費を利用した。スマホの導入（キャリア通信はできない）で生じる問題の解決、学校での導入許可、ネットワーク設定を行い、３学期後半に導入が始まる予定になった。

③学生が作成した、地域の小中学生に対する励ましのメッセージ

新たな学習支援の概要を大学の授業（学習心理学）で扱い、実際に学生に新型のe-learningを体験させた他、②のスマホの設定を授業の一環として課すなどして、新たな学習支援の可能性を体験的に学習させた上で、新型ドリルを導入している小中学生に対して、学習を継続する意義を説く、励ましのメッセージの作成を学生に課した。そのメッセージを、図１のようなフィードバッ

クデータと一緒に冊子体として綴じ、子どもはもちろん、保護者に定期的に届けることを計画している。自分自身や子どもの成績が上昇していくデータは高い関心を持つため、新しいメディアが創出できると考えている。その冊子は、岡山大学が地域の教育を支援していることを、地域全体に広げるメディアになり、地域と大学を結ぶ情報のルートになると考えている。

以上、平成26年度から継続してきた本取り組みは、財政的に自立した取り組みとして、着実な成果を生み出し、地域と大学をつなぐ新たなメディアを生み出す活動につなげることができたといえる。

■今後の展開：スマホとタブレットを利用したe-learningを継続的に提供し、学習者に有益な学習情報をフィードバックする教育支援を、自治体の運用費でまかなうことが可能になったことを受け、今後はフィードバックするメディアの機能を強化していくことを目指す。すなわち、現在、小中学生とその保護者向けに紙媒体でのフィードバックが可能となっているが、そのフィードバック冊子に上記③の学生が書いた励ましのメッセージや、最新の学術研究の紹介などを掲載し、大学と地域の家庭を直接結ぶメディアを構築する。さらに、図１のような成績の上昇を示すグラフの他、様々な学習データをWEB経由で個人（子どもや保護者）にフィードバックするWEBサイトを構築する（図２にそのイメージ図）。図１のようなデータは、どの学習者からも必要とされる情報であるため、学習者の属性が特定でき（個人は特定できない）、学習するたびに頻繁に更新されるWEBサイトが構築できる。このサイトの活用意義は非常に大きく、今後、大学と個人を結ぶ新たなルートとして、様々な活用が期待できると考えている。

図２　フィードバックのWEBページの例

＜学部構想推進支援⑪＞

音楽教育講座第63回定期演奏会
2015年12月５日（土）岡山ルネスホール

教育学部音楽教育講座　齊藤　　武

■**取組概要（意義・目的）**：音楽教育講座で勉強に励んでいる学生たちが、年に一度の定期演奏会に向けて毎年大きな演目に取り組み、舞台で実際の経験を踏むことに拠って大きな成長を遂げてきた。63年続いたことにより、地域にも広く浸透していて、多くの方々が毎年楽しみに来て下さることで、岡山大学音楽教育の成果を存分に発信し続けている。また高校生の来場も多く、多くの受験生の目標となっている。今回は、ピアノ、作曲、管弦楽器のソロ演奏とバッハ２台のヴァイオリンのための協奏曲（弦楽合奏）、ウエスト・サイド・ストーリー（吹奏楽）に取組んだ。

■**成　果**：今回、戦略経費に認めていただけたことで、初めてルネスホールで行うことができ、音楽を創造する環境として非常に恵まれた場所で、大きな成果を残すことができた。個人の演奏としてはピアノ・ソロが多かったが、岡山でも有数の名器スタインウェイフルコンサート用ピアノで演奏できたことで、音楽が引き立ち演奏者の充実感とともに聴衆の反応も頗る良かった。作曲学生の作品は電子音楽で現代的な構築がホールの雰囲気と相乗効果を生み出していた。弦楽合奏は最も聴衆の評価が高く、音楽教育講座オリジナル編曲ヴァージョンで非常に美しい響きを創出することができた。最後の吹奏楽はメイン演目として総力をあげて取り組んだ楽曲で、学生たちの若々しいエネルギッシュで高度な演奏が、充実したプログラムを締めくくる意味でも大変満足のいくものだった。長時間にわたる演奏会が大成功裏に終了したことで、今年も大きな成長をすることができた。

■**今後の展開**：来年度も同様に、学生たちの構成を考えた演目を熟考し、素晴らしい企画を創っていく予定である。今回のようにホールに恵まれると、音楽自体が溌剌と生み出される契機になり、練習に取り組む意欲が増長される。音楽は個の演目と合奏など全体で取り組む演目と両方が必要で、どちらも日々の技術の研鑽が必要である。毎年定期演奏会という大きな目標を設定することで、そのどちらも向上意欲を持続する事が可能になる。今後も計画的に継続することで、より高度な演目に挑戦し音楽的、人間的な成長を計っていきたい。またより地域の方々に喜ばれる取り組みを続けることで、岡山における岡山大学の存在意義をアピールし続けていきたいと考えている。今後教職に着く学生が多いことを考えると、岡山の音楽教育にとってこれからどういった取り組みをしていくことが必要かを常に考えながら、今後の充実した展開を計っていきたい。

＜学都構想推進支援⑫＞

「学都岡山」実現のための官学市民社会連携多文化共生プロジェクト

大学院社会文化科学研究科　成廣　　孝

■**取組概要（意義･目的）**：本取組は、岡山大学法学部教員が主導している岡山多文化共生政策研究会（岡山大学法学部教員10名程度＋関連分野を研究する社会文化学研究科教員数名＋岡山大学国際センター所属教員＋岡山県、岡山市、岡山県下市町村、岡山国際交流協会など）とともに外国人住民とのよりよい共生を進めるためのさまざまな多文化共生政策に関する調査研究および政策形成・実施にかかる連携体制の構築を進める事業である。今年度は25、26年度の取組みを引き継ぎ、「多文化と防災」を主要テーマに据えて、その完成を目指し、関係団体と協議しつつ新たなテーマを設定するとともに、それに応じた関連団体との連携を確立する。また、次年度以降取り組むテーマについての検討を進める。

■**成　果**：本事業は、岡山県・県下市町村と岡山大学教員で構成する岡山多文化共生政策研究会において、政策研究および政策提言を通じて地方自治体およびその市民との連携を強化し、教育･研究･実践によるサイクルを構築しようとするものである。本年度も岡山多文化共生政策研究会を二度開催し、県市町村および大学の取り組みについて情報共有をはかるとともに（二回目は二月もしくは三月）、ここ三年間にわたり研究会が取り組んできた、岡山県に多文化災害センターを設置すべく提言を行うための調査報告書の作成・出版に取り組んだ。研究会メンバーから報告書を集め、とりまとめを行うため何度も会合が重ねられ、27年12月に調査報告書の発行および、国内の関連市町村への配布も行なわれた。これをもって岡山県庁国際課から、多文化災害センター設置にむけた提案がなされることになる。本事業では、本報告書の編集・出版にかかる作業および印刷に対する支出が大きな部分を占めている。また、ここ数年引き続き、多文化共生の問題について、過去の学都支援経費を利用して当研究会と岡山県が実施した岡山県在住外国人に対するアンケート調査やヒアリング調査の成果を盛り込んで作成した教科書（黒神 直純・成廣孝編『多文化共生の法と政治』を用いた教養教育科目を展開しており、各メンバーは各々が担当する科目にも多文化共生の視点を織り込むようになっている。また、当研究会における研究のために整備した多文化共生関係の書籍は岡山大学法学部資料室に集積されており、今後の法学政治学に関する学部教育から、社会文化科学研究科における大学院生の教育・およびその研究テーマとして多文化共生問題を選択するのに十分なボリュームになりつつある。

■**今後の展開**：現在当研究会では、来年度以降の研究に向けて、テーマを検討している最中である。自治体の多文化共生政策の取り組みは、中央政府の政策方針如何によって左右されることが多いため、大学メンバーのみの関心によって研究会のテーマを主導することは難しいが、岡山大学のSGU化に沿って、外国への留学・岡山大学への留学が増加することが予想されることから、多文化共生教育等学内における具体的な施策を考えていかなければならないものと思われる。

＜学都構想推進支援⑬＞

郷土の歴史に学ぶ財政論

大学院社会文化科学研究科（経済学系）　平野　正樹

■**取組概要（意義・目的）**：本取組は、上記タイトルでのアクティブ・ラーニング講義を来年度から開講するに先立ち、事前に予行演習を実施し、課題を見つけることを目的としたものである。

■**成　果**：昨年６月、グローバル・パートナーズのキャンパス・アジアの講義の一環として、「郷土の歴史に学ぶ財政論」を想定した講義を担当した。具体的には、日中韓の30名程度の学生を対象に、数コマの教室での講義と現地調査を組み合わせたアクティブ・ラーニングでの講義を実施した。まず、数コマの教室での講義では山田方谷（備中松山藩（現在の高梁市）の財政家、1805-1877年）に関して、ビデオやレジメを活用して財政政策や金融政策といった経済政策の講義を行った。次に、この教室での講義を踏まえて、山田方谷ゆかりの地である高梁市を訪問して、その業績や史跡にじかに接した。その後、数グループに分かれて、山田方谷が実施した金融政策や財政政策についてのグループ・ディスカッションを実施した。山田方谷の経済政策を勉強することで、現在の経済政策（例えば、アベノミクス）の経済学的な意味がより一層深く理解できたのではないかと考える。

■**今後の展開**：とはいえ、課題も見つかった。例えば、グループ・ディスカッションを実施する際、グループ内での各人の役割を明確にしないと、その内容が拡散しかねないことが判明した。今後、上記の課題を解決することも含めて、来年度のアクティブ・ラーニングでの講義では履修生の学習効果がより一層高まるように、今回の教訓を生かしていきたい。

　また、教室での講義と現地調査のコマ数をどの程度の割合にすれば、学習効果がより高まるのかといったことも改めて検討していきたいと思っている。

＜学部構想推進支援⑭＞

「地域に根ざす女性・子ども応援講座」教育プログラムの開発

大学院保健学研究科　大井　伸子

■取組概要（意義・目的）：

1．地域社会で女性や子ども・子育てに対する支援を行っている保健・福祉機関や企業、ボランティア団体と連携する。

1）岡山市の保健福祉機関、愛育委員会、岡山県助産師会の活動実態を調査する。

2）岡山市シルバー人材センターの子育て支援の人材育成活動を調査する。

3）岡山県内の女性の出産・子育て、また男性社員への育児参加を積極的に支援している企業を調査する。

2．地域での女性と子どもに対する子育て支援、子ども虐待予防に向けた人材の育成と啓発活動を行う。

1）岡山県内の専門職（保健師、助産師、看護師等）を対象にしたリカレント教育を行う。

①子どもの虐待予防編：平成27年12月26日（土）13：00～16：30

岡山大学医学部マスカットキューブ３階講義室

テーマ：「出産早期から乳幼児期の子ども虐待の早期発見と取り組み」

講　師：山田　不二子（NPO法人チャイルドファーストジャパン理事長）

テーマ：「妊娠期からの地域での子ども虐待予防」

講　師：松岡　典子（MCサポートセンターみっくみえ代表）

②母乳育児編：平成28年３月５日（土）13：00～16：30

岡山大学医学部マスカットキューブ３階講義室

テーマ：「お母さんと赤ちゃんに対応した母乳育児支援」

【理論編】講師：中村　和恵（国立岡山医療センター・新生児科）

【実技編】講師：柳澤　美香（窪木産婦人科・母乳相談専門員長）

2）一般高齢者を対象にした地域での子育て支援の講座（岡山大学まちなかキャンパス）、シルバー人材センターで子育て支援の講義を行う。

①孫育て講座：平成28年３月11日（金）13：30～15：30

岡山大学まちなかキャンパスステーション

岡山市北区石関町２－１　総合福祉会館１階

テーマ：「こどもの心が育つ楽しい孫育て」

講　師：長谷川喜久美（はせがわ助産院・院長）

講　師：大井　伸子（岡山大学大学院保健学研究科・准教授）

②岡山市シルバー人材センターの「産前産後応援事業支援者研修」のプログラム作成に関わり、一部講義を担当する。

3．「地域に根ざす女性・子ども応援講座」の教育プログラムを作成する。

講義内容を検討し、プログラムを作成する。

■成　果：

岡山市保健センター、愛育委員会、岡山県助産師会が行っている子育て支援活動、シルバー人材センターの子育て支援の人材育成の調査を行った。今後、これらの子育て支援活動について、連携していくことになった。また、岡山県内の女性の出産・子育て、また男性社員への育児参加を積極的に支援している企業は、「おかやま子育て応援宣言企業」として岡山県のHPに掲載されているが、男性社員の育児参加を支援している企業はまだ少ないことが明らかになった。

専門職（保健師、助産師、看護師等）を対象にしたリカレント教育は、子育て支援セミナー「こども虐待予防編」を開催し,岡山県内から保健師や助産師や看護師や子育て支援を行っている地域ボランティアなど22人が参加した。また、「母乳育児編」では、IBLCE（国際ラクテーションコンサルタント）認定単位の申請を行い、受講者には3.0単位の発行を行った。「母乳育児編」では計39人が受講した。また、高齢者を対象にした子育て支援講座は18人が受講した。岡山市シルバー人材センターの「産前産後応援事業支援者研修」は６月と８月に開催され、講義の一部岡山市を担当した。

【子育て支援セミナー】

▲子どもの虐待予防論

▲母乳育児論

【産前産後応援事業支援者研修】

■**今後の展開**：平成28年度から開講する「地域に根ざす女性・子ども応援講座」の教育プログラムとして、以下の内容をねらいとしている。

学生が自分自身の将来と親になることについて考えることができるよう、岡山県教育委員会や岡山県助産師会と連携し、大学生を対象にした親育ち応援プログラムの開発を行う。

①女性と子ども、これらを取り巻く家庭や地域の実情について、問題点を検討する。

②親になること、子どものいる生活、子どもを育てることについて考えることができる。

③妊娠期の女性と産後の母親や子どもに対して支援を行う上での、必要な技術と知識を学ぶ。

④将来社会人となり、結婚・出産・子育てといった自分自身のライフコースに関心をもつことができ、子育て支援サポーターの人材として地域社会に貢献することができる。

＜学都構想推進支援⑮＞

地域における野生動物との共存を目指した実践型社会連携教育

大学院環境生命科学研究科　国枝　哲夫

■**取組概要（意義・目的）**：岡山県内の関連機関、団体との協力により、農学部学生、環境生命科学研究科大学院生を野生動物の生態調査、被害の実態調査、現場での野生動物管理の実践に参加させることで、学生、大学院生に野生動物被害が農林業をはじめとする地域社会に与える影響と、その軽減に向けた取組の重要性を理解させ、将来、地域で必要とされる野生動物管理を担う人材育成へ向けた動機付けとする。

■**成　果**：岡山県環境文化部自然環境課、岡山理科大学、（一社）岡山県猟友会岡山西分会及び株式会社野生鳥獣対策連携センターの協力により、岡山大学附属半田山自然教育林にて野生動物管理の実践に取り組んだ。岡山県では近年野生動物による農林業への被害や地域住民の生活への被害が増大している。岡山大学周辺でも大学キャンパスに隣接する半田山自然教育林におけるイノシシの生息数が増加し、周辺住民の生活にも悪影響を与えている。そこで、野生動物管理の担い手となるべき狩猟者の育成と、半田山自然教育林におけるイノシシの棲息実態の調査を目的として岡山大学の学生５名、大学院生１名、岡山理科大学の学生４名に加えて岡山大学教員、岡山県自然環境課職員、（一社）岡山県猟友会会員及び株式会社野生鳥獣対策連携センターによるプロジェクトチームを立ち上げ､半田山自然教育林における箱罠による狩猟および関連した実践を行った。猟友会のベテラン猟師の指導を受けて狩猟免許を所有している学生が罠猟を行うとともにそれ以外の学生等もこれらの過程に積極的に関与することで野生動物管理における狩猟の重要性についての認識を深めた。また、捕獲されたイノシシには疥癬が認められたことから、半田山自然教育林に棲息するイノシシには疥癬の原因病原体であるヒゼンダニ（*Sarcoptes scabiei*）が寄生している個体が存在していることが明らかになり、今後の野生動物管理にはこれらの病原体の実態把握も必要であることが明らかになった。

▲岡山大学附属半田山自然教育林におけるイノシシ被害

▲プロジェクトチームによる箱罠の設置

■**今後の展開**：野生動物管理の中に狩猟を効果的に位置づけていくためには、狩猟後の獣肉の利用とそのための食品衛生上の管理が重要となることから、今後は狩猟の実践だけでなく、その後の獣肉の処理についても関係機関の協力を得て、学生が自主的に取り組める様指導する。また、野生動物管理を目的とした狩猟の実践に必要とされる、動物の生態、繁殖、栄養、生理、および獣肉の利用と公衆衛生上のリスク管理に関わる教育も行うことを予定している。

＜学部構想推進支援⑯＞

学生ダンス教育プロジェクト

スポーツ教育センター　鈴木　久雄

■**取組概要（意義・目的）**：昨年度は小・中・高校生対象の「白桃ダンス」のDVDやホームページを作成し、授業や講習会等によって指導ができる学生を養成した。また岡山市市民を対象とした「OKAYAMA!市民体操」は地域でのイベント等を通じて普及活動を行った。そこで今年度は、上記のダンス普及活動を学生がより主体に取り組むため、指導者養成と指導実践およびその成果を調査する。これらを通じて学生の実践知を高め、学校のダンス教育の充実発展に役立て、また地域での健康づくりに貢献する。

■**成　果**：「白桃ダンス」は授業において教員養成系学生約200名に白桃ダンスの実践と指導法を習得させた。レポートからかなり指導実践力が着いたと思われた。また、学内の学生８名を指導者として養成し、３回のイベントに指導補助として参加し、その後学生のみによる指導イベントを２回行った。教員・学生が協働で指導した小･中学生11名（チーム名：AQUA）が、フジテレビ番組27時間テレビ「NFSホンキーダンス選手権」岡山県代表として出場した（学生も１名出場した）。この小・中学生への指導は主に学生が担当したが、学生指導の評価は非常に高いものとなった。

「OKAYAMA!市民体操」は小学校等にて実技講習会を学生とともに５回行い、延べ26名の学生が参加した。そのうち学生のみによる指導講習会は２回である。いずれも活気ある講習会となり、学生指導への評価は高かった。このことから体操普及にかなり貢献したと思われる。また、共同研究者の酒向治子准教授が「岡山市民体操甲子園」を予選および本選の審査委員となり、普及発展に貢献した。

▲「OKAYAMA！市民体操」指導風景

以上より、白桃ダンス、OKAYAMA！市民体操のいずれにおいても、学生の指導者養成の教授法が確立され、学生によるダンス、体操指導が可能となったことから、学生の実践知は高まったと考える。

■**今後の展開**：今後も白桃ダンスとOKAYAMA！市民体操を教材の一つとして教育学部学生に指導し、ダンスの指導力向上をめざす。また、さらに学生指導者の養成を推進し、単独あるいは複数での指導派遣を行っていく。これまでの実績から、地域でのイベントにおいて学生への指導要請があると思われるので、随時対応していく。今後の課題は、学生による地域や幼稚園・保育園等でのダンス、体操の指導を加え、普及活動を量的にも推進していく。このことが学生の実践知をさらに高めることに繋がると考える。

3 まちなかキャンパス事業

3-1　城下ステーション

■設立の経緯

当センターの重要なミッションの一つにまちなかキャンパス事業がある。この事業を展開する象徴的な空間として平成24年６月26日に「城下ステーション」を開設した。

城下ステーションは、県立美術館、県総合福祉会館、オリエント美術館、岡山神社などに近隣する岡山市北区石関町にある。この地が選ばれたのは、１．市内中心部であること、２．歴史、文化施設に近いこと、３．景観が良いこと、４．まちづくりを進めるNPO団体との連携が期待できること等の理由からである。

■城下ステーションの利用状況

立地条件を活かし、城下ステーションでは当センターが直接主体となって企画する狭義の「まちなかキャンパス」にとどまらず、職員・学生による「学都チャレンジ事業」、市民を交えた各種の研究会、授業やゼミ、サークル活動、留学生のまちづくり活動などに使用されている。

また、岡山大学を卒業したOBや入試を控える受験生などが、城下ステーションを視察に訪れたり、大学の教員・職員・学生がキャンパスの外に出て、地域の人々との自由な語らいを通じて、信頼のある対話を創造する重要な空間となっている。

分類	事　　例
視察対応	・卒業生、受験生
研究会	・坂田和男研究会 ・まばたき研究会
授業・ゼミ	・教育学部、文学部、地域総合研究センター
留学生の活動	・岡山城・後楽園視察ワークショップ ・セルビア人留学生の交流会 ・Word Kitchen拠点
打合せ	・NPO法人まちづくり推進機構岡山との当センター運営に関する打ち合わせ ・市民性教育会議 ・養護教育会議
市民との交流	・当センターのまちなかキャンパス事業 ・岡山の美術を語る会 ・働く介護者の集い ・「孫育て講座」（保健学研究科）
その他	・岡山大学グッズの販売 ・大学案内・入試願書の配布

3-2　まちなかキャンパス

まちなかキャンパス事業は、大学の教員、職員、学生と地域の人々との絶えざる交流を通じて、魅力ある岡山のまちづくりに貢献するとともに、まちづくりについて考えるさまざまな機会を創造することを目的としている。したがって、各種シンポジウムやまちづくり活動なども含む幅広い取り組みである。ここでは、当センターが主体として開催した事業について、その概要を紹介する。

■3-2-1　LOHAS

補完代替医療によるアプローチから健康に対する考えを学び体験し、LOHASな生活スタイルを日々の中に取り入れるきっかけ作りとして、西川アゴラにて全６回の市民講座を行った。企画運営は当センターの山川路代助教が担当した。

第１回「中国医学～「経絡」の使い方入門～」

日　　時：2015年５月18日（月）14：00～15：30
講　　師：石堂　智行 氏（総社市尚雲堂鍼灸院院長）
コーディネート：時信　亜希子（環境生命科学研究科・助教）
参 加 者：11名
概　　要：参加者は中国医学の「経絡」の概念と使い方の説明を受け、熱心に耳を傾けた。実習では、経絡のストレッチの指導を受け、腰痛や肩こりなどの症状別に経絡の使い方を体験しながら学んだ。

▲石堂智行先生（中央）

第２回「ボディワーク～身体イメージを変える～」

日　　時：平成27年６月25日（木）①14：00～15：30　②18：00～19：30
講　　師：坂本　雅一 氏（鍼灸師、ボディーワーカー）
コーディネート：時信　亜希子（環境生命科学研究科・助教）
参 加 者：①12名　②６名（計18名）

概　　要：姿勢を直したい、体のかたさを改善したい、首のしびれや痛み、肩こりや腰痛、体の痛みを治したいという訴えを持つ参加者に普段蔑ろにしがちな「自分の体を感じ、知ること」に集中することをレクチャーした。癖から脱出すること、普段の動きの中で癖以外の動き方を知ることの大切さを学んだ。

▲坂本雅一先生（写真奥）

第３回「アーユルヴェーダ的すがすがしい一日の過ごし方」

日　　時：平成27年７月16日（木）10：00～11：30
講　　師：時信　亜希子 氏（環境生命科学研究科・助教、インド政府認定アーユルヴェーダ医）
参 加 者：10名
概　　要：アーユルヴェーダとは何かの説明を受け、次に起床から就寝までの一日の時間の流れに沿って、食事の方法、規律なども含めて重要なポイントを学んだ。また、ごま油を使ったうがいをしたり、白湯を飲みながら、アーユルヴェーダ的な時間を過ごした。

▲時信亜希子先生（写真奥）

第４回『アーユルヴェーダ的「体質・気質」の考え方』

日　　時：平成27年８月27日（木）14：00～15：30
講　　師：時信　亜希子 氏（環境生命科学研究科・助教）
参 加 者：10名
概　　要：アーユルヴェーダの体質･気質（プラクリティ）の考え方について、説明を受けた後、セルフチェック表を使って、自分がどのプラクリティかを確認した。自分のプラクリティに合うハーブティーを飲みながら、自分の現在の食事や生活習慣について考え直していた。なお、本企画は、KSB瀬戸内海放送の取材を受け、スーパーJチャンネルで放送していただいた。

▲アーユルヴェーダについて話す時信先生（中央）

第５回『本場インドのヨーガの魅力』

日　　時：平成27年９月16日（水）
①10：00～11：30　②14：30～16：00　③18：00～19：30
講　　師：ジョーティ・ブーシャン・ミシュラ 氏（インド・ヴァラナシ出身）
通　　訳：時信　亜希子 氏（環境生命科学研究科・助教）
参 加 者：①９名　②10名　③７名（計26名）

概　　要：インドで古から受け継がれてきた伝統的な健康法であるヨーガについて、その概要の説明を受けた後、ヨーガのポーズ、呼吸法、瞑想法を実習した。

▲ジョーティ氏（写真右奥）

第６回『アーユルヴェーダ新春特別企画』

日　　時：平成28年１月13日（水）14：00～16：00

講　　師：イナムラ・ヒロエ・シャルマ 氏

（大阪アーユルヴェーダ研究所所長、日本人初のインド政府認定アーユルヴェーダ医）

コーディネート：時信　亜希子 氏（環境生命科学研究科・助教）

参 加 者：12名

概　　要：アーユルヴェーダの考え方に基づいた、厳しい冬を乗り切って和やかな春を迎えるヒントを学んだ。アーユルヴェーダの健康観についての説明後、個別の身体や健康に関する悩みのカウンセリング実演とアーユルヴェーダで処方される代表的な薬（スパイス）の紹介を受け、参加者は実際にごま油を使ったセルフケアを実践した。

▲イナムラ先生（中央）

■3-2-2　哲学カフェ

松川絵里（カフェフィロ・大阪大学CSCD特任研究員）と共に城下ステーションにて身近な生活で気づいたことをテーマに哲学の時間を取っている。毎月一回のペースで行っており、参加者は学生だけでなく、社会人の参加が多く、毎回10名程である。４年目の活動となる。

▲哲学カフェの様子

４月11日「質問」
５月９日「住みたいまち」
６月13日「偉人とは何か？」
７月12日「まちと公共性」
８月９日「みんなちがって、みんないい？」
９月13日「学校とは何か？」
12月20日「岸井大輔と『アートと公共性』を考える」
１月17日「選ぶ人／選ばれる人」
２月27日「からだの声」
３月13日「学歴とは何か？」

■3-2-3　ポートランド視察報告会

日　　時：平成27年６月９日（火）18：00~20：00

場　　所：西川アゴラ

平成25年12月、ポートランド州立大のS.ジョンソン先生を招き、西川アゴラでワークショップをしていただいたことが一つのきっかけとなり、４月に岡山大学、岡山市（市長も参加）、経済界（商工会議所、経済同友会）が合同で、ポートランドへのスタディツアーを行った。

その結果を、写真や収集した資料を使用し、学生やまちづくり活動に関わっている市民などに視察報告会を行った。参加者は荒木勝理事・副学長、氏原岳人大学院環境生命科学研究科助教はじめ学生、教職員、岡山市役所、商工会議所などから約30名であった。報告者は、林恭生氏・岡山市都市整備局交通政策課長、当センターからは前田芳男准教授、岩淵泰助教の３名である。

林課長は公共交通の特質、前田准教授は建築とまちづくりの関係、岩淵助教は市民参加論のそれぞれの視点からまちづくりを紹介した。

▲市民、行政、大学教職員が参加

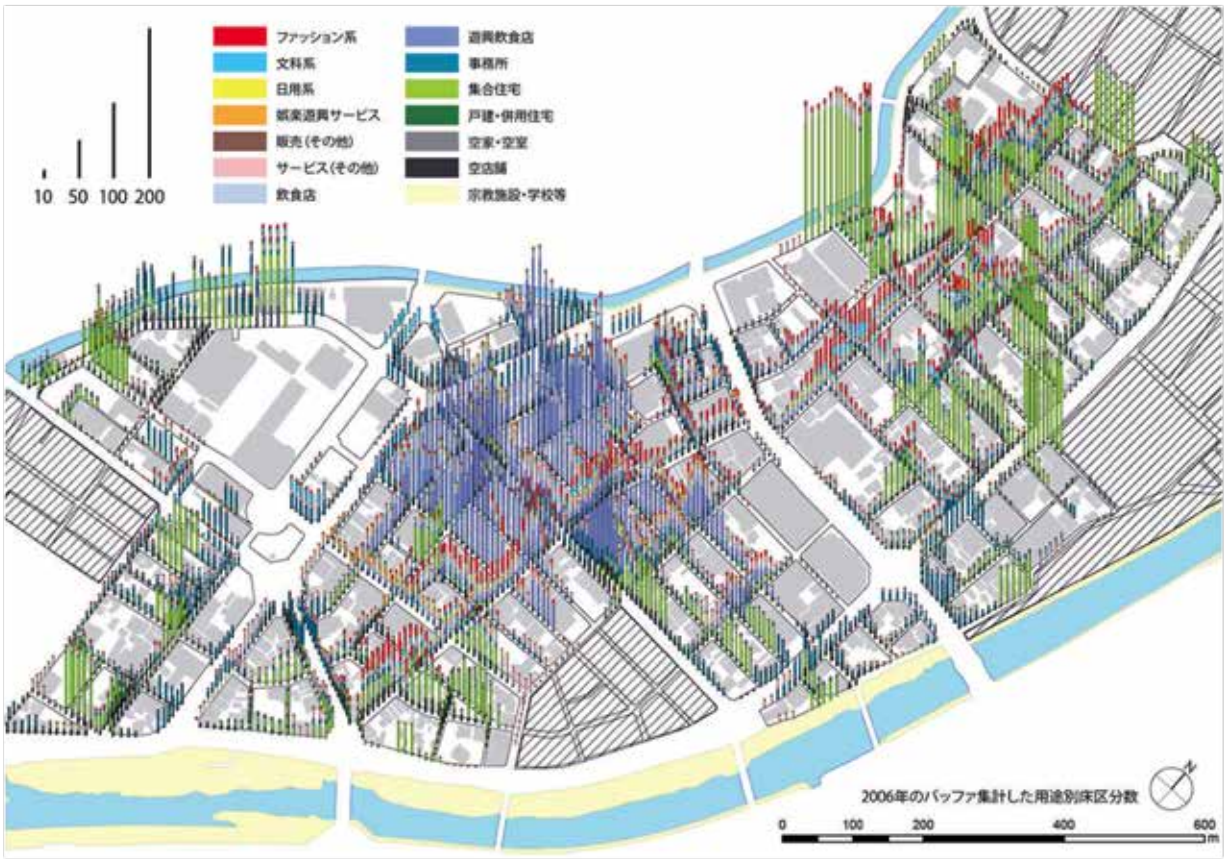
▲報告する林恭生 岡山市交通政策課長

■3-2-4　GISを使った都市計画

日　　時：平成27年11月27日（金）18：00～20：00

場　　所：西川アゴラ

岡山市と類似の都市規模、都市特性を有する熊本市におけるGISを活用した都市解析の事例を、熊本大学の研究成果から紹介した。岡山市役所職員、岡山大学学生ら20人が参加し、都市の機能集積やまちなかのでの人の回遊行動、都市全域の生活利便性の評価などの方法を学んだ。また、今後の岡山市におけるGISの活用促進について意見交換した。



3-3　学都チャレンジ企画

まちなかキャンパス事業の学都チャレンジ職員･学生企画とは､学生や教職員がキャンパスの外に出て、企業や行政、NPO、地域の方々との交流や対話を通して、地域課題解決の手助けや岡山を魅力的にするためのアイデアを実践するものである。学生は、教室では学べない体験を通して、また、成果を挙げるべく責任を持って活動することで、実践人として成長することを目的とする。

受け身の学びではなく、自ら学ぶ環境を提案し、それを試すことにより、岡山大学を多様な学び方と機会にあふれた大学にするためのチャレンジを支援する。

平成27年度は職員企画１企画、学生企画10企画が採択された。

■職員企画

番号	申請者	企画名
1	工学部創造工学センター技術支援部門	グローカルな小学生向け科学実験教室の実施

■学生企画

番号	申請者・申請団体	企画名
1	おかやま百年構想	おかやまスポーツ百年構想プロジェクト
2	社会科教育学研究室	学生と市民が語り合うティーチイン岡山
3	まちづくり研究会	まちけん'15－地域創造プロジェクト－
4	国際医療勉強会ILOHA	ILOHA STUDY PROJECT ～岡山で学び、岡山に還す～
5	めめも会	大学生の考える「よりよく生きる」プロジェクト －地域で語り合い、発信する「死生観」－
6	岡山大学学生取材班	SNSで岡山大学や岡山を盛り上げる！
7	おかやまバトン	被災地の子ども受け入れプロジェクト
8	Li☆Luck	岡山大学 七夕祭
9	岡山医学生学会COMEs全国医学生クイズ大会設置準備委員会	全国医学生クイズ大会開催に向けて
10	ESDグローカルCafé	ESDグローカルCafé

平成27年度の学都チャレンジは、学生企画10、職員企画１を採択した。従前に比べ件数が減ったが、その中にあっても新規の企画を２つ採択した。一方、満月BAR学生実行委員会、MACHI FESは、本事業開始当初から支援してきた団体であるが、活動も安定し、備品も揃ってきたことから金銭的支援は必要ないと判断し本年度は採択しなかった。

今後の事業のあり方を検討するために、本年度は、当センター教職員がチャレンジ企画の現場に参加し、学生たちの様子を観察した。その結果、多くの活動は、学生たちの自主的運営の下に活発に行われ、地域行事として定着しつつあり、学生自体が地域を構成する一員として期待されていることが再確認された。活動に地域の人を巻き込むことや、活動が新聞等に取り上げられることで大学のPRにもなっている。特に、職員企画のPR効果は特筆すべきであろう。他方、学生が自らの楽しみを優先しすぎた場合、地域の期待とのズレが大きくなり、双方にフラストレーションがたまることもある。討論や対話を中心とする活動では、そのテーマに関して知識が浅い中で、討論の雰囲気だけを楽しむといった印象を受ける場面もあった。

学生企画については、これを支援することで、岡山大学に「学生同士が学び合う文化」を創造するきっかけになってほしいと期待する。その意味で、支援対象団体の安定的存続と、教職員によるさらなる教育的関与が必要と考える。例えば、成果発表会のワークショップにおいて、教職員と対話する中で、学生自身が、活動を通した自分の成長を言語化することができていた。本事業は、このような目の届く関係の中で学生を指導し、大学の地域貢献、PR効果なども企図した戦略的な事業展開を検討する時期に来ている。

▲ワークショップの様子

＜成果報告会 ワークショップのまとめ＞

●教室で学ぶこととの違いは失敗しても自分達でフォローしなければならない。ゆえに本気で取り組める。そこから処世術とか交渉力が身に付く。

●高齢者向けのカフェを作り、地域で交流のない高齢住民同士の交流を図ろうとつなぎ役をした。こんな体験は教室では実現できない。

●大学生の教室での学びは受動的である。学都チャレンジは現場で主体的に動くことで、専門的な学び、実践することを学ぶ。この受動と能動の２つをリンクさせることでより高いレベルで成長できる。

●学校での講義と学都チャレンジでの実践活動を経て、学校での学びに帰ることで学びに深みがつく。

●地域に関わることで課題発見から掘り下げていくと、結局アカデミックなことに突き当たる。学都チャレンジで活動することで、大学で学びたいことを再認識、実感させてくれる。

●活動中の課題は、メンバー内で幹部、１回生の立場の違いによって方向性のずれが生じる、参加者のニーズに合ったものができているか、ということである。
●授業は使わない知識が多く、大学はディープな知識を出す場所である。学都チャレンジを学生みんなに認知してもらい、活動して得たことを授業にアウトプットできる授業があれば、もっと学業に深みが出る。

（学外者・学内教職員から）
●自分の大学時代は自分のやりたいことを学べるところはフィールドにはあった。この事業で、学生は試行錯誤をすると思う。大人としては、学生の活動から専門性へつながる関係への出口を学生に作れるようにしたい。
●目的を持った大学生がいるということが楽しみである。

■3-3-1　職員企画

＜職員企画①＞

グローカルな小学生向け化学実験教室の実施

工学部創造工学センター　技術支援部門・技術長　小郷　義久

■**企画概要（目的）**：岡山大学は、スーパーグローバル大学として世界で活躍する実践人の育成を行っている。これまでに工学部創造工学センター技術支援部門では異分野融合の教育活動の一環として国際交流協定校との実験教室を中国と日本で共催し好評を得ており、各種メディアで取り上げられてきた。

本企画では、国際交流協定校から世界的に活躍している女性教員を招聘し、日本語・英語・中国語で出前実験教室を岡山市内で共催することを目的とした。また、岡山大学からも中国の国際交流協定校へ担当者を派遣し、国際協定校と共催で実験教室を開催することで日本と中国における実験教室のニーズの違いを検証することで今後の国際実験教室への参考とする。

これらの社会的活動は、岡山大学発信の地域へのグローバルな実践知の涵養に他ならず、次世代を担う若者の育成に貢献できる。工学部創造工学センター技術支援部門のこれまでの活動（下記web参照）をもとにしており、今後の地域貢献においても大いに期待される事業のひとつである。

http://www.eng.okayama-u.ac.jp/intro/department/innovation/demaetaiken.html#27

男女共同参画室との共催として予定しており、自然科学系の女子修士学生のTAのサポートを受けることにより､理系の女子修士学生の進学率の高さを県内外に示すねらいもある。岡山大学･国際同窓会も後援することで、岡山大学がグローバル化を牽引する国立大学として活動を行っていることも広報する。

■**実施事項：**　本年度の具体的な実験内容としては、身近な“水の浄化を体験しよう”と題した化学試薬を用いる実験や歯科に多く用いられているUVレジンを用いたチャーム作り、さらには、大学で学ぶ遷移金属を用いたガラスの着色機構を基とした“ガラス細工にチャレンジしよう”を実施し、大学の研究室等のように保護メガネや手袋を用いることで参加者や保護者の参加を促した。説明には、動画を用いた解説やプレゼンテーションを用いた。参加者は岡山大学のwebページで募集を行い、県内外の小学生を対象とした。

1）2015年9月：中国・杭州・長江実験小学校5年生35名

“水をきれいにしよう”　世界で用いられている凝集剤で水の浄化を学ぶ。

2）2015年9月：中国・厦門・演武小学校5年生50名

“水をきれいにしよう”　世界で用いられている凝集剤で水の浄化を学ぶ。

▲中国・実験教室の様子

3）2015 年 10 月：岡山市・サイピア（対象・４年生以上）32 名

“水をきれいにしよう” 世界で用いられている凝集剤で水の浄化を学ぶ。

4）2015 年 10 月：岡山市立御野小学校５年生 33 名

“水をきれいにしよう” 世界で用いられている凝集剤で水の浄化を学ぶ。

5）2015 年 12 月：岡山大学大学院自然科学研究科（対象・４年生以上）14 名

“クリスマス観察会”４次元デジタル地球儀と天体ドームを用いた冬空観察会を行う。

6）2016 年２月：岡山市・サイピア（対象・３年生以上）20 名予定

”ガラス細工にチャレンジ”他、日常では体験しづらい日本文化に根ざした実験教室を行う。

いずれの実験教室も大変人気であった。日本で行う教室では中国語で話しかけられたり、中国で行う教室では日本語で話しかけられたりとスタッフが笑顔になる場面もあった。

▲天体ドームでの観察

▲ガラス細工にチャレンジ

■**成果（今後の展開）**：下記のように多くの取材を受けたり、活動報告を website で行った。

中国・長江実験小学校：

http://mp.weixin.qq.com/s?__biz=MzAxMDA4NjY1Ng==&mid=209826280&idx=2&sn=e2833bcff38127addf70081f006d04e3&scene=1&srcid=0922TgfRbnfDo82Egun0KXOZ&from=singlemessage&isappinstalled=0#rd

岡山大学ニュース（中国での活動）

http://www.okayama-u.ac.jp/tp/news/news_id4997.html

岡山大学ニュース（日本での活動・日本語版）

http://www.okayama-u.ac.jp/tp/news/news_id5048.html

岡山大学ニュース（日本での活動・英語版）

http://www.okayama-u.ac.jp/eng/news/index_id5048.html

さくらサイエンスプラン facebook

https://www.facebook.com/sspjapan/posts/529684850525316

文教ニュース　10月12日号（2363号）、45ページ：

グローカルな日中協定校実験教室開催を中国で実施

文教ニュース　10月26日号（2365号）、38ページ：中国・厦門大の教員、修士学生と国際交流

今後も継続して“グローカル”（グローバルな視野でローカルに根付く）を意識した化学実験教室を国際交流協定校と共催することで、岡山大学発の地域活動に少しでも貢献したいと考えている。

■3-3-2　学生企画

＜学生企画①＞

おかやまスポーツ百年構想プロジェクト

おかやま百年構想　池田　遥祐

■企画概要（目的）：

○概要

「おかやまスポーツ百年構想プロジェクト」は主に下記の２つの企画によって構成される。

①奉還町ファジストリート計画

奉還町商店街において、ファジアーノ岡山を日常的に感じられる雰囲気づくりやイベントの開催を通じて、商店街の通りを“ファジストリート”にしようという企画。市民の日常に地元クラブの文化が定着すれば、地元への愛着や新たなコミュニティの醸成につながると考える。

②岡山シーガルズ応援プロジェクト

女子バレー・岡山シーガルズの岡山でのホームゲームやサマーリーグの際に、関連イベントをスタジアムだけでなく、奉還町商店街をはじめ、“まちなか”で行うことで、市民に新たなスポーツ文化を発信し、地域の活性化を図る。

○目的

「おかやまスポーツ百年構想プロジェクト」の目的は、岡山市に存在する地元プロスポーツ２クラブの魅力を試合会場にとどまらず、商店街といった“まちなか”から発信することで、スポーツによる地域全体の活性化を図り、それを百年続くまちのスポーツ文化としてデザインすることである。

2013年度よりファジアーノ岡山と連携した企画を行ってきたが、今年度より岡山シーガルズと連携した企画も合わせて行うことで、種目の垣根を越えて、より幅広い層の市民に対しスポーツの魅力を発信できると考えている。

■実施実績：

①奉還町ファジストリート計画

・ファジアーノタペストリー（３月～11月）
・瀬戸大橋ダービーイベント（11月１日）
・ファジアーノ応援絵馬（３月～11月）
・ファジアーノイラスト展（11月８日～14日）
・最終戦パブリックビューイング＆トークショー（11月23日）

②岡山シーガルズ応援プロジェクト

・サークルメンバーで練習見学＆監督にご挨拶（平成27年３月30日）
・商店街でのV.サマーリーグのPR活動＆当日の会場ボランティア（６月~７月）
・シーガルズ写真展＆掲示板（７月３日）
・岡山駅西口飲食店マップ（７月）
・シーガルズを語る会（７月３日）
・シーガルズタペストリー除幕式（10月27日）

■成果（今後の展開）：

○成果

・１年生をはじめメンバーが増え、活動の範囲が広がった
・活動が定着し始め、学内外での報告やメディアを通じて、多くの方に活動を知っていただけるようになった
・ファジアーノ岡山に加えて岡山シーガルズと連携した活動を行うなど、関わるスポーツ関係者の方が増えた

○今後の展開

・タペストリーによる情報発信や応援絵馬イベントなどを継続
・活動メンバーを増やすことや、市民・サポーターとの輪を広げる
・将来にわたってサークルの活動を続けるための土台固めを行う
・サークル内でスポーツやまちづくりを学ぶ勉強会を行う
・他のスポーツクラブとの連携など、活動の範囲を広げる
・おかやまスポーツプロモーション研究会（SPOC研究会）への参加を継続し、学生ならではのアイデアや働きかけを行う
・地元の高校生と連携したタペストリー設備の改修作業
・サークルの活動を紹介する空き店舗ポスターの作成

＜学生企画②＞

学生と市民が語り合うティーチイン岡山

社会科教育学研究室　大西　智也

■**企画概要（目的）**：ティーチイン岡山とは、大学生と市民が集まり、身近な社会の出来事や話題の社会問題について自由に話し合い、互いの意見を交換する場です。

市民が一緒に学ぶことができる教育プログラムを将来教職を志す学生と市民の協働作業で開発・実施を行うことで地域が一体となって支える教育のあり方を示します。

岡山をよりよい地域にしていくために解決すべき課題を子どもと市民がそれぞれの視点から発見し、解決への見通しを持つことを目指しています。このような教育プログラムを開発することで今の岡山を支える市民と、将来社会の担い手となる子どもたちが一緒に岡山について考え、また、学生と市民が協働して開発に取り組むことは、地域が一体となって支える教育の在り方の具体的な姿を示すものとなると考えています。

■**実施実績**：

今年度の主な取り組み

①６月５日　第13回ティーチイン岡山（日中関係）約30人
・ゼミの留学生５人が中心、他学部の留学生にもよびかけ

②６月26日　第14回ティーチイン岡山（地域活性化）約30人
・イオンや後楽園、商店街でインタビュー調査

③８月28日　ティーチイン倉敷中央高校（倉敷教育サミット）約100人
・明るい選挙推進協議会とコラボ、啓発用の投票用紙と本物の投票箱

④12月13日　第15回ティーチイン岡山（交通ルール、マナー）　約30人
・岡山県警交通企画課で事前にインタビュー、岡山県・岡山市に提出

⑤12月18日　ティーチイン倉敷中央高校（スマートフォン利用）　約100人
・同校の高校生からスマホの問題を聞き取り調査、教育委員会に提出

⑥１月22日　第16回ティーチイン岡山（森永ヒ素ミルク中毒事件）　約30人
・森永ヒ素ミルク中毒事件資料館館長　岡崎さんとコラボ

■**成果（今後の展開）**：

・ティーチイン岡山およびティーチイン倉敷中央高校を年に６回開催
↳どの回においても市民を含む30名以上の参加者を集めることができた。

・倉敷中央高校でティーチインを開催
↳高校生の主権者教育に岡山大学として地域貢献することができた。
（18歳選挙権引き下げという背景）

→来年度以降も継続的に活動を行っていく。

実際の活動の様子

６月５日　第13回ティーチイン岡山（日中関係）の時の写真です

参加者は1班5～6名のグループに分けられます。手前のグループは5人グループ（学生3名、高校生1名、市民1名）で、日中関係の問題点についてのプレゼンを聞いている時のものです。

話し合ってまとめた意見を班で1つのホワートボードにまとめて最後に全体の前で発表します。この班は高校生の2人が発表してくれています。他の班の参加者も発表を真剣に聞いています。

▲倉敷中央高校でのティーチインの様子

＜学生企画③＞

まちけん’15ー地域創造プロジェクトー

まちづくり研究会　川下　勝也

■**企画概要（目的）**：大学と地域の協働を考え、大学生が主体的に企画した計画のもと、農村などの若者が少ない地域に実際に入り、地域の方々と協力しながら地域活動を行うことによって、大学生が成長しながら地域を活性化させることを目的とする。

■**実施実績**：

実施日	内　　容	参加人数
４月20日	活動報告会（裳掛）	12人
５月17日、24日	畑整備、サツマイモ植え付け（裳掛）	14人
６月21日、28日	空き家清掃（裳掛）	10人
７月12日	なかよしウォーキング打ち合わせ（山手）	10人
８月８日	サツマイモ畑抜き（裳掛）	７人
９月７日～24日	合宿（空き家清掃、企画打ち合わせ、裳掛小夏祭り出展など）（裳掛）	21人
９月26日	コープフェスタ出展（裳掛）	５人
10月４日	なかよしウォーキング（山手）	22人
10月11日	サツマイモ収穫（裳掛）	10人
11月23日	裳掛地区ふれあい茶会（裳掛）	14人
12月６日	コープ収穫祭出展（裳掛）	５人
12月16日	瀬戸内市長への活動報告（裳掛）	２人
12月19日	あば村視察（裳掛）	11人
12月20日	拠点名前決めワークショップ（裳掛）	11人
１月16日	どんど祭り参加（裳掛）	13人

原則として毎週日曜日にミーティングを行っている。

今年度は地域住民から集めた意見を基に、以下の５つの活動を中心に行った。

●**てらこや（裳掛）**

小学生対象の学習補助活動。週１回のペースで毎回２名の学生を派遣。

●**耕作放棄地対策（裳掛）**

年間を通してサツマイモを生産。苗の植え付け、草取りをし、地域の方とともに収穫祭、食事会を行う。

●地域イベントへの参加（裳掛）

夏祭り、どんど祭り等で学生ブースを出展

●空き家再生（裳掛）

古民家を活動拠点となる場に再生し、ミーティング、移住体験などが出来るようにする。

●地域包括ケアへの参加（山手）

10月のなかよしウォーキング、３月の福祉フェアにおいて、企画段階から地元社会福祉協議会と協働し学生発案企画およびブース出展を行う。

■成果（今後の展開）：

●てらこや

年間を通して小学生の放課後学習補助活動を行った。ここで培った人間関係は、てらこやのみの活動を超えて、地域外の人との協働や地域の活動への積極的な参加にもつながった。来年度も続けていく予定である。

●耕作放棄地対策

サツマイモを地域の方と協力して生産し、空き家再生企画の際に食事会に用いた。

●地域イベントの参加（裳掛）

前年度以上に多くのイベントに積極的に参加し、参加するだけでなく学生独自の出展を行うことができた。

●空き家再生

学生が地域における拠点として、十分に活動できるように地域の方と協力して古民家を再生し、イベントを行うことができるまでになった。

●地域包括ケアへの参加（山手）

イベント計画段階から学生が参加したことで、新しいレクリエーションなど今までになかったアイデアを出すことができた。イベント当日のウォーキングでは地域の方々の先導、学生が主導で企画した様々なコンテンツを提供することができた。

また、イベントまでに学生が地域を学びに行き、入念な事前準備を行った。

◆来年度に向けて行うこと

●活動の中心を現在の２・３回生から１回生に引き継ぎ

●今年度行った企画を地域の方々と振り返る機会を設ける

▶来年度も続ける企画、改善して行う企画、新たな企画の検討

＜学生企画④＞

ILOHA STUDY PROJECT
～岡山で学び、岡山に還す～

国際医療勉強会ILOHA　網師本健佑

■企画概要（目的）：テーマは「戦争と平和」

本企画は将来国際医療を志す学生たちが近現代の国際情勢についての学びを深め、また命の重みを知る医療者の立場から戦争と平和について考えていくことを目的としています。

昨年度で終戦から70年の年月が過ぎました。時代は移り変わり、日本は急速な復興と発展を遂げて、一時は焼け野原になった土地も平和な近代都市に姿を変えました。しかし、それと同時に戦争と平和の概念を考える機会を失ってきたとも言えます。戦時中を知る人々は80代を超え、その生の貴重な声はどんどんと失われていってしまっています。日本の国民のほとんどは「戦争を知らない人」になってしまいました。

安全保障関連法案に揺れた2015年、若者を含めた多くの国民が「平和とは何か」について考え直し始めました。さらに日本の外に目を向けてみれば、国際テロ組織の台頭、東アジア内の緊張、中東情勢不安、難民問題など、私たち人間社会は戦争と平和に関する問題に取り巻かれており、今後の発展の危機に瀕しているとも言えます。平和構築に対しては様々な意見の人がいますが、みな日本、そして世界の平和のためを思っていることに変わりありません。私たち学生が多様な意見やものの見方を知りながら、どのようにして平和を構築、維持していくかを学習し、議論していくことには大きな意義があります。

■実施実績：

国際医療勉強会ILOHAでは今年度、「戦争と平和」をテーマに４月から１年間活動しています。毎週木曜夜に勉強会を開催しており、これまでに前期には「安全保障関連法案」、「戦争と医の倫理」、「性と平和」、「戦争の心理」、「ISIS」、「ペリリュー島の戦い」、後期には「北朝鮮」「ロシア」「国際医療NGO」などをテーマに実施してきました。さらに、８月19日～23日には夏プロジェクトとしてパラオ共和国・ペリリュー島、ゴミ処理センター、国立病院、小学校、日本大使館を訪問し、現在と過去から平和について学習しました。その集大成として９月23日には50人規模の報告会を開催しました。また、10月24日には元陸軍戦闘機パイロットの岡本巌さんによる講演会を開催し、16名が参加しました。岡本さんには、当時の体験を話していただきました。

開催した勉強会テーマは以下の通りです。（各参加者20名程度）

前期…「憲法」「戦争と医者」「戦争の心理」「性と平和」「ISIS」「平和を言葉にする」「パラオ」

後期…「安保法案」「難民」「人工知能」「PKO」「ロシア」「北朝鮮」「サイバーテロ」「国際医療NGO」

▲夏プロジェクト報告会の様子

■成果（今後の展開）：

今年度のテーマを１年間勉強し続けてきたことにより、昨年度にくらべ部員たちの国際情勢に対しての知識、平和という概念の根本的な考えが格段に深まりました。部内の変化としては、当初「平和」という言葉を、非現実的なものであるとか、単なる「戦争」の対義語（いわゆる消極的平和）と認識していましたが、人権、幸福などによって実現する私たちの日々の生活の中で感じる身近な概念（いわゆる積極的平和）として意識し始めるようになりました。また、戦争や政治的対立には様々な認識が隠れており、複数の視点からの見方が多くの人に求められていることを学びました。例えば太平洋戦争であれば日米両国、慰安婦問題であれば日中韓、ISISであればイスラム教過激派などの各主張を取り入れるようにし、各視点から見たときそれぞれの「正義」があるということを理解するようになりました。特にパラオでの夏プロジェクトでは、これまで知らなかった教科書に載っていない日本、アメリカの太平洋戦争の歴史、その当時の双方の認識について深く学習することができ、第二次世界大戦の歴史の認識の仕方が変化しました。

地域の変容としては、先日行われた夏プロジェクト報告会において、参加者同士でトークセッションを行ったことで、学生と地域住民の方々が顔を向き合わせ、学びを深めました。報告後のアンケートでは、「歴史を知ることの重要性を再認識し、戦争と平和には様々な見方があることを学んだ」という感想を頂きました。

来年４月には一般に向けて50人規模の報告会を行います。この報告会では１年間の活動報告等を行い、集客層のうち比較的少ない学生や若者が参加したくなる企画や、手に取りやすくかつ永久に残せる形の報告書の作成など、部員内から他の学生と、そして市民と学びを共有していく予定です。

＜学生企画⑤＞

大学生の考える「よりよく生きる」プロジェクト
～地域で語り合い、発信する「死生観」～

めめも会　長崎　　歩

■企画概要（目的）：本企画は、①現場への見学･訪問のための事前学習、②現場の見学･訪問、③見学･訪問後のフォローアップ（学びを深める交流会講演会など）をワンセットとし、活動を実施する。

フォローアップ企画は、他の学生や一般の方々が参加できるようにし、地域の人々と死生観について学び、考えを共有し語り合う場を作り出す。また活動の成果を発信する機会として、参加学生が「大学生が考える死生観」について他の学生や一般の方々に話す会を設ける。

■実施実績：

1）６月３日　中国人留学生との交流会（８人）
2）８月27日　広島訪問（10人）
3）９月４、５日　犬島訪問（８人）
4）10月25日　広島診療所の医師である白神先生をお招きしての講演会（約10人）
5）SNSでの活動報告とフォローアップ（振り返り）の実施

▲中国人留学生との交流会
（スカイプも用いて遠方の参加者も交流会に参加できるように試みた）

▲犬島訪問（多くの住民の方々に参加して頂いた）

▲講演会の様子

■成果（今後の展開）：

1）自国の価値観で他国の人々の生き方を見るのではなく、他国の人々の生き方を学び、その中から彼らの信念を学ぶことが出来た。今後はより多くの留学生と交流を持つことで、より広い視野で「生きること・死ぬこと・死生観・看取り」を考えることが出来ると考える。加えて、自国の価値観を改めて見つめ直すきっかけにもなると考える。

2）島唯一の医師である白神先生の、島民の生活を近くで見守る医療者の立場として単に病気を診るだけでなく島民の生活や希望に沿った医療を提供する姿勢や、島の住民自身が地域を積極的に盛り上げようとされている姿をみて、常に地域のために何ができるかを考えそれを自分の手で行動に移すことが必要だということが分かった。また、交流を通じて島の住民の方々に、島での生活や医療を再考してもらうきっかけとなった。

3）２度目の訪問であっても新しい価値観や生活について知ることができた。学生と住民のつながりも深くなり、交流がしやすくなったと感じる。今後も交流を継続していきたい。

4）離島での医療について地域に発信することを目的に講演会と交流会を実施した。白神先生は島唯一の医師であるとともに、島の住民である。介護を必要とする高齢者を負担と思うことなく、いてくれるだけで良いと話されていて、今後医療者として働いていくときにこのような考えをもって人々に関わっていきたいと思えるようになった。また私たちが普段生活しているところとは違って、島は住民や物資が少ないからこそ人と人とのつながりが深く、自然と一体となった生活があり、健康に生活することの新しい概念を知る機会となった。

5）SNSを通じて活動の共有を図った。めめも会の活動をよりよくするために、SNS等を利用することは必要である。

＜学生企画⑥＞

SNSで岡山大学や岡山を盛り上げる！

学生取材班　時長　恭平

■企画概要（目的）：大学内の活性化と大学外へのPR

岡山大学内や、岡山大学の関連施設、大学内外で活躍する人などの情報を発信することにより、情報をより多くの人々に伝え、岡山大学の活性化を図り、岡山大学というブランドを打ち立てる。

■実施実績：岡山大学の情報発信/岡山大学内の学生や教員への取材/広報誌の作成など

昨年度に引き続き、大学内の施設や、大学外の関連施設。

また岡山大学で活躍する人などに、取材を行った。

例→トビタテ留学ジャパン地域人材コースで留学を決めた岡大生

→AGORA学都チャレンジ学生企画の団体への取材（ILOHAやおかやまバトンなど）

また、今年度は、岡山大学の広報課と連携して、広報誌イチョウ並木の記事作成や、山陽新聞社の記者の方をお呼びし、カメラのスキルアップ講座などを開催した。

▲スキルアップ講座の様子

■成果（今後の展開）：投稿頻度の向上と個々のスキルアップ

メンバー個人の都合などにより投稿頻度や、投稿の質を上げるための講座などに全員参加が叶わなかった。参加したメンバーと参加していないメンバーとの間で技術に差が生まれたり、それに伴い投稿の回数が人によって大きく変わってしまった。

来年度からは、現在いるメンバーがいなくなったり、忙しくなったりするメンバーもいるので、今までよりも早めのスケジューリングを行い、定期的投稿を行う。

広報課と連携し、写真の講座や、記事作成の講座などを開催し、メンバー各人の技術のレベルアップを図る。

学生取材班としての投稿の形や、学生ならではの視点を入れて、味を出していきたい。

＜学生企画⑦＞

被災地の子ども受け入れプロジェクト

おかやまバトン　森田悠太郎

■企画概要（目的）：被災地の子どもたちを岡山に招待し、のびのびと活動し岡山を満喫してもらうことで一生心に残るような思い出をつくってもらうこと。また、岡山からみんなのことを応援している人がこんなにもいるんだよということを子どもたちに伝え、今後子どもたちの成長の何か支えになれたらと願う。岡山と被災地とのつながりが今後もずっとずっと続いていくためにも、そのつながりをより広く、強いものにしていくことも目的のひとつである。

■実施実績：

平成27年８月５日（水）～８月10日（月）の６日間、福島県で日本舞踊を学ぶ「里の子会」の子どもたち10名（小学校４年生～高校３年生）を岡山に招待するプロジェクト「ありがとうを届けよう　笑顔の華が盛りだくさん合宿2015」を実施した。準備や期間中の日程は以下のとおりである。

８月５日：岡山到着、ウェルカムパーティー、うらじゃ総踊り@岡山大学学生会館
８月６日：岡山大学清掃活動、日本舞踊練習、かけはしサミット、星空カフェ
８月７日：（美作市上山へ移動、）泥遊び、プール、BBQ、いちょう庵で休憩、
　　日本舞踊練習、流しそうめん、花火、湖畔コテージ泊
８月８日：日本舞踊発表会@上山神社、（岡山大学へ移動、）おかバト塾
８月９日：日本舞踊練習、日本舞踊発表会@イオンモール岡山、フェアウェルパーティー
８月10日：大掃除、岡山発

参加者　おかやまバトンメンバー　32名
　　当日スタッフ（学生など）　38名
　　教職員、外部の方々

メイン企画として、美作市上山の上山神社とイオンモール岡山で日本舞踊発表会を開催した。上山神社の発表会では、上山の地域の方々を中心に大勢観に来てくださり終始あたたかい雰囲気に包まれた。イオンモール岡山での発表会では中継もあり、本当にたくさんの方々に足を止めて観ていただくことができた。当プロジェクトのコンセプトである「発信」という点では、最も意義のある活動となった。

またその他にも、うらじゃ連の方々を岡山大学に招いての総踊りや岡山工業高校の学生との交流会（かけはしサミット）、棚田再生で地域おこしの活動に力を入れている美作市上山での泊りがけの活動など、子どもたちと一緒に岡山での夏を存分に満喫した。

▲上山での活動

▲イオンモール岡山での発表会

■成果（今後の展開）：

おかやまバトンは東日本大震災の発生した2011年より毎夏、里の子会の子どもたちを岡山に招待しており今回で５回目となる。子どもたちは2013年に、自分たちもおかやまバトンのみなさんのように被災地のために何かしたい、被災者から支援者へ変わろう、と「ふくしまバトン」を設立。被災当時はまだ小学生や中学生だった子どもたちも今では中学生、高校生となり、新たにできた後輩の手を引きながら、自分たちで被災地のためにできることを考え活動を始めている。そうした中で、いつまでも支援され続けていてはいけない、今度は自分たちが福島の力になりたい、と震災から５年目を迎える今年子どもたち自らで会議をし、支援者として前向きで大きな一歩を踏み出す決断をした。それは、受け入れプロジェクトとしてこのような形で岡山に来るのは今回で最後にしたい、というものだった。もちろん寂しい気持ちも少しあるが、これまで５年間の活動がこうした子どもたちの想いや成長につながっているのかなとうれしく思う。

受け入れプロジェクトとして福島里の子会の子どもたちを岡山へ招待するのは今回で最後となるが、これからは支援者同士として、形を変えながらつながり続けていきたい。子どもたちは私たちにとってお互い尊敬し合い高め合える、家族のような存在であり、このつながりは本当にかけがえのないものである。これからももっともっと岡山と被災地とのつながりを広く、深く、強く、そして長くしていきたい。

＜学生企画⑧＞

岡山大学　七夕祭

Li☆Luck　中島　一博

■企画概要（目的）：「岡大から岡山を盛り上げる」をテーマとして、地域交流・学生交流を目的としたイベントの企画の一環。七夕祭りを企画し、それを通して大学生と地域の人々との交流を図る。

■実施実績：

７月８日（水）　大学会館ホール、ホール外駐輪場

・岡北保育園園児たちによるうらじゃ演舞
・地域の子どもたちによるダンスパフォーマンス
・大学生うらじゃチームによる演舞
・ダブルダッチ
・ビリペル演奏
・ビンゴ大会

また、屋外では

・キャンドル点灯
・屋台、子ども向け遊びコーナー
・笹飾り＆短冊コーナー　　を設置しました。

■成果（今後の展開）：

来客者数500人

雨天の場合を考慮し、例年は屋外に設置していたステージを、屋内に設置。音響設備等の利用が容易になったため、ステージイベントとしては有効だと考えられるが、祭りをしている雰囲気は屋外ステージで行った方が出るのかもしれない。地域の方からのうれしいお言葉などをたくさんいただいたこともあり、今年度のイベントの経験を活かし、来年につなげたい。

＜学生企画⑨＞

全国医学生クイズ大会開催に向けて

岡山医学生学会COMEs全国医学生クイズ大会設置準備委員会　白井　友佳子

■**企画概要（目的）**：学内外の企画に積極的に参加し、外との交流を広めるとともに企画開催のノウハウを学び、最終的に全国レベルの学生クイズ大会を開催する。

■**実施実績**：

●2015年11月21日　京都大学吉田キャンパスにて行われた、京都大学11月祭一般企画「医学生、inochiを語る。」において大塚勇輝が、委員会活動の紹介および大会開催にあたる広報と参加者募集、「医学生、inochiを語る。」企画実行委員会のメンバーへ活動内容紹介、現状報告、大会に向けた打ち合わせを行いました。

また、京都大学11月祭の他の医学生が主催する企画（「人体からの脱出」など）の視察を行いました。

●2015年12月19日　徳島にて行われた、第４回医学研究フォーラムにおいて、中村薫がクイズ大会の広報プレゼン、他の参加者との交流を行いました。

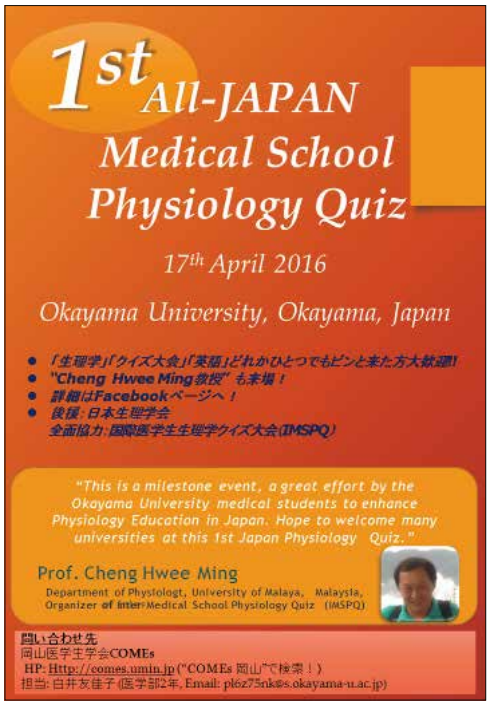
●委員会メーリングリストを立ち上げ､各自の活動状況の報告の場としました。（先生や外部の方々とのメールを転送する、意見交換など）

●全国医学生生理学クイズ大会を2016年４月17日に開催することを決定。

正式な案内状を作成し、日本生理学会の正式な後援をいただきました。

大会のFacebookページなどを作成し、大会広報に努めております。

問題作成や大会開催ノウハウを、国際医学生生理学クイズ大会（IMSPQ）主宰のマレーシアマラヤ大学Cheng教授に連絡をとり、現在教わっています。



▲中村が行ったプレゼンのスライド

■成果（今後の展開）：

●開催する大会の名称を「第一回全国医学生生理学クイズ大会」に決定し、日時・場所を決定し確保しました。（４月17日、鹿田キャンパスマスカットキューブにて）

●参加者登録を現在行っており、今月末の締め切り後、参加人数を考慮に入れた具体的な話し合いをしていく予定です。

＜学生企画⑩＞

ESDグローカルCafé

ESDグローカルCafé　川田　　晃

■企画概要（目的）：ディスカッションを通して異文化理解を図る

リラックスした空間で多世代・多国籍な人とディスカッションを行う

持続可能な開発のための課題をテーマに設定

多様な文化的背景を持つ人々の交流の場である

■実施実績：カフェにてディスカッションを６回実施した

第１回目「多文化共生は可能か（2015.4.29.）」

第２回目「留学の意義（2015.5.28.）」

第３回目「開発途上国への支援の在り方（2015.6.27.）」

第４回目「映画『ダーウィンの悪夢』鑑賞（2015.7.29.）」

第５回目「フェアトレード（2015.8.21.）」

第６回目「絵から見る異文化（2015.9.18.）」

初回は10人程であったが、第２回、第３回は20人、30人と規模が拡大した。夏季長期休業中は留学生の母国への帰省やexchange studentの入れ替わりなどにより少人数での開催となった。

参加者層は日本人学生が５割程で、その他は留学生やカフェのお客さんを始めとする地域の人、市職員、国際協力NPO、他大学の教員、学生など様々である。

グループディスカッションを基本とし、会の最後に全体で共有するような形態を取った。可能な限り各グループに留学生と英語と日本語のバイリンガルの人がいるようにし、言語の違いがディスカッションの妨げにならないよう配慮した。

学術的な知識の獲得が目的ではなく、特定の誰かによる教授などではない。１人１人がテーマに対して自分の考えを持って他者と共有していく中で異文化に対する理解、ひいては自国の文化への理解を深め、地に足の着いた広い視野の獲得を目指す。

■成果（今後の展開）：

岡山における多文化共生促進の一助

メディア掲載

新聞　　第3種郵便物認可

岡山で毎月「ESDグローカルCafe」

多文化共生 理解深める

留学生や大学生らディベート

ESD（持続可能な開発のための教育）の視点で、多文化共生について考える交流イベント「ESDグローカルCafe」が、岡山市北区幸町の「Cafe kenya/326」で毎月開かれている。常連客の岡山大4年川田晃さん(21)と同店オーナーの井上満さん(45)が企画。毎回、一つのテーマをめぐって参加者がディベート（討論）し、異なる考え方や文化への理解を深めている。（鈴木麻美）

川田さんは、気軽に異文化交流ができる同大のコミュニケーションスペース「エル・カフェ」などに参加するうちに、ESDや国際理解教育への関心を深め、「身近に多国籍、多世代の人が集まる場所をつくりたい」と考えるようになった。青年海外協力隊員としてケニアで活動した経験があり、昨年、岡山市で開かれたESDに関するユネスコ世界会議に、ボランティアで事務方として携わった井上さんが共感し、実現した。

イベント名には、世界と地域を結びたいという言葉を入れ、4月思いから、「グローバル」にスタート。外国人留学生や主婦、大学生、（グローバルとローカルを組み合わせた造語）と市職員など、さまざまな立場の人が参加している。

「留学は意味があるか」について討論する参加者＝5月28日

2回目の5月28日は約20人が集まり、「留学は意味があるか」について「ある派」「ない派」に分かれて討論した。「ない派」は「語学はインターネットを活用すれば十分学べる」「留学先でも結局、日本人同士で集まってしまう」などと主張。対する「ある派」からは「現地に行かなければ分からないことがある」「新たな価値観や友人が得られる」といった意見が出た。

次回は27日午後7時から「開発途上国への支援のあり方」をテーマに開催。今後も毎月第4週に実施予定で、日時は開催約3週間前に同店フェイスブック（https://ja-jp.facebook.com/mitsuru0602inoue）で情報発信する。参加費はドリンク付きで500円。

川田さんは「討論を通じて参加者が多様な価値観を受け入れられるようになれば」と話している。イベントの問い合わせは同店（090-4691-0072）。

・山陽新聞　岡山都市圏版　2015年６月16日

・テレビ瀬戸内「アクション・未来を創るESD」http://bcove.me/k1onow80

・フリーペーパー　hugジュニ 2015年11･12月号 Vol.15

メディアを通して岡山における多文化共生の促進に微力ながら貢献した。また参加した留学生からも、日本人と社会的な問題などについて真剣に意見を交わすことは今までなかったため、いい経験となったなどの感想も出ている。

当団体の活動は以上であるが、同様の活動を高校生が企画するなど、本企画は確実に他の団体にも波及している。これをきっかけに、１人１人が国際社会の一員であることの意識を持ち、岡山において多文化共生がよりよい形で促進されることを願う。

4 シンポジウム・報告会など

4-1　国際学都シンポジウム「最新のフランスまちづくりを岡山に活かす」

日　時：平成27年５月15日（金）13：30～16：30
場　所：岡山大学国際交流会館
参　加：約80人（行政・教育・経済団体関係者、岡山県内の大学生、教職員）
主　催：岡山大学地域総合研究センター
共　催：岡山市、岡山経済同友会、岡山商工会議所、おかやまスポーツプロモーション研究会

地域総合研究センターは、学都のモデルとしてフランス・ストラスブールをベンチマークの１つとしている。シンポジウムでは、全体の司会進行は、当センター石丸香苗准教授が行い、荒木 勝・社会貢献・国際担当理事・副学長が開会挨拶をした。

続いて、日仏異文化マネジメントコンサルタントで、「ストラスブールのまちづくり」の著書でもあるヴァンソン藤井由実氏が「フランスと日本の都市交通政策地方創生への"考えるヒント"」と題して基調講演。都市と大学が一体となって進んだ都市交通政策で「人が住みたくなるようなまちづくり」を20年以上前から一貫して推し進め、今やフランスを代表する環境都市として“地方創生”を実現してきたストラスブール市について、まちの活性化を実現した取り組みや背景などを紹介。フランスの最新の都市交通事情の紹介と公共交通を活用した都市活性化政策を進める上での合意形成についての仕組みやプロセスを講話いただいた。

また、本学教員３名が登壇し、昨年度２月にストラスブールを視察した報告を行った。当センターの岩淵泰助教が、大学改革の観点からストラスブールの行政や経済界と一体となった学生のための特色のある大学づくりについて報告したほか、高岡敦史・教育学研究科講師が、ストラスブールと比較した岡山市におけるスポーツ振興のあり方について発表。当センターの三村聡教授は、伝統美とモダンな美が融合した建築を活かしながら、機能的で低所得者層対策まで見据えているストラスブールの都市交通政策と、本学での学都研究の展開について紹介した。

▲講演するヴァンソン藤井由実 氏

総括は、ヴァンソン氏から「岡山市都市交通政策」へのアドバイス、荒木理事から「地方創生と国際学都への道筋」についてコメントがなされ、ストラスブールの市民参加、スポーツ振興、公共交通政策について、広く市民や学生に参加を募り、岡山市の交通まちづくりに、その経験とノウハウを生かすことを目的として議論を展開した。

▲パネルディスカッション

4-2　センス・オブ・プレイス

日　時：2015年９月27日（日）14：00～17：00
場　所：西川アゴラ
参　加：約20名
講　師：マーク・レイクマン氏
　　（ポートランド市、シティ・リペア代表）
主　催：岡山大学地域総合研究センター
コーディネーター：
　　岩淵　泰（岡山大学地域総合研究センター助教）

パーマカルチャー、エコロジー、アートのそれぞれを融合させながら鮮やかにまちづくりの空間を再生させるシティ・リペア。その活動はアメリカとカナダに広がっている。シティ・リペア代表であるマーク・レイクマン氏を迎え、道路を市民の空間に変えるためのテクニックとその思想について講演を行った。

コミュニティ・デザインの実践と課題、その源泉はどのようなものか。サステナブルな岡山をつくるヒント はどこにあるのか。クリエイティブなプロセスを探った。

レイクマン氏は、徳島大学及び東京でも講演会に参加し、公共空間の重要性を説明した。

▲まちのデザインを考えるレイクマン氏と参加者

4-3　金沢・熊本・岡山三都市シンポジウム

日　時：2015年９月26日（土）～27日（日）
場　所：熊本市現代美術館アートロフト

本シンポジウムは、2005年に熊本市にて第一回が開催され、本年の熊本大会で通算７回目となる。三都市は、城下町、学都（旧制四、五、六高を基とする大学の立地）、藩政時代からの庭園、新幹線などの共通点をもつ地方中核都市であり、お互いに学びあい、都市づくりを進めていくことを目的として、連携してシンポジウムを開催してきた。各都市から大学、行政、経済界（商工会議所、商店街組合など）の三者の代表が参加することで、幅広いテーマで情報交換ができ、学生の実践的な学びの機会ともなっている。

平成27年度は、「水辺のまちづくり」を大会のテーマとした。各都市にはまちなかを流れる河川があり、川の活用や防災面から、長い歴史のなかで独特の都市が形成されてきた。近年は、国土交通省において、「ミズベリング」という河川空間の積極的活用策が推進され、身近な川への関心が高まっている。

大会初日の26日の午後は、各都市の大学生が河川とまちづくりに関する歴史や施策に関するプレゼンを行った。次いで、熊本市内の白川の周辺を４グループに分かれてまち歩きし、熊本市における水辺の役割や、川と市民の暮らしの関わりを学ぶとともに、水辺の魅力向上に向けた提案づくりワークショップを行った。

▲熊本市内でのまちあるき

２日目の27日は、前日に作成した提案の発表および講評があり、次いで、各都市の代表者が、それぞ

▲提案づくりワークショップ

▲学生の発表

れの水辺のまちづくりの取り組み、商店街の活性化などについて発表し、意見交換した。岡山大学からは、環境理工学部４年の竹原裕隆さん、吉松ひかるさんが発表した。岡山大学からは、このほかに、荒木勝（理事（社会貢献・国際担当）・副学長）、当センター前田芳男准教授、山田一隆准教授、ほか２人、さらに岡山市、岡山商工会議所、国土交通省岡山河川事務所からも参加した。

4-4　若者と政治シンポジウム－18歳からの選挙参加で明日の日本を創る－

日　時：平成27年10月21日（水）
場　所：岡山大学創立五十周年記念館
参　加：約420人（行政・教育・経済団体関係者、岡山県内の大学生、教職員）
主　催：岡山県、岡山県選挙管理委員会、大学コンソーシアム岡山、明るい選挙推進岡山県連合会
共　催：総務省、公益財団法人明るい選挙推進協会、一般社団法人国立大学協会
後　援：岡山県教育委員会

【内　容】

■ワークショップ：「18 歳選挙権を考える」

ファシリテーター
　前田　芳男
（岡山大学地域総合研究センター副センター長・准教授）

参加者：岡山大学、岡山理科大学、ノートルダム清心女子大学、岡山商科大学、山陽学園大学の学生計14人

■シンポジウム

開会挨拶：波田　善夫（大学コンソーシアム岡山第２期・第４期会長、岡山理科大学学長）
講　演Ⅰ：「18歳選挙権の実現を受けて」
　伊原木　隆太（岡山県知事）
講　演Ⅱ：「求められている若者の力」
　原田　謙介（NPO法人YouthCreate　代表）
パネルディスカッション：「18歳選挙権を考える」
パネリスト：伊原木　隆太（前出）
　桑原　敏典（岡山大学大学院教育学研究科教授）
　波田　善夫（前出）
　原田　謙介（前出）
　江利川　悟（岡山大学法学部　学生）
　藤岡　里彩（ノートルダム清心女子大学文学部　学生）
コーディネーター：荒木　勝（岡山大学理事（社会貢献・国際担当）・副学長）
閉会挨拶：岡本　研吾（岡山県選挙管理委員会委員長）

＝敬称略

若者の投票率低下が指摘される中、選挙権年齢を20歳以上から18歳以上に引き下げる改正公職選挙法が2015年６月に成立し、2016年夏の参議院選挙から適用されることとなったことを踏まえ、若者の政治参加促進の方策や主権者教育のあり方を検討することを目的に企画した。岡山県と大学コンソーシアム岡山が2015年８月に締結した地域社会の発展や人材育成等に関する包括協定の第一弾イベントであり、大学コンソーシアム岡山を構成する岡山県内の大学の学生によるワークショップとシンポジウムの２部構成で実施した。当センターは、岡山県と岡山県選挙管理員会から依頼を受け、企画段階から準備、当日の開催に至るまで中心的にかかわった。

シンポジウムに先立って行ったワークショップでは、ファシリテーターの前田芳男准教授の指導により、架空の某県議会議員選挙の候補者10人のプロフィールと選挙公約・政策等をもとに学生が選挙を疑似体験。自らの考えのみで投票した場合に対し、夫婦２人暮らしの年金生活無職72歳女性や自営業48歳独身女性といった特定の立場（年齢、職業、家族構成）になったことを想定して投票した場合では、候補者の得票数に違いが生じた。この違いの要因と政治参加することの意味や効果を学生同士で話し合った後、低迷する若者の投票率や若年層の人口推計のデータも交え、今回の18歳選挙権時代を迎えた若者が取るべき行動等に関して意見を出し合った。

▲ワークショップで模擬選挙を体験する学生

シンポジウムの講演では、伊原木知事が最近の国政選挙や地方選挙での年齢別投票率のデータを紹介しながら、若年層は年配層の半分しか投票に行っていないことを問題点として指摘。日本の債務残高が諸外国と比較して近年で大きく膨らみ続けて将来世代へのツケとなっていること等、若年層に不利な施策が行われている実例を挙げ、若年層の意見が政治の場に届きにくい現状を打ち破っていくためには政治参加が大切であることを訴えた。

続いて演壇に立った原田代表は「若者と政治をつなぐ」をコンセプトに活動してきた立場からの意見として、「政治は選挙だけではない。投票以外の場面で政治参画の拡充を図っていく視点が重要」と主張した。また、若者が政治に影響を及ぼせるという感覚が欠けていることが低投票率の要因の一つであるとし、地方議員と若者が気楽に語り合うイベント「Voters Bar」、東京都中野区で学生がまちづくりプランを提案する若者会議の開催等、NPO法人YouthCreateが展開してきた取り組みを紹介しながら、「良い意味でのしがらみをつくることも方策の一つだ」と提言した。

パネルディスカッションでは、最初にワークショップに参加した学生を代表して岡山大学の江利川悟さんとノートルダム清心女子大学の藤岡里彩さんが、選挙疑似体験による投票結果をはじめとするワークショップの結果を紹介。学生同士が選挙について話し合った中で、「政治について知るきっかけを作るには、自ら情報を得る行動が重要」「まずは投票に行くことから始めるべき」「政治について家族や学

校で話せる場を作ってほしい」といった意見が出たことを紹介した。

引き続き、学生２人に伊原木知事、原田代表、桑原教授、波田学長が加わり、コーディネーターの荒木理事・副学長の進行で討論。桑原教授は米国の事例を交えて政治意識を高めるための高校生以下の主権者教育のあり方、波田学長は大学教育における政治教育の現状や新入生全てが主権者となる今後の教育の改善策に関して、それぞれ意見を述べた。また、伊原木知事、原田代表、学生２人も若者の地域参加や政治参加へのきっかけづくりのために何をすればよいか活発に意見交換した。

▲学生によるワークショップ結果発表

▲パネルディスカッションでの伊原木知事と原田氏

4-5　ヨシダソース会長特別講義

日　時：平成27年10月21日（水）14：00～15：30
場　所：岡山大学津島キャンパス J-Terrace Café
参　加：約30名（岡山大学生）
講　師：吉田潤喜氏
　　（吉田ソース創業者、ヨシダグループCEO）
主　催：岡山大学地域総合研究センター

アメリカ・オレゴン州の経済界の重鎮としてグローバルな競争に挑み、難局を突破してきた吉田会長の来岡に合わせ、岡山大学生限定の特別講義を実施した。

４月に本学や岡山市、岡山経済界による産官学のオレゴン州ポートランド視察での交流を機に実現した。

コストコでの販売、資金を集める大胆なアイデア、教育支援などを通じ、底抜けの明るさと気遣いを武器に日米両国で活躍している吉田会長。雑誌「ニューズウィーク」で2005年に「世界で最も尊敬される日本人100人」に選ばれており、2010年には、日本と米国オレゴン州の友好に貢献したことで外務大臣賞を受賞している。

４度破産しかけたエピソードを重ねながら、学生にパッション（情熱）の重要性を解説し、チャンスの掴み方や若者への期待について講義していただいた。学生からは、熱心な質問が飛び交った。

▲学生に講義する吉田氏

▲吉田氏を囲んでの集合写真

4-6 「地域経済分析システム『RESAS：リーサス』」講座

日　時：平成27年11月16日（月）14：30～17：00
場　所：岡山大学五十周年記念館 大会議室
主　催：内閣官房 まち・ひと・しごと創生本部事務局・内閣府地方創生推進室、岡山大学経済学部、岡山大学地域総合研究センター
後　援：岡山県

＜プログラム＞

進行役　三村聡（岡山大学地域総合研究センター副センター長・教授）
開催挨拶　岡山大学社会文化科学研究科 教授　平野正樹
出前講義　「地域経済分析システム（RESAS：リーサス）」出前講座
講　　師　内閣官房 まち・ひと・しごと創生本部・内閣府地方創生推進室
分析報告　岡山大学経済学部　学生有志
全員討議　参加者全員
総　　括　中村良平（岡山大学社会文化科学研究科　教授）

RESASは、内閣官房まち・ひと・しごと創生本部事務局及び内閣府地方創生推進室が提供するビッグデータを用いた分析システム。現在、全国全ての自治体がこのシステムを活用し、地方創生戦略プランづくりが進行している。こうした背景から、本講座を開催し、学生と教職員、自治体関係者など約80名が参加した。

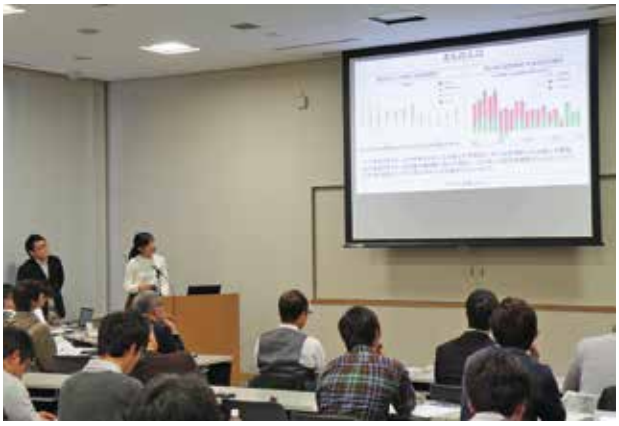
社会文化科学研究科の平野正樹教授（副学部長）が開催挨拶に立ち、内閣官房 まち・ひと・しごと創生本部、内閣府地方創生推進室の堀 淳一郎ビッグデータ参事官補佐によるRESASについての説明や、パソコンを用いて使い方の講習を行った。

▲RESASの説明をする堀参事官

▲パソコンで操作を学習する参加者

続いて、経済学部中村良平（社会文化科学研究科教授）ゼミの学生有志が、実際にRESASを活用して岡山市の地域経済を具体的に分析した結果を報告した。

それを受けて、全員討議を行い、自治体職員や学生からはRESASに対する意見や質問、学生提案への質問が多数出された。中村良平教授が全体の総評を、当センターの三村聡教授がRESASの実践活用に向けた自治体と地域金融機関の連携について話題提供を行い、最後は経済学部の平野正樹教授が結んだ。


▲分析データを報告する仲村ゼミの学生

自治体職員は、「学生の分析報告にRESASを活用するヒントを得た。使いこなして創生戦略プランの策定に弾みをつけたい」と話し、この模様は、NHKの夕方のニュースで大きく取り上げられた。

4-7　犯罪被害者支援シンポジウムー被害者にも加害者にもならないためにー

日　　時：2015年12月９日（水）13：00～16：00
主　　催：岡山県警察本部、岡山大学
協　　力：公益社団法人被害者サポートセンターおかやま（VSCO）
場　　所：岡山大学国際交流会館１階交流ラウンジ
出席者数：62人（大学生、企業、市民）＋傍聴者
司　　会：前田 芳男（地域総合研究センター准教授）

■プログラム

１．開会挨拶　前田芳男（前出）
２．刑事手続きについて知ろう
　吉沢 徹（岡山大学大学院法務研究科教授／弁護士）
３．岡山市で起きた殺人事件被害者遺族のご講話
　加藤 裕司 氏（全国犯罪被害者の会「あすの会」）
４．警察における犯罪被害者遺族支援について
　藤原　佐千子 氏（岡山県警察本部犯罪被害者支援室係長／警部補）
５．参加者全員によるグループディスカッション
６．まとめ　山本　力 氏（就実大学心理教育相談室室長／教授）
７．閉会挨拶　吉沢　徹（前出）
・閉会後ボランティア説明あり。
・VSCOによるパネル展示「いのちと魂のメッセージ」を併設。

■参加者内訳（敬称略、かっこ内は人数）

ゲスト講演者	１人	
大学生	39人	岡山大学（15)、川崎医療福祉大学（７)、環太平洋大学（１)、山陽学園大学（11)、就実大学（５） ※岡山大学法学部３、４年生「刑事訴訟法」演習（原田和往准教授）の受講生が授業の一環として参加
企業	５人	・株式会社バーズコミュニケーション（１） ・社会福祉法人 備作恵済会若松園（１） ・両備ホールディングス株式会社（３）
市民	４人	
VSCO	３人	理事長 平松敏男、業務執行理事 寺田和子、支援員 鶴井洋子
県警察本部	２人	業務部県民応接課 犯罪被害者支援室　藤原佐千子係長、小池昌広係長
大学教職員	８人	・就実大学：山本力教授 ・川崎医療福祉大学：医療福祉学部臨床心理学科　進藤貴子教授 ・山陽学園大学：総合人間学部生活心理学科 上地玲子准教授 ・岡山大学：吉沢徹教授、前田芳男准教授、近藤亜希子、山田晶子、鷹野郁子
計	62人	（この他に数名傍聴者あり）

■シンポジウムの経緯と本年度の特徴

昨年度に引き続き、岡山県警察本部警務部県民応接課犯罪被害者支援室からの相談を受けて、本シンポジウムを県警と共同開催した。県警では、民間支援団体や大学、地元企業との連携により、被害者の痛みを知ることで犯罪を起こさせない啓発活動を推進するとともに、犯罪被害当事者に必要な支援が行き届く体制を作りたいと考えており、県内唯一の犯罪被害者支援民間団体である公益社団法人VSCO（ヴィスコ）でのボランティア活動への大学生の参加や、県内の大学生の連携を期待している。岡山大学では、山本力教授（現・就実大学）や吉沢徹教授が長年にわたって県警の被害者支援活動に協力してこられた経緯がある。当センターは、両教授のご指導の下で学生の社会問題への関心を広げる機会として本シンポジウムの意義は大きいと考え、昨年度以来、共催の窓口となって企画・運営を担当している。本年は、講演者のご希望によりシンポジウムのタイトルを「被害者遺族の思い」としたほか、以下のように参加者同士の対話による学び合いを重視した。

・大学生の能動的な学びと自発的活動のきっかけとなることを期待して、参加者全員によるグループ討議を行った。
・大ホールではなく、グループ作業に適した可動式テーブルのある小規模な会場を使用した。
・県警担当者のご紹介で、被害者支援問題に関心のある地元企業にご参加頂いた。

■シンポジウムの概要

前田芳男准教授の挨拶で開会し、まず吉沢徹教授から、犯罪事件発生後の刑事手続きの全体像を、被害者と弁護士の関わり方を中心にご講義頂いた。続いて、岡山市で起きた殺人事件被害者のご遺族である加藤裕司氏が、事件当日の模様や捜査の経緯、さまざまな二次被害の苦しみ、そして、犯人への憎悪と怒りを抑えて、同じような加害者を生まない社会を作ることを天国の娘に誓うまでの道のりを多くの写真と共に語られた。藤原佐千子警部補からは、警察が犯罪捜査だけでなく、犯罪被害者に精神的支援を含む様々な支援を行っている状況について、自ら担当された性犯罪被害者の事例を基にご講演いただき、警察では行き届かない支援をVSCOのような民間団体が行っていること、社会全体に被害者支援の重要性とそのあり方、つまりどんな支援が必要かを知らせる必要があり、大学生など若い世代の役割の大きいことが説明された。

講演に続いて参加者全員によるグループ討議が行われた。シンポジウム参加申込者は、なるべく多様な属性の人が同席するよう予め６班に分けられており、各班で、加藤氏の講演等への感想や、犯罪被害者支援のために自分には何ができるか、等、自由に意見交換し、最後に代表者を決めて話し合ったことを発表した。加藤氏や地元企業、VSCO、大学教職員、市民の方々も討議に参加し、大学生と語り合った。

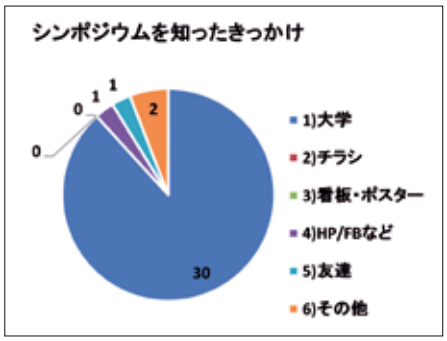
討議の後、山本力教授より「被害者遺族の思いを想像することが支援の第一歩となる。ご遺族が何を求めておられるかを知り、長期的にお手伝いをしていくことで、結果として、支援されたという思いが被害者家族に残るのでは」との総括がなされた。最後に吉沢教授が「加藤さんの生の声を聞かせていただいたのが支援の第一歩であり、今日を機会に、各自がそれぞれの立場で、自分のその時の状況に応じて、一つでも二つでもできることをやっていこう。今日知ったこと、考えたことを身の回りの誰かに伝えるだけでも支援につながる」と締めくくった。

■アンケート結果

参加者にはアンケート用紙を配布し、終了後回収した。(有効回答数32)

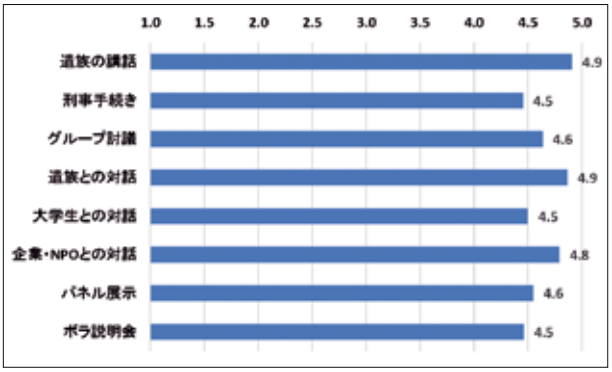
【問１】シンポジウムをどのようにして知ったか

大学の教員を通じてという回答がほとんどで、そこには授業の一部としての参加が含まれる。



【問２】内容について

プログラムの内容について１～５ポイントの回答を加重平均。遺族の生の声に接して強い感銘を受けたことが示されている。



感想欄（自由記入）には、以下を含む多数の記入があった。大学生の中には社会人学生も含まれている。

・刑事司法に携わって仕事をしたいと考える自分にとって生の声は深く感じるものがあった。(岡大生 刑訴法ゼミ)
・自分と犯罪とは関係ないという考えを改め､被害者支援団体への理解などを深めたいと思った。(岡大生 刑訴法ゼミ)
・立場も学部も年齢も違う方々のお話や意見を聞け、とても勉強になった。(岡大生 刑訴法ゼミ)
・娘さんの事件を包み隠さずありのままにお話して頂き被害者遺族としての思い、何を支援して欲しかったかなどを知ることができた。(山陽学園大生)
・自分の問題として考えた場合、何を望むかを考えて行動していくこと、そして、その人のニーズは何かを常に考えつつ生活していくことが大切だと思った。「何も知らない、何もできない」ことがいけないのではなく、何もしようとしないことがいけないことだと感じた。(川福大生)
・私も同世代の親で娘を持つ身です｡また愛する夫も病気で失いましたので身につまされました｡様々な経験の中で私も寄り添えるものになりたいとトレーニング中です。(就実大生)
・(刑事訴訟手続きについて) 勉強することが少ないので聞けてよかった。(環太平洋大生)
・被害者遺族の生の声や苦痛を周知しなければならないと感じた。(両備社員)

▲グループ討議の様子

▲体験談を話す加藤氏

▲グループ討議は講演者を含む出席者全員が参加

4-8　ポートランドのまちづくり2015－おかやま版エコ・リバブルシティへ！－

日　時：平成27年12月18日（金）～19日（土）
　　いずれも14：00～15：30
場　所：18日　岡山大学国際交流会館
　　19日　西川アイプラザ
参　加：両日で約120名
講　師：Ethan Seltzer 氏（ポートランド州立大学）
コーディネーター：
　　氏原　岳人（岡山大学大学院環境生命科学研究科助教）
　　岩淵　泰（岡山大学地域総合研究センター助教）
主　催：岡山大学
共　催：環境省／岡山市

12月18～19日、ポートランド州立大学のEthan Seltzer教授を招き、ポートランドのまちづくりを学ぶ「まちづくりウィーク」を開催した。本講演には、全国の学生や大学、NPO、経済界関係者ら約120人が参加。Seltzer教授が、日本の地方都市へ、まちづくりビジョンの形成についてのアドバイスを行った。

ポートランドは、アメリカで最も暮らしやすいまちと知られており、持続可能で、クリエイティブな都市であり、Seltzer教授は、ポートランドにおける都市計画の経緯を説明し、いかに機能し続け、コミュニティと持続可能性に貢献しているものは何かを紹介。「ポートランドの真似をするよりも、良いところを学び、岡山らしさのあるまちづくりをするべきだ」と提言した。

▲Ethan Seltzer教授

▲参加者は各日で約60名

▲西川アゴラを視察するEthan Seltzer教授

▲西川緑道公園のマーケットを視察

本講演は環境省総合研究推進費による研究（「エコ・リバブルシティの都市構造モデルの構築とその計画論に関する研究」－大学院環境生命科学研究科氏原岳人助教、地域総合研究センター岩淵泰助教）の一環として実施した。本研究では、エコ･リバブルシティとは、『低炭素かつ住みやすい都市』であり、地方都市の成長条件であると定義している。

4-9　スポーツによる地域振興シンポジウムー市民参加による岡山市の地方創生ー

日　時：2015年12 月21 日（月）14：00～17：30
場　所：岡山国際交流センター ８階イベントホール
参　加：約100名
主　催：おかやまスポーツプロモーション（SPOC）研究会
後　援：岡山市、岡山商工会議所、（一社）岡山経済同友会、岡山大学、岡山市西口活性化協議会、奉還町商店街振興組合、岡山シーガルズ、ファジアーノ岡山、山陽新聞社、NHK 岡山放送局、RSK 山陽放送、OHK 岡山放送、TSC テレビせとうち、RNC 西日本放送、KSB 瀬戸内海放送

＜プログラム＞

●主催者挨拶

梶谷俊介（SPOC研究会代表、岡山経済同友会地域振興委員長、岡山市基本政策審議会委員）

●パネルディスカッション第１部「スポーツで盛り上げるまちづくり」

【パネリスト】

・大森雅夫（岡山市長）
・上條仁志（ファジアーノ岡山ホームタウン推進室 室長）
・高田さゆり（岡山シーガルズ マネージャー）
・福山百恵（株式会社DAI）
・長宗武司（岡山大学経済学部４年生、学生サークル「おかやま百年構想」代表）

【コーディネーター】

・高岡敦史（岡山大学大学院教育学研究科 講師）

●パネルディスカッション第２部「東口と西口が連携する総合的なまちづくり」

【パネリスト】

・阿部宏史（岡山大学理事（総務・企画担当）・副学長、岡山市基本政策審議会委員）
・梶谷俊介（前出）
・髙谷昌宏（岡山商工会議所まちづくり委員会 委員長）
・岸 卓志（奉還町商店街振興組合 理事長）
・岡山一郎（山陽新聞社論説委員会 副主幹）

【コーディネーター】

・三村 聡（岡山大学地域総合研究センター副センター長・教授 、岡山市総務・市民政策審議会委員）

●閉会挨拶 荒木 勝（岡山大学理事（社会貢献・国際担当）・副学長）

スポーツを生かした岡山のまちづくりを考える「おかやまスポーツプロモーション（SPOC）研究会」は、岡山経済同友会、岡山商工会議所、岡山大学、山陽新聞社、バレーボール・Ｖプレミアリーグ女子の岡山シーガルズなど複数の団体で構成された組織である。本研究会では、スポーツは地域を元気にする重要なファクターであると位置付け、岡山の生活を豊かにするため、市民参加によりスポーツ機運を高める方策の提案や、競技施設周辺のＪＲ岡山駅西口一帯の活性化につなげることをめざしている。また、岡山市で新しい総合計画の策定作業が進んでいる中、12月21日、こうした流れを加速化させることを目的に本シンポジウムを開催した。

第１部「スポーツで盛り上げるまちづくり」では、スポーツの持つ力について、多くのスポーツファンがホームゲームに集い交流できることに加え、チームの地元である岡山市民の誇りや愛着の対象になり得る点が大きいと指摘された。その上で、岡山市中心市街地の地域活性化に向けて、スポーツをどのように活かしていけるのか、そのとき、プロ・クラブができること、行政ができること、経済界や市民ができること、大学や学生たちができることを考え、バラバラな取り組みにならないように、つなげていく方向性が確認された。

▲第１部パネルディスカッション

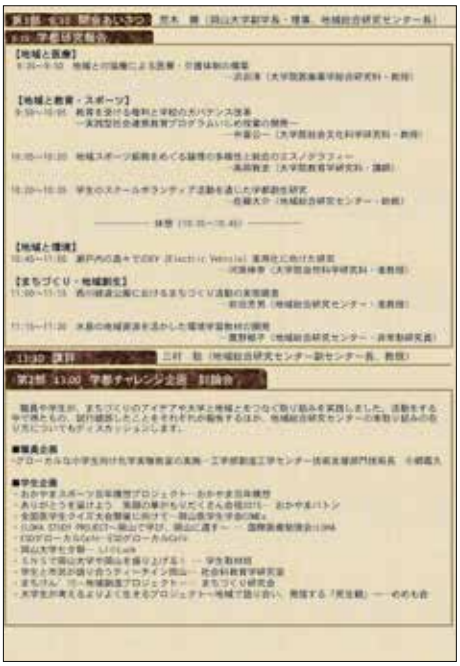
▲第２部パネルディスカッション

第２部では、スポーツに限らず、幅広に岡山市中心市街地の活性化について、「東口と西口の連携」をキーワードに議論が進められた。地方創生が言われる中で、イオンモール岡山が開業１年を迎え、イオン進出が岡山の街にインパクトを与え、商店街や百貨店、専門店も独自色を打ち出した戦略を展開しつつあること、また、路面電車の延伸、コミュニティサイクル「ももちゃり」の普及や西口への展開、岡山市民病院・川崎病院・済生会病院の新築、市民会館の新築計画、まちなかでの社会交通実験、市民マラソンの開催、市民主役の西川緑道公園・石山公園イベント、奉還町でのプロスポーツと市民参加によるまちづくりなど、新たなムーブメントが沸き起こりつつある点が確認された。岡山市の未来に向けて、全員から「提言」がなされた。

▲登壇者と運営スタッフによる記念撮影

4-10　平成27年度成果報告会

日　時：平成28年１月15日（金）
　　第一部　学都研究報告会（９：30～11：40）
　　第二部　学都チャレンジ企画ワークショップ
　　（13：00~14：30）
場　所：岡山大学国際交流会館



今年度の当センターの１年を総括する学都研究等の成果報告会を国際交流会館にて実施した。

「学都創生に向けて～地域資源としての大学の役割～」と題するこの報告会では、第一部で「地域との協働による医療・介護体制の構築」など、当センター地域連携専門委員による学都研究（７テーマ）の成果報告が行われた。

▲学都研究報告

第二部では、学都チャレンジ企画の総括として大学職員や学生が自らまちづくりに積極的に関わる職員企画（１企画）と学生企画（10企画）の代表者が４つのグループに分かれ、活動の振り返り、自身の成長ポイントなどを活動のエピソードを交え討議した。

学都チャレンジの詳細は前述（３章－３学都チャレンジ事業）に記す。

＜資料編＞平成27年度成果報告会資料

▲グループで活動を振り返る

▲ディスカッションの内容を発表する学生

4-11　グローバル実践型教育特別シンポジウム

日　　時：2016年３月15日（火）13：00～16：00
場　　所：岡山大学国際交流会館　１階多目的ラウンジ
主　　催：岡山大学
後　　援：林業教育コンソーシアム、岡山県
内　　容：
開会挨拶：許　南浩（岡山大学理事（教育担当）・副学長）
講　　演：
・UBCと共同したCo-op教育の試みについて
　吉川　賢（岡山大学大学院環境生命科学研究科 特任教授）
・「長期･有償型インターンシップ」の教育的効果について（新潟大学での実践報告）
　西條 秀俊（新潟大学教育･学生支援機構キャリアセンター 准教授）
・コーオプ教育：日本における有効性と京都産業大学の取組み
　田中　寧（京都産業大学コーオプ教育研究開発センター 運営委員、経済学部 教授）
　大西　達也（京都産業大学コーオプ教育研究開発センター 課長）
総合討論：コーディネーター：山田一隆（岡山大学地域総合研究センター 准教授）
　　討論者：西條　秀俊（前出）、田中　寧（前出）
　　大西　達也（前出）、吉川　賢（前出）
閉会挨拶：荒木　勝（岡山大学理事（社会貢献・国際担当）・副学長）

大学教育の一つの潮流になりつつあるコーオプ教育に焦点を当てて、本学が進めている岡山大学版Co-opプログラムであるUBC（カナダ・ブリティッシュコロンビア大学）と共同実施した試みの紹介から始まり、新潟大学及び京都産業大学からは、コーオプ教育の先進事例を報告いただきながら、コーオプ教育の目的、有効性を確認し、従来のインターンシップとの関係及びコーオプ教育の立ち上げにおける課題においても意見交換を行った。

5 まちづくり実践活動・研究会の発足

5-1　西川緑道公園界隈の活性化

■5-1-1　西川ー岡山市との協働調査および受託事業

西川緑道公園は、およそ400年前に城下町の西の外堀として築かれた西川（現在は農業用水路）のほとり約２kmにわたって作られたプロムナードである。整備が行われた1980年代初頭から今日まで、様々なまちづくり市民グループがフリーマーケットやコンサートなどのイベントを開催してきた。岡山市においては、中心市街地活性化を目的として、平成22年度より、西川魅力にぎわい創造事業として「西川パフォーマー事業」をスタートさせ、大小合わせて年間およそ70ものイベントを開催している。最近では、満月BARや有機生活マーケット「いち」が開催され、岡山市民だけではなく観光客からも、おしゃれな空間として西川が認知されるようになってきた。また、昭和30年代後半から始まった市民ボランティアによる公園の清掃活動は今も続けられている。市民が公園を育て、また公園があったからこそ様々な市民活動が育まれてきた西川緑道公園は、岡山市の市民参加のまちづくりのシンボル的な場所である。

当センターは、平成24年度より岡山市庭園都市課からの委託事業を受託し、西川パフォーマー事業の検証、西川緑道公園周辺の交通量調査、まちづくり基礎調査などに取り組んだ。

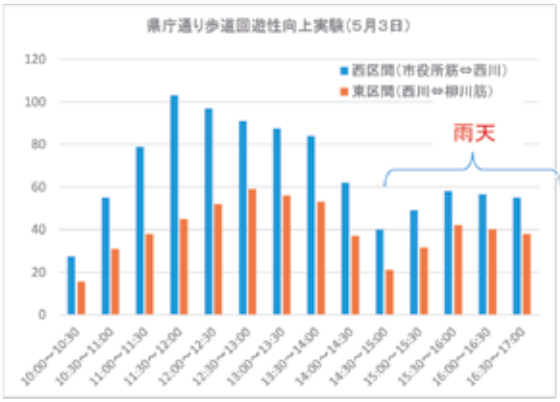
調査を通して、新しい時代の市民主体のまちづくり組織の必要性を大学と岡山市の双方が強く感じ、平成26年10月８日には、岡山大学と岡山市との間で「西川緑道公園界隈を中心とするまちなかにおける市民協働によるまちづくり」を推進するための連携に関する協定を締結した。

本年度は「平成27年度西川緑道公園界隈まちづくり関連業務」を受託した。業務内容は、イベント時の来訪者へのアンケート調査、交通量調査、まちづくり活動への参加を促す啓発活動などである。特に岡山市が実施した「回遊性向上社会実験」（５月、10月、11月の３回）に合わせて、2,000人を対象とする聞き取り調査を実施した。また、イベント区間内での歩道の滞留者数の調査を行った。

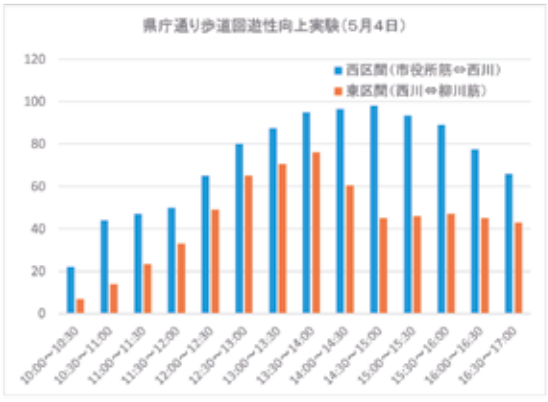
▲調査する学生

■5-1-2　西川一回遊性調査

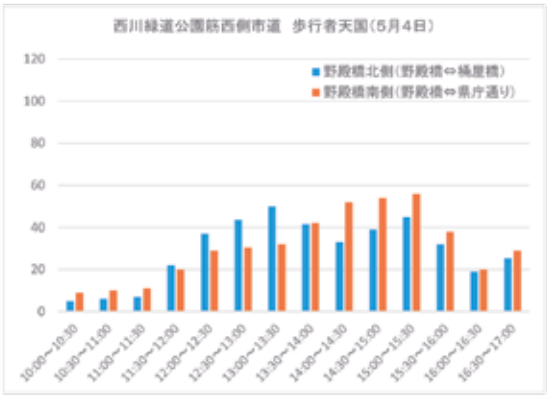
岡山市が実施した中心市街地の回遊性向上社会実験に合わせ、イベント会場および歩行者天国区間内での滞留者数の調査を行った。これは、単に通行量を把握するだけでなく、ある一瞬にどれだけの人がその場にいたかを知ることで、イベントの集約や足止め（その場に引きとどめる）効果を把握するのに役立つものである。調査の結果、時間帯や区間により滞留者数が異なること、５月、10月、11月の３回を比較して、イベントの内容によって足止め効果に大きな差があることなどが確かめられ、岡山市役所が行う社会実験の効果検証に役立てられた。



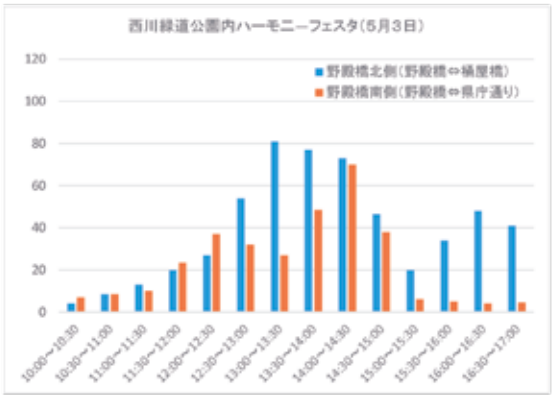
▲歩道上滞留者数（県庁通り西区間）



▲歩道上滞留者数（県庁通り東区間）



▲歩行者天国区間滞留者数



▲緑道公園内滞留者数

■5-1-3　西川ーヒアリング調査

平成25年度の受託調査から続けているヒアリング調査である。本年度は、西川緑道公園のまちづくり、公園整備に関するヒアリングを９名に行った。学生も参加し、1970年代のまちづくりの様子、西川緑道公園の建設、建設後のまちづくり活動等を中心に行い、岡山市中心市街地における市民参加の原点を探ることができた。ほぼ毎回のヒアリングに学生が参加した。

日　付	氏　名	主なテーマ
平成27年６月８日	富　山　岩　雄	西川緑道公園建設について
平成27年６月17日	服　部　弘　平	岡山青年会議所時代のまちづくりについて
平成27年６月18日	斎　藤　　桂	トランジットモール実施について
平成27年６月30日	佐　藤　二　朗	西川緑道公園再整備に関わって
平成27年７月１日	藤　木　茂　男	西川緑道公園周辺での生活について
平成27年７月10日	坂　本　安輝子	西川緑道公園再整備に関わる提言について
平成27年７月24日	丹　羽　英　喜	未来デザイン委員会のまちづくりについて
平成27年８月４日	木　口　省　吾	岡山青年会議所時代のまちづくりについて
平成27年８月７日	高　谷　茂　男	西川緑道公園再整備当時の市長として

▲富山氏のヒアリング

▲木口氏のヒアリング

■5-1-4　西川ー西川アゴラ開設経緯と利用状況

西川アゴラは、平成26年８月に、岡山市中心部にある西川緑道公園に面したオフィスビルの２階に開設された。（〒700-0903 岡山市北区田町１丁目８-30　伊達ビル２階／常駐スタッフはおいていない）

城下ステーションに次ぐ、岡山大学で２番目のまちなかサテライトキャンパスである。

平成26年10月、岡山大学と岡山市は「まちづくり協定」を締結し、西川アゴラを拠点に、新しい取り組みを始めた。

西川緑道公園界隈は、今後岡山市の中心市街地のまちづくりにおける核となる地域であり、研究や学生の活動の場として適している。岡山市もこれまでにこの地域では積極的にまちづくりに関わっており、回遊性向上社会実験の対象ともなっている。大学が、市民参加のまちづくりの歴史を調べたり、イベントの集客効果を計測したりして、勉強会を通してその結果を学生や行政、市民と共有している。そして、そこから新しい市民主体のまちづくりの仕組みを生み出そうとしている。これらの調査活動には学生が参加する体制をとっており、実践型社会連携科目のプロトタイプ開発につないでいる。

■西川アゴラの活用状況

西川アゴラでは、まちづくり学習会、学生によるまちなかの調査、まちづくり団体の会合などを行っている。以下が代表的な活動である。学内からの利用も増えてきており、月平均の利用実績は20件、200人程度である。

分　　類	事　　例
視察・取材対応	・広島大学 ・ESD関連企業など
岡山大学まちなかキャンパス事業	・LOHAS講座 ・GIS研修会など
中心市街地における各種調査の拠点	・交通量調査 ・来街者聞き取り調査 ・西川ヒアリング ・建物用途調査
研究会	・おかやまスポーツプロモーション（SPOC）研究会 ・岡山まちとモビリティ研究会 ・ポートランドのまちづくり勉強会、報告会など
岡山大学関係者の利用	・教育学研究科音楽研究会 ・教育学研究科教材開発研究会 ・自然科学研究科

分　　類	事　　例
学生まちづくりサークルの会合や作業	・被災者支援団体「おかやまバトン」 ・岡山大学若手職員塾 ・岡山市役所若手塾など
市民グループの会合	・満月BAR実行委員会会議 ・キャンドルナイト実行委員会会議 ・チャリティサンタ会議 ・ハーモニーフェスタ実行委員会会議 ・だっぴ実行委員会会議 ・いち実行委員会会議 ・建築学会 ・NPO主催のセミナー
イベント備品等の一時保管	・満月BAR用机、椅子、リユース食器など ・交通量調査用数取り器、画板など

▲調査活動の拠点として活用

▲まちづくり勉強会として活用

5-2　総社市山手地区における地域包括ケア

■平成 27 年度（2015 年）の活動：大学生らしさの追求

総社市山手地区における地域包括ケア活動への大学生の参画は、平成25年７月１日に同地区での「まちづくり会議」で本格開始を宣言してから３年目を迎えた。当初「たんぽぽ」の名称で学都チャレンジ企画の認定を受けていた学生サークルは、昨年度以来、瀬戸内市裳掛地区で地域活動を行っていたもうひとつの認定サークル「まちづくり研究会」と合流、本年度は上級生がSNSを駆使し、関心の高そうな学生たちに的を絞って勧誘したのが功を奏して、多数の新入生が集まり、年度末現在、全学年で合計33人が２つの地域で活動している。

毎年10月に行われる大人と子ども向けのウォーキングとレクリエーションのイベント「なかよしウォーキング」には、学生がさまざまな新しい遊びのアイデアを出し、地区社会福祉協議会（地区社協）の方々から好評を得た。昨年度は学生が自主的にルートづくりに関わり、手作りマップを配布して参加者に喜ばれたが、今年も同様に学生が予めルートを歩き、地区社協の方々とワークショップを開いて地域の歴史について聞き取りを行い、これらを基にクイズ・ラリーを企画した。10月４日の当日は、岡大から学生23人、教職員４人と、これまでの最多人数が参加した。例年どおり、長短２ルートに分かれてのウォーキングの後で、昼食には栄養委員の方々が調理したカレーライスがふるまわれたが、その間、学生が午前中のウォーキングで撮影した画像を上映するなど、新たな工夫を凝らした。また本年度は地元の高校生もこのイベントの手伝いに参加しており、思いがけず高校生と交流する機会にもなった。終了後の振り返りの会では、地区社協や総社市社協の方々から、地域のスタッフとの連携が不十分という厳しいご指摘があり、今後の課題となった。

▲クイズ・ラリーで山手の歴史を知る

▲今年は「桃太郎」でストーリー作り

▲山手なかよしウォーキング参加者全員集合

毎年３月に開かれる「山手健康福祉フェア」については、年明け早々の打合せで、地区社協から本年度のテーマ「認知症」が提示された。そこで、岡山大学医学部の認知症専門医の監修の下に、認知症に関するパネル展示、症状チェック、脳トレーニング・ゲームを準備した。当日は学生10人、卒業生３人、教職員３人が参加し、山手のお年寄りや子どもたちと和やかに交流した。会場で実施したアンケートでは、「岡大生にこれからも来てほしいですか？」の質問に、回答者全員から「来てほしい」の回答をいただいた。

▲認知症予防について発表。隣の手話サークルの方が飛び入りで応援に

▲脳を鍛えるお手玉送りゲーム

▲子どもたちと遊ぶスペースも大好評

■振り返りと展望

総社市山手地区は、平成の合併を機に、総社市社会福祉協議会の支援を受けて住民が主体的に地域福祉活動を行ってきた稀有な地域だが、地域包括ケア活動に関わる地区社協メンバーの固定化・高齢化が進み、大学生の参加による活動の活性化が期待されてきた。開始から３年を経て、地域の方々からも活動の継続を望まれているのは、大学生らしいアイデアや活力が一定の貢献をしていることの証左だろう。裳掛地区の活動との一本化によって、「まちづくり」というテーマを異なる環境と課題の下で追及することができ、メンバーの増加にもつながった。大学からの交通の便が良くないなどの制約から、実践型社会連携教育の授業として開発するには至っていないが、学都チャレンジ企画という、教育的要素を含む学生サークル活動として引き続き支援していく必要がある。

一方で、年２回のイベント参加が常態化することで、新たなマンネリ化や、学生の活動が単なるボランティア支援に陥る恐れもある。頻繁に訪れることが困難なのもあり、イベント当日に向けて地域の方々との意思疎通に十分な配慮と工夫が必要なことも分かった。「まちづくり」に不可欠な楽しみの要素を大切にしつつ、時には、「地域包括ケア活動の課題と解決を探る」というスタート時のテーマに返って活動を検証したり、アンケートや聞き取り、実施報告を積み重ねたりすることで、イベントをその場限りのものにしない努力が、学生にも教職員にも一段と大切になりそうである。

5-3　瀬戸内市裳掛地区における地域活動

学生サークル「岡山大学まちづくり研究会」は、耕作放棄地対策、空き家再生活動、小学生の見守り、地域資源の発掘調査、地域のお祭りへの参加など年間を通してさまざまな地方創生活動を展開している。今年度は、瀬戸内市裳掛地区の耕作放棄地で栽培した「さつまいも」を11月６日から始まる岡大祭で販売、地元で再生した空き家を交流拠点として「交流お茶会」を兼ねた活動報告会を開催、12月19日に地域おこしに向けたワークショップを開催した。地域住民や地域おこし協力隊の指導により、裳掛地区の歴史や文化、名産の牡蠣養殖やピオーネ（葡萄）栽培話、現状の課題などを現地ヒアリングすることにより、学生たちは成長しながら地域の資源として活動を展開している。

12月16日は、この２年間にわたる地域おこし活動を学生代表２名が瀬戸内市を訪ね市長室で武久顕也市長に報告した。

▲耕作放棄地でサツマイモ栽培

▲地域のお祭りで学生ブース出展

▲再生した古民家で茶話会を開催

▲武久瀬戸内市長（左）を表敬訪問

5-4　新見市神郷における環境保全型森林ボランティア

岡山県新見市の森林施業は、近年、木材材価の低迷、林業従事者の減少・高齢化等により、年々困難になり、間伐等の保育作業を緊急に必要とする人工林が増加しているのが現状である。こうした現状を打開する手段として、大学生が地域の専門家の指導を受けながら、地元NPOの仲村正彦氏が中心となり「環境保全森林ボランティア活動」が企画･運営されてきた。新見市､新見市森林組合､創山林業（株）など地域関係者が共催して、さらに岡山県備中県民局が後援しながら、新見市の健全な人工林を造成する活動を実施している。この活動には、全国から20名を超える大学生や専門学校生が集まり、実際にチェーンソーを使って、間伐や倒木作業を進める。また、リピーターとして経験を積んだ学生やOBが複数おり、森林組合などプロの方と経験を積んだ先輩が、初めて参加した学生に指導を行うというシステムになっている。学生たちは、食事班、洗濯班、作業機械のメンテナンス班、全体のスケジュール管理班などのチームに分かれて分担された任務作業にとりかかる。今年度は、前期の活動が平成27年９月３日（水）から２週間の日程で開催され、岡山大学OBが参加して学生たちの指導にあたった。

後期の活動は平成28年３月２日から行われ、それに先だち、２月３日には活動内容等の説明会を実施した。ボランティア経験者で岡山大学OBでもある現在新見地域おこし協力隊の佐伯佳和氏に来学いただき、本活動の魅力なども合わせてお話いただいた。後期は６名の岡大生が参加した。

▲説明会の様子

5-5　「岡山まちとモビリティ研究会」設立

９月７日、検討が進められてきた「岡山まちとモビリティ研究会」が設立された。この研究会の設立目的は「第２条　本会は産官学及び市民団体の連携によって、都市交通及びこれに関連する各種の問題に関し、行政の方向性を考慮しつつ、学際的かつ業際的研究をはかり、都市交通ならびに地域の魅力や環境の向上に資することを目的とする。」と定め、岡山市はじめ産学官と交通事業者、関係団体の皆様方とともに、岡山市のまちづくり施策の効果を一層高めていくことを目標に、中心市街地活性化には欠かせない公共交通を中心とした「移動の足」の充実を柱に据え、まちづくりの諸課題について解決の方策を検討することである。メンバーは、岡山経済同友会、岡山商工会議所、岡山商工会議所青年部、岡山青年会議所、岡山県バス協会、岡山県タクシー協会、日本自動車連盟岡山支部、岡山県レンタカー協

会、西日本旅客鉄道（株）岡山支社、宇野自動車（株）、両備ホールディングス（株）、岡山電気軌道（株）、下津井電鉄（株）、八晃運輸（株）、国土交通省岡山国道事務所、岡山市都市整備局、岡山市政策局、山陽新聞社論説委員会、岡山大学、オブザーバーとして、岡山県県民生活部県民生活交通課、NPO法人まちづくり推進機構岡山、みんなでつくる財団おかやま、NPO法人みんなの集落研究所、トヨタ自動車（株）、岡山大学教員などで構成された。会長には岡山大学の荒木勝社会貢献担当理事・副学長が、副会長には経済界から岡山経済同友会の松田久代表幹事、自治体から岡山市都市整備局の山﨑康司局長が就任した。また、顧問には、岡山大学からは阿部宏史理事・副学長、外部から筑波大学大学院システム情報工学研究科の石田東生教授、東京大学大学院新領域創成科学研究科の鎌田実教授、熊本大学大学院自然科学研究科の溝上章志教授に就任頂いた。また、研究会には次の分科会を設けた。①「まちと公共交通を考える」分科会：岡山市中心部の理想的に道路空間とともに、市中心部に乗り入れる公共交通の利用促進を起点とした賑わいある街を創出するための施策を検討する、②「移動の多様性を考える」分科会：岡山市のコミュニティサイクル「ももちゃり」、環境に優しく単距離移動に適した超小型電気自動車のより有効的な活用の方策を研究する、③「中山間地域の交通を考える」分科会：高齢者医療福祉や若者の中山間地域離れの観点から中山間エリアにおける交通問題をテーマに、その解決策を検討する。事務局は、当センターが担当する。

設立総会を兼ねた第１回の研究会では、荒木勝社会貢献担当理事・副学長が設立について趣旨説明を行い、三村聡教授が規約案とメンバー案、活動内容を説明し了承された。次に会長、副会長が選任され、さらに、「まちと公共交通を考える」分科会委員長には、岡山商工会議所都市交通委員会の若林昭吾委員長が、「移動の多様性を考える」分科会委員長には、岡山経済同友会地域振興委員会の梶谷俊介委員長が、そして「中山間地域の交通を考える」分科会委員長には三村聡教授が就任した。これを受けて、資料に基づく説明と話題提供、そして参加者全員から、これまでの岡山市での都市交通施策の取り組みに関する歴史や反省点、さらに今後に向けた意見や抱負が語られ、設立総会は終了した。当センターは、本研究会を大学が地域資源として「学都」構想実現に向けた具体的な活動展開と位置づけ、今年度は研究会および分科会を定期的に開催した。

＜参考資料＞岡山まちとモビリティ研究会名簿、分科会趣意書

5-6　おかやまスポーツプロモーション研究会

スポーツを活かした岡山のまちづくりを考えるため、産学官金言のマルチ・ステークホルダーが集まって2014年10月に発足した。バレーボール・Ｖプレミアリーグ女子の岡山シーガルズ、サッカーＪ２のファジアーノ岡山など集客力の高いチームや各種競技会を活用し、地域活性化につなげていく方策の検討を進めている。会長は梶谷俊介・岡山経済同友会地域振興委員長で、事務局は経済界が担当し、岡山シーガルズ、ファジアーノ岡山もメンバーである。岡山大学では大学院教育学研究科の高岡敦史講師、当センターの三村聡副センター長・教授が研究会で中心的な役割を担っており、まちづくりサークル「おかやま百年構想」の学生も積極的に参画している。

2015年度の活動として、「スポーツでいかに地域を豊かにするか」をテーマに研究会を月１回程度開催した。また、岡山シーガルズはじめ10チームが出場した「Ｖサマーリーグ女子大会　西部大会」（７月３～５日、桃太郎アリーナ）に合わせ、岡山駅西口の奉還町商店街の飲食店17店で割引・特典が受け

られるクーポン付きの飲食店マップを作製し、観戦者に配布した。スポーツ観戦者を商店街に呼び込もうというSPOC研究会にとっては初となる地域活性化の具体的な試みであったが、地元のシーガルズファンはもちろん、宿泊を伴っての観戦者が多かった他チームのファンにも好評を博した。試合会場では、本学のまちづくり学生サークル「おかやま百年構想」の学生達と当センター教職員がボランティアスタッフとして岡山シーガルズの活動を応援した。

さらに、10月27日には奉還町商店街で、日本代表で岡山シーガルズの山口舞、宮下遥両選手らのタペストリーの除幕式を、河本昭義監督、山口、宮下ら７選手の出席を伴って実施。タペストリーはプレー中に喜ぶ両選手の姿をプリントした２枚の透明板（縦３㍍、横１・35㍍）と、今季のスローガンなどを大書した布製の計３枚で、商店街のアーケードに掲げた。SPOC研究会が企画したもので、製作は岡山シーガルズのスポンサーのジップ（瀬戸内市）にお願いした。

また、12月21日には、前年度の３月に続き、２回目となるシンポジウム「スポーツによる地域振興シンポジウム―市民参加による岡山市の地方創生」を岡山国際交流センター８階イベントホールで約100人の聴衆を集めて開催した。（詳細は後述（４章シンポジウム・報告書）に記す。）

今後はスポーツ大会の合宿誘致や会場手配等の手続きをワンストップで支援する「スポーツコミッション」の組成も視野に入れながら、さらなる活動の活性化を図り、設立の目的であるスポーツを活かしたまちづくりの具現化を図っていきたいと考えている。

▲研究会の様子

▲奉還町商店街でのタペストリー除幕式に「おかやま百年構想」の学生（一番右）が参列

6 留学生のまちづくり事業

6-1　目的・ねらい

留学生がまちとの関わりを通じて地域とふれあい、岡山の企業を知り、さらに母国の歴史・文化の紹介を通じて地域社会との相互交流を図る主体となる活動を支援する文部科学省留学生交流拠点整備事業に申請し、応札されてきたが、2015年３月でその助成も終了した。

2015年４月からは、矢掛町江良地区が、岡山県備中県民局の協働事業に申請し、採択されることで、県の事業支援を受け、より地域に根付いた活動を目指した。

本事業（「留学生のまちづくり」事業）は、留学生が、岡山のまちづくりを経験し、岡山が好きになることで、岡山の友好親善大使を育てる大学と地域の協働の取り組みである。

6-2　協働体制

矢掛町江良地区における地域住民との交流活動、本学の留学生によるラジオ番組制作などにおいて、言語教育センターが運営するL-Caféの藤本真澄講師やグローバル・パートナーズの宇塚真理子教授の積極的な支援のもと引き続き活動を継続している。また、後楽園や岡山城周辺を核とした活動には、NPO法人まちづくり推進機構岡山の徳田恭子氏に協力を仰いでいる。

当センターでは、主に岩淵泰助教、前田芳男准教授が企画に関わり、事務補佐員として山脇知子が務めている。

6-3　まちづくり実験室

まちづくり実験室とは留学生がまちとの関わりを通じて、地域社会との相互交流を図る活動である。

平成24年度～26年度にかけて行った文部科学省留学生交流拠点整備事業「留学生のまちづくり」の活動で良好な関係を築くことができた矢掛町江良地区では、有志団体「輝け！江良元気会」が、留学生との交流を更に充実させるという目的で岡山県備中県民局協働事業に申請し採択された。本年度はこの団体と協力して活動を行った。

平成27年度に実施した主な活動は、以下の通りである。各事業の詳細については、『留学生のまちづくり報告書（平成27年度版）』を参照されたい。

１年を通して、留学生が江良地区を訪れ、地域の活動に参加することで、この地に住む幅広い世代の住民が地域を盛り上げようとする姿が垣間見られた。この様子は、地元ケーブルテレビ、新聞などで数多く取り上げられた。

（１）平成27年６月21日　　田植え：留学生５名／地域70名
（２）平成27年８月１～２日　ホームステイ：留学生10名／受入家庭８
（３）平成27年９月30日　　保育園との交流会（栗ひろい）：留学生８名／地域20名
（４）平成27年10月１～２日　ホームステイ：留学生12名／受入家庭８
（５）平成27年11月８日　　サムライ・トリップinやかげ：留学生75名／地域50名
（６）平成27年12月５日　　高齢者サロンとの交流会：留学生５名／地域25名
（７）平成28年１月９日　　保育園との交流会（たこ揚げ）：留学生５名／地域25名

▲ ホームステイで地元の祭りに参加

▲田植えをした田んぼに掲げられた看板

▲ サムライ・トリップでの地元の人たちとの集合写真

▲保育園との交流会で挨拶

6-4　ラジオ番組制作

世界各国から岡山大学に学びに来ている留学生に留学生活や岡山での暮らし、研究内容などを母国語のみで話してもらうラジオ番組「Okayama University Presents『World Heartful Message』」の放送が11月から始まった。当センターが広報・情報戦略室、グローバル・パートナーズ、言語教育センター、L-Café など学内の関連部署と連携して実施している。内容は岡山大学や岡山のまち、日本の印象、好きな母国の歌等多岐にわたり、ナビゲーター役の岡山大学教員と会話する形式で、母国の家族や友人達に向けて思いを込めたメッセージを送る。番組は岡山市や周辺市町を聴取エリアに持つコミュニティFM局「レディオモモ」で放送され、その内容は世界のどこでもインターネットやスマートフォンを通じてリアルタイムで聴取可能である。また、放送終了後はユーチューブの岡山大学チャンネルに番組内容をアップしており、岡山大学や岡山のまちの良さを世界に発信する新たなツールとなっている。

放送時間：本放送　毎月第２月曜日午前10時40分～55分
　　再放送　毎月第３月曜日午前10時40分～55分
放送期間：平成27年11月～平成28年３月

出演者（国、言語）／ナビゲーター
【第１回】ロバート・ジェームス・サイツ（アメリカ、英語）
　　岩淵　泰（岡山大学地域総合研究センター助教）
【第２回】サラ・ヴァランス（カナダケベック州、フランス語）
　　岩淵　泰（岡山大学地域総合研究センター助教）

【第３回】ジェイミー・リー・ワーズワース（イギリス、英語）
岩淵　泰（岡山大学地域総合研究センター助教）
【第４回】ペトラ・プリヴィチェビッチ（セルビア、セルビア語）
鐸木　道剛（岡山大学大学院社会文化科学研究科教授）
【第５回】アントニー・アイナ・ラサチャナブ・ラザカリブニ（マダガスカル、仏語）
岩淵　泰（岡山大学地域総合研究センター助教）

6-5　依頼業務

平成27年度に外部団体から当センターへ依頼のあった業務は以下の通りである。

（1）平成27年５～７月　株式会社岡山コンベンションセンター
　　タイからの団体の懇親会に通訳として参加する留学生を派遣

（2）平成27年７月15日　岡山県産業労働部観光課
　　留学生による岡山の観光についての意見交換会／留学生９名

（3）平成27年９月19日　株式会社岡山コンベンションセンター
　　LPGAステップアップツアー山陽新聞レディスカップに留学生を招待
　　留学生８名

（4）平成27年10月20日　岡山県産業労働部観光課
　　岡山県多言語観光ホームページに掲載する原稿校正
　　フランス語、タイ語の校正を各１名の留学生に依頼

（5）平成27年10月22日　岡山県産業労働部観光課
　　岡山県知事によるフランス語スピーチのための見本動画撮影
　　知事へのフランス語指導にフランスからの留学生を派遣

▲岡山の観光についての意見交換会の様子

7 シンクタンク業務

7-1　岡山市「西川緑道公園及び界隈まちづくり組織設立のための基礎調査事業」

本事業は、岡山市庭園都市推進課の委託業務を当センターが受託し、実施したものである。委託調査業務は、平成24年度から続けられており、その実績を踏まえ、西川緑道公園界隈での継続的なまちづくりの取り組みをしている。本年度の委託調査業務は、西川緑道公園界隈のまちづくり活動への参加を促す啓発活動を実施するとともに、西川魅力にぎわい創出事業の実施効果の検証に向けたアンケート調査や交通量調査、また、回遊性向上社会実験に向けた基礎データの収集（建物用途調査）等を実施することを目的とする。また、今回の作業を通じ、西川緑道公園界隈に若い世代（学生）が実際に足を運び、まちづくりを考える機会をつくろうとするものである。委託業務の内容は以下の通りである。

1）西川緑道公園界隈のまちづくり活動への参加を促す啓発活動
2）西川緑道公園等で行われるイベント来訪者へのアンケート調査
3）西川緑道公園界隈交通量調査
4）市内中心部の建物用途調査
5）回遊性向上社会実験アンケート調査

調査事業の実施体制は、当センターの前田芳男准教授、岩淵泰助教、職員の近藤亜希子、山田晶子が担当した。なお、調査結果の詳細は「平成27年度西川緑道公園界隈まちづくり関連業務委託報告書」を参照されたい。

1）西川緑道公園界隈のまちづくり活動への参加を促す啓発活動

講演会や勉強会を中心に主催し、岡山のまちづくりに関する意見交換を行った。まずは、本学がまちづくりのモデル都市として研究を進めている、ポートランド市（アメリカ）を題材とした。６月にポートランド視察報告会を岡山市と協働で開催、９月にポートランドの活動家であるシティ・リペア代表のマーク・レイクマン氏を招聘して道路空間を活用した人の集まる手法を学び、12月にポートランド州立大学のイーサン・セルツァー教授を招聘し、同市の都市計画の歴史と展望をレクチャーしていただいた。

学生向けにはGISを使った都市計画を学ぶ勉強会を実施したり、岡山市都市整備局石田尚昭審議監による「西川緑道公園のまちづくりの今」と題した特別授業をしていただいた。

また、近隣大学でのまちづくり講義やシンポジウムに学生とともに参加したほか、西川緑道公園や旭川周辺で実施されるイベントや、西川アゴラを使用してのまちづくり団体の会議等へ積極的に参加した。

▲西川清掃

内　　容	人数(人)
西川清掃活動	10
ポートランド視察報告会	30
徳島大学まちづくり実践講義「インスタント・パーク」	7
センス・オブ・プレイス（マーク・レイクマン代表）	20
ポートランドのまちづくり（イーサン・セルツァー教授）	120
三都市シンポジウム（熊本市にて学生参加ワークショップ）	7
西川緑道公園のまちづくりの今	10
GISを使った勉強会	20
西川をまなぶ（国土交通省五十嵐調整官講演）	24
合　計	248

▲啓発事業への市民、学生の参加人数

2）西川緑道公園等で行われるイベント来訪者へのアンケート調査

西川緑道公園で行われている「有機生活マーケットいち（以下、いち）」の来場者及び出店者及び実行委員会に対して聞き取り調査を行った。調査は10月と11月の２回にわたって行ったが、常連客（６回以上訪れている）だけでなく、毎回新たな客が一定割合来ていることが明らかになった。いちの主催者は、来場者が固定化してきたと感じていたが、実際には、新規の客も増えていることが分かった。イベント開催情報の入手方法を聞いたところ、常連客は、いち関係者などからの口コミが情報源になっていたが、新規の来場者には、いちを訪れた知人のSNSによって情報を得たという人が多く、いちが市民の間に徐々に浸透し、認知度を高めている実態が把握できた。これらは、市役所や実行委員会に報告した。

3）西川緑道公園界隈交通量調査

岡山市では、平成27年度に、西川緑道公園筋市道（右岸側）の平和橋－桶屋橋区間を通行止めとしてオープンカフェを開く実験を３回実施した（５月、10月、11月）。将来、オープンカフェを恒常的に開催することも見据え、通常時に当該道路区間を通過する車両がどのような経路をとっているのかを確かめた。この結果、80％以上の車両が単に通過するだけでこの道路を使用しており、脇道に侵入する割合は比較的少ないことが確かめられた。このほか、イベント開催時に、県庁通り、あくら通り、西川緑道筋市道（両側）の自動車通行量、歩行者通行量の計測を行い、昨年度の同様に調査結果と合わせて分析し、西川緑道公園界隈の交通特性を明らかにした。

4）市内中心部の建物用途調査

西川緑道公園を中心にするエリアとして、県庁通り以北－桃太郎大通り以南、市役所筋以東－柳川筋以西を選定し、東西方向の道路に沿った建物の入居テナントを調べ、データベースを作成した。調査結果を踏まえ、テナントの業種（物販、飲食、サービス、住宅、駐車場（平面式の土地含む）、その他）、テナントの営業時間帯（主として昼、主として夜）に分けて分析したところ、全体的に駐車場の占める割合が高いこと、街区によっては夜型の店が集中し、昼間の回遊性が低いところがあることなどを明確に示すことができた。これに合わせ、エリア内の主要交差点で方向別の歩行者通行量を計測したことで、中心市街地の人の流れと建物用途の関係を合わせて分析することができた。

5）回遊性向上社会実験アンケート調査

岡山市が５月３・４日に実施した中心市街地の回遊性向上社会実験に合わせ、実験範囲とその周辺のイベント会場を訪れる人に回遊性に関するアンケート調査を行った。

アンケート項目は岡山市と十分に精査したほか、イオンモール岡山や天満屋を訪れる人も対象となったため、それらの企業などとの調整をした。

この後、岡山市は10月、11月にも回遊性社会実験を実施したが、歩行者天国の使い方、市民への周知方法などを改善するために、学生の調査が役立てられた。

▲岡山市回遊性向上社会実験の様子

▲ヒアリングする学生

7-2　岡山市「健康寿命に関連する要因分析業務」

2010年時点の岡山市の健康寿命は男性69.0歳、女性72.7歳と、全国平均を下回る状況である。当センターでは、岡山市から事業委託を受けて、岡山市の効果的な健康寿命延伸施策の策定に寄与することを目的とし、健康寿命に影響を及ぼす要因分析を行った。分析にあたり、健康寿命の指標として要介護認定、健康づくりに欠かせない要素である「栄養・運動・休養」に着目し、同市が保有している約５万６千人分の健診データを利活用して検討を行った。本調査は、当センター山川路代助教が担当した。

7-3　岡山県「岡山県国民健康保険団体連合会データヘルス事業」

本事業では、医療レセプトデータの分析を通じて、医療費の削減に寄与する要因を明らかにすることを主目的とし、その他に現行事業の見直し、新規事業の検討を行うことを目的としている。

担当者は浜田淳（医学部医学科・教授）、齋藤信也（医学部保健学科・教授）、芳我ちより（同学科・准教授）、岩瀬敏秀（医歯薬学総合研究科・助教）、三橋利晴（岡山大学病院新医療研究開発センター・助教）、山川路代（地域総合研究センター・助教）である。

今年度の派遣先は、備前市国民健康保険組合、西粟倉村国民健康保険組合、中四国薬剤師国民健康保険組合の３事業所であった。派遣回数は全３回で、最後に発表会を実施（平成28年３月予定）。当センター山川路代助教は齋藤教授とともにアドバイザーとして中四国薬剤師国民健康保険組合に派遣され、データ分析の手法と結果の解釈方法について助言を行った。

7-4　商店街等調査事業実行委員会「岡山市商業調査」

平成26年12月にイオンモール岡山が開業し、一年が経過した。この間、既存商業施設のリニューアルや大型医療施設の整備、都心部の回遊性向上社会実験の実施、第１回おかやまマラソンの開催など、岡山市内では様々な動きが見られた。これに伴い、商業環境も変化し、地域社会では様々な取り組みがなされ街の変化を実感している。こうした環境変化を踏まえ、岡山商工会議所・岡山大学・岡山市で構成する「商店街等調査事業実行委員会」が岡山市商業調査を実施した。本実行委員会では、平成25年度にイオンモール岡山開業前の商業調査を実施している。今回は、前回と同様の調査を行い、イオンモール岡山開業の影響を把握し、今後の商業振興施策等に活かすことを目的にしている。当センターでは、三村聡教授と前田芳男准教授が「商圏（消費者購買行動）調査」及び「まちなか回遊及び買い物行動に関するグループインタビュー調査」、「商店の現況と今後の商業環境の見通しに関する調査」を担当。調査結果は、今後の岡山市の賑わい創出に活かしていく予定である。

8 地域連携と窓口機能の展開

8-1 各種講演

日　付	講演先	催事・対象者	テーマ	AGORA担当者
2015/4/6	トヨタ自動車（株）	モビリティ研究	「岡山都市とモビリティ研究会発足準備について」講演	三村聡
2015/4/13	公益財団法人岡山県市町村振興協会	岡山県「市町村新人職員」研修会	「自治体職員への期待と地方創生」講演	三村聡
2015/6/8	岡山駅西口活性化協議会	西口活性化セミナー	「岡山駅西口エリアの賑わい創出を考える」講演	三村聡
2015/7/12	「こくさいこどもフォーラム岡山」（通称INTERKIDS OKAYAMA）	INTERKIDS OKAYAMA「第2回高校生懸賞論文2015」	審査・講評	三村聡
2015/8/6	全国地区計画推進協議会	平成27年全国地区計画推進協議会研修会	「地域コミュニティとまちづくり」講演	三村聡
2015/9/2	岡山商工会議所	第1回まちなか活性化協議会	「新しい市民会館建設に関する課題と留意点」アドバイス	三村聡
2015/9/11～12	人を大切にする経営学会	第2回全国大会	「人を大切にする経営は企業業績を高めるか」コーディネートと講評	三村聡
2015/9/16～18	土木学会	全国大会2015	「市民参加と合意形成～東日本大震災から学ぶ」報告	三村聡
2015/9/18	特定非営利活動法人ITS Japan、中国経済連合会	第8回ITS地域交流会 in 中国地方2015	「交通の利便性向上による街や地域の活性化を考える」報告	三村聡
2015/10/11	日本地域学会	第52回全国大会	シンポジウム「市民協働のまちづくりによる中心市街地再生」コーディネート	三村聡
2015/10/24～25	日本金融学会	2015年秋季全国大会	「地方創生と地域金融機関の役割」報告	三村聡
2015/11/3	テレビせとうち	開局30周年企画	報道特別番組「始動！おかやま最前線―岡山市中心部のまちづくり―」出演	三村聡
2015/11/11	岡山ライオンズクラブ例会	例会	「岡山経済界にとっての地方創生」講演	三村聡
2015/11/13	岡山スポーツプロモーション研究会	定例会	「岡山市西口における都市計画と地区計画の可能性」話題提供（大学院社会文化科学研究科学生の山本尚見氏と共同発表）	三村聡
2015/11/20	'91岡山県技術交流プラザ	27年11月例会	「地方創生と企業経営のあり方」講演	三村聡
2015/11/28	有隣会	第4回「大原孫三郎・總一郎研究会」	「大原社会問題研究所の心」報告	三村聡
2015/12/5	日本体育・スポーツ経営学会	第51回研究集会	「地方創生－都市と地方－」講演	三村聡
2015/12/12	公益社団法人日本技術士会中国本部岡山県支部事業委員会	日本技術士会中国本部岡山県支部例会	「協働のまちづくりに向けた大学の取り組み」講演	三村聡
2015/12/15	'84岡山県技術交流プラザ	27年12月例会	「地方創生と企業経営のあり方」講演	三村聡
2016/1/14	平成27年度井原市議会議員研修会	井原市議会議員20人	地方創生について	三村聡
2015/10/19	岡山県都市計画協会	平成27年度講演会	講演Ⅰ：「市民参加が求められる持続可能なまちづくり」 講演Ⅱ：「空き家の活用法を開発しよう」	講演Ⅰ：三村聡 講演Ⅱ：前田芳男
2015/5/25	立命館大学BKC事務局職員研修「BKC地域連携勉強会」	学校法人立命館びわこくさつキャンパス所属の地域連携関係職員、教員	「地域創造プラットフォームへの期待と展望」講演	山田一隆

日　付	講演先	催事・対象者	テーマ	AGORA担当者
2015/12/ 9	岡山県美作県民局研修会「美作国"実·楽·彩"づくり塾」	美作県民局市町村職員と県職員	「研修成果報告会に向けたワークショップ」ファシリテーション	山田一隆
2015/12/10	関西地区大学ボランティアセンター連絡協議会	関西地区大学ボランティアセンターコーディネータ、社会福祉法人大阪ボランティア協会職員	「学生のボランティア活動を評価する－学びと成長の測り方のあり方とやり方－」講演	山田一隆
2015/12/10	社会福祉法人大阪ボランティア協会	関西地区の大学ボランティアセンターの職務に従事している職員	学生のボランティア活動の考え方やその手法	山田一隆
2015/ 4 /27	日本科学者会議岡山支部	科学者・一般市民	「アマゾン土地なし農民による生産の場としての森林の持続的利用」	石丸香苗
2015/ 5 / 1	愛媛県立松山東高校	「グローバル明教」履修の高校生２年生	ブラジルアマゾンの人の暮らしと森林利用	石丸香苗
2015/ 9 /29	美作県民局研修会	美作県民局市町村職員と県職員	地域資源と景観	石丸香苗
2015/ 7 /31	学芸館高等学校	中学生・高校生	ポートランド市のまちづくり	岩淵泰
2015/10/ 9	公益財団法人明るい選挙推進協会（神戸）	一般市民、特に高校生	地域コミュニティフォーラム（近畿ブロック）	岩淵泰
2015/10/27	公益財団法人明るい選挙推進協会（京都）	一般市民、大学生	若者リーダーフォーラム（東海北陸、近畿ブロック）	岩淵泰
2016/ 2 / 1	岡山市明るい選挙推進委員	一般市民、特に高校生	明るい選挙推進の集い「若者と政治·選挙について」パネリスト	岩淵泰
2015/ 8 /25	NetCommonsユーザカンファレンス2015	一般	学生と○○をつなげるNetCommons―コーディネートシステムの開発へ―	佐藤大介
2015/10/15	笠岡市通所事業所連絡会研修	笠岡市内通所事業所職員60名程度	根拠に基づく介護事業―岡山市や海外の事例から学ぶ	山川路代

8-2　外部委員・協議会等への参画

外部委員・協議会	AGORA担当者
岡山市平成28年度包括外部監査人選定委員会（岡山市総務局行政事務管理課）	三村　聡
文部科学省「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC＋）」「地域で学び地域で未来を拓く'生き活きおかやま'人材育成事業」教育プログラム開発委員会	三村　聡
岡山県「美作国創生公募提案事業」審査委員長	三村　聡
岡山県「環境学習協働推進 企業向け環境学習プログラム開発委員会」委員	三村　聡
岡山県「ICT岡山熱血リーダー発掘事業 選考委員会」審査委員長	三村　聡
岡山商工会議所「まちかな活性化協議会」アドバイザー	三村　聡
OHK番組審議会審議委員	三村　聡
岡山市「総務・市民政策審議会」委員	三村　聡
岡山市「岡山ESD推進協議会」運営委員会委員	三村　聡
井原市「井原中学校建替えに関する設計コンペ」審査委員	三村　聡
井原市「指定管理者選定委員会」委員	三村　聡
一般財団法人 地域公共交通総合研究所 理事	三村　聡
公益財団法人　水島地域環境再生財団 中長期計画策定　外部評価委員	三村　聡
井原市　地域創生戦略顧問	三村　聡
公益財団法人　岡山県環境保全事業団　環境学習センター「アスエコ」委員	三村　聡
井原市　「元気いばら創生戦略会議」委員	前田芳男

外部委員・協議会	AGORA 担当者
公益社団法人　全国消費生活相談員協会 幼小中高生向け消費者教育プログラム開発事業のための研究会　委員	前田芳男
特定非営利活動法人まちづくり推進機構岡山 理事	山田一隆
岡山県美作県民局研修会「美作国“実・楽・彩”づくり塾」講師	山田一隆 石丸香苗
「環境学習を通じた人材育成・まちづくりを考える協議会（水島協議会）」委員	三村　聡
「環境学習を通じた人材育成・まちづくりを考える協議会（水島協議会）」オブザーバー	石丸香苗 鷹野郁子
岡山市西口活性化協議会	三村　聡 鷹野郁子
岡山市明るい選挙推進委員会会長	岩淵　泰
和気町まちづくり審議員	岩淵　泰
早島町教育委員会　早島学園学校運営協議会委員	佐藤大介
新見地域医療ミーティングオブザーバー	山川路代

8-3　岡山市都市戦略懇話会検討部会

岡山都市戦略懇話会は、岡山大学、岡山市、岡山商工会議所の三者で構成される会議体である。平成23年に「岡山市経済戦略懇話会検討部会」として開催されて以来、魅力ある街づくりについての議論として、平成26年12月に出店された大型商業施設イオンモール岡山の出店、都心部の回遊性向上社会実験、ポートランドのまちづくりなどをキーワードに産官学が一体となったまちづくりをするための議論を行ってきた。平成27年度より経済面だけでなく、岡山そのもののまちづくりに焦点を当てた対話の場とすることとし、「岡山市都市戦略懇話会」と名称を変更して、引き続き討議を行っている。

＜平成 27 年度第 1 回＞

7月22日、岡山市勤労者福祉センターを会場に、本会が開催され、岡山市政策局長の挨拶で開会した。最初に、4月に岡山経済界、岡山市、岡山大学の一行によるアメリカオレゴン州ポートランド視察の内容報告が、経済界、岡山大学、岡山市の順番で行われた。ポートランドのまちづくりから岡山市のまちづくりは何を学ぶべきか、それぞれの立場・目線で話題提供がなされた。次のテーマは、岡山市の基本政策審議会で議論が進む、次期総合計画について岡山市から取り組み状況についての報告があった。さらに、岡山商工会議所から新たなまちづくり協議会が組成されたとの話題提供があり、協議会アドバイザーとして当センターの三村聡教授が選任された。最後に岡山大学から「おかやま地域発展協議体」設立検討に向けた準備会の提案説明をさせて頂き、岡山市経済局長の挨拶で閉会した。

＜平成 27 年度第２回＞

平成28年２月10日、岡山商工会議所にて、第２回検討部会が開催された。当センターからは、「おかやま地域発展協議体」の設立に向けた準備の進捗状況と、ポートランド市をベンチマークにしたまちづくり形成に関する研究について報告した。また、商店街等調査事業実行委員会が調査する「岡山市商業調査」としてイオンモール岡山出店から１年が経過した現在の商店街等の影響調査の報告を行った。

8-4　岡山市とのコンベンション包括協定

岡山大学と岡山市は、７月22日、「コンベンションの誘致・開催における連携・協力に関する協定」を締結した。大学と市が連携することで、より多くのコンベンションの開催による交流人口の拡大、地域経済の活性化を目指すことが目的である。調印式が、岡山市役所で開かれ、森田潔学長、大森雅夫市長、本学教職員ら約30人が出席した。記者会見では、森田学長は「この協定締結は、学都構想の実現に繋がっており、連携・協力し、人が集まる学会を数多く開催していきたい」、大森市長は「スピーディーかつ丁寧な支援を通じ、コンベンション誘致拡大につなげていきたい」とそれぞれコメントした。

▲調印式での岡山市大森雅夫市長と岡山大学森田潔学長

8-5　内閣官房まち・ひと・しごと創生本部・内閣府地方創生推進室

「地方創生人材支援制度」が平成27年度から、内閣府地方創生推進室により創設された。制度の内容は、平成27年４月から２年間、地方創生に積極的に取り組む市町村に対し、地域に応じた「処方せんづくり」を支援する事業として、国が地方創生のアドバイスを行う職員（顧問、参与等の非常勤特別職）を人口５万人以下の小規模地方自治体へ派遣して「地域の独自性を活かした地方版総合戦略」の策定をサポートするものである。第１期生は69名、岡山大学からは当センターの三村聡教授が岡山県井原市へ地域創生戦略顧問として派遣された。

４月１日、井原市に「元気いばら創生戦略本部」（本部長は瀧本豊文市長）が設置され、地域産業の活性化や定住促進、商工業の振興、観光資源・特産品のPR・イベントなど、元気なまちを次世代に継承するための地域創生に係る施策立案作業がスタートした。

さらに６月４日、市民の声を創生戦略に反映するための外部組織として、「元気いばら創生戦略会議」

が設置され、会長に当センターの前田芳男准教授が選ばれた（委員19名、外部有識者（岡山大学）、行政機関（岡山備中県民局）、商工関係団体（井原商工会議所など）、各種団体及び公募委員で組織）。会合を重ねながらそこでの意見が創生戦略に反映された。こうして地方創生総合戦略プランが12月議会に諮られ了承された。なお、三木良一センター長補佐が共に本業務の支援を担当した。

▲元気いばら創生戦略本部の設置

▲元気いばら創生戦略会議

8-6　平成27年度（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC＋）

■岡山大学の関わり

岡山県立大学が代表校として、平成27年度地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）に採択された「地域で学び地域で未来を拓く‘生き活きおかやま’人材育成事業」への本学のかかわりとして、個別事項として申請時記載した内容は以下の２点ある。

①岡山大学が開発する「実践型社会連携教育におけるコーディネートシステム」を活用して、本事業で使用する「雇用マッチングシステム」を共同開発する。

②小中高大連携に基づき整備している小中高の学習支援システムを本COC+事業で共有を図る。

委員として社会貢献担当理事の荒木勝副学長が推進を担当しながら、他大学、自治体、経済界と共に本事業をフォローする。

なお、本プログラムの教育プログラム開発委員会には三村聡教授が選任されている。

▲キックオフシンポジウムの様子

11月27日、岡山県立大学において「COC＋推進協議会設立総会」が開催され辻英明学長より講話があった。当日は三村聡教授が委員代理として出席した。

さらに、平成28年２月19日、山陽新聞社さん太ホールでキックオフシンポジウムが開催され、当センターから教職員８名が出席した。

■雇用マッチングシステム（申請書より抜粋）

雇用創出を実現するためには地元企業の振興対策が重要であるが、数的に大きく、情報が十分でない県内の中小企業・小規模事業者の特性、特徴を「企業ポートレート」としてつぶさに洗い出して、雇用先リストに加えていくことも重要である。「雇用マッチングシステム」とは「企業ポートレート」に基

づく雇用先リストと、学生のキャリアに関する詳細なデータベースである「学生ポートフォリオ」のマッチングを効率的かつ的確に行うことのできるシステムであり、本COC+事業で構築し、全COC+参加校へも運用を拡大していく。

＜今年度の開発＞

今年度は、学生ポートフォリオの開発に注力した。その目的としては、現在、大学では様々な教育改善に向けた取り組みを行っており、学生個人の「学修」の過程やその成果をエビデンスとして可視化できるシステムとしてのeポートフォリオの導入が進められている。今回、その開発に注力したのもこうした流れを汲むものであり、eポートフォリオによって、学生による「学修」を蓄積し、それらを活用し自身のリフレクションを行い、また教員とその学びの履歴を共有したり相互評価に活用することができることも目的としている。しかしながら、eポートフォリオは各大学や各学部によって蓄積する情報やデータの種類、また連携するシステムなど多様化しており、また時代の流れが急速に変化する中で蓄積するポートフォリオの内容も変更させていく必要があるにも関わらず、導入および運用においてその柔軟性に欠けている。

そこで今年度は、様々なニーズに対応できる汎用的なeポートフォリオシステムの開発を目指し、「雇用マッチングシステム」の重要な機能である学生ポートフォリオの構築・開発に取り組みを行った。本システムの開発には当センター佐藤大介助教が関わった。

8-7　美作市上山地区地方創生プロジェクト

岡山県美作市上山地区が、トヨタ自動車創設「トヨタ・モビリティ基金（理事長は豊田章男・トヨタ自動車（株）代表取締役社長）」の国内初となる助成案件に選定された。プロジェクト名は、「中山間地域の生活･経済活性化のための多様なモビリティ導入プロジェクト（通称:上山集楽みんなのモビリティプロジェクト）」、助成を受ける団体は、岡山県を中心に中山間地域の活性化に取り組むNPO法人みんなの集落研究所（石原達也代表）と、美作市上山地区で棚田の再生に取り組むNPO法人英田上山棚田団（猪野全代代表）の二団体。

本プロジェクトは、NPO法人と地元住民が主役となり、超小型モビリティ（EV）を活用して、①住民の皆さんの日常利用や地域社会を支え、見守るための利用、②棚田の再生はじめ農業や林業での利用可能性の検討、③上山地区の棚田の景観を愛でながら、周辺にある温泉や宿泊施設、ハイキングコースやテニスコートを結ぶ、自然環境に溶け込む里山暮らしを満喫して頂くための観光で活用する。

移動の多様性と確保をキーワードに中山間地域における新たなモビリティシステムを構築する事業の展開を予定している。助成期間は約４年間で金額は２億２千万円である。

岡山大学の支援体制は、環境理工学部が現地の移動ニーズや移動環境の調査を、工学部が移動データの分析や超小型モビリティの改造などを、さらに教育学部で子供の教育環境、経済学部が美作市全体のまちづくりにまつわるデータ分析、医学部が医療ケア対応を担当し、全体のコーディネートは荒木勝社会貢献、国際担当理事・副学長の指示の下で、当センターが担当する予定。

12月25日、美作市上山地区において調印式が行われ、本学からは荒木勝社会貢献、国際担当理事・副学長、当センター三村聡教授と担当職員が臨席、記者会見当日は岡山大学所有の超小型モビリティ（コムス）が、デモンストレーションで使用され、式典に花を添えた。

▲調印式での集合写真

▲調印式のデモンストレーションで使用したコムス

8-8　倉敷市連携中枢都市圏構想

■高梁川流域学校

６月28日、倉敷公民館にて高梁川流域学校」設立記念フォーラムが開催された。冒頭、倉敷木材株式会社の大久保憲作社長から「本校は、昭和29年に大原總一郎氏らによって設立された高梁川流域連盟の理念を継承し、私たち一人一人が身近な隣人たちと地域の明るい未来を創るために働き、有意義な活動をしていくことを目的にしています。2003年から流域の環境教育を中心として活動してきたGREEN DAYの成果を反映して、流域の自然、歴史文化、産業を学ぶ地域教育と地域経済に資する観光振興を融合させた活動を行っていきます。」と開校宣言がなされた。

フォーラムは、伊東香織倉敷市長の祝辞で始まり、まず高梁川流域学校校長に就任した民俗学者の神崎宣武氏による基調講演「高梁流域学校の昨日・明日」、続いて大久保氏の進行により記念シンポジウムが開催された。発言者は、ヨーゼフ・クライナー氏（ボン大学名誉教授）、澁澤寿一氏（認定NPO法人共生の森ネットワーク理事長）、大原 あかね氏（公益財団法人大原美術館専務理事）、そして当センターから荒木勝センター長（岡山大学理事・副学長）が登壇した。

岡山大学としては当センターから、三村聡教授、前田芳男准教授、石丸香苗准教授、鷹野郁子研究員が高梁川流域学校の活動を支援する。備中で暮らす匠（先人）への「聞き書き」事業や、みずしま財団と連携して行う水島コンビナートスタディツアーなどに参画している。

平成28年２月６日に開催された「高梁川ミーティング2015」では、石丸香苗准教授が登壇し、高梁川流域を舞台とした実践型社会連携プログラムの実施を報告した。

▲高梁川ミーティング

また同日、前田芳男准教授は高梁川流域学校のプログラムの１つとして、小学生向けの環境学習教材を開発するためのワークショップを行った。

■高梁川流域を核とした地域づくりと教育

地方創生に向けて全国の自治体が創生戦略を描くなかで、倉敷市は高梁川流域を結ぶ「連携中枢都市圏構想」の拠点都市として近隣自治体や企業との連携を深めている。６月２日、水島コンビナート企業と地域社会が一層の連携を深めるべく、三菱ケミカルホールディングス代表取締役副社長をつとめた津田登氏（現取締役）を招聘した。

倉敷市美観地区にて意見交換会を開催してコンビナート企業への一層の社会貢献活動への協力と、岡山大学が展開する、環境学習やグローバル実践型教育などの倉敷市水島コンビナートを舞台にした様々な活動に協力体制をとることを要請した。当センターから荒木勝センター長、伊藤直人アドバイザー、三村聡副センター長・教授、三木良一センター長補佐が、地元経済界を代表して倉敷木材株式会社の大久保憲作社長が参加した。

■高梁川流域連携中枢都市圏ビジョン懇談会

高梁川流域連携中枢都市圏ビジョン懇談会は、倉敷市をはじめ高梁川流域の７市３町で形成する同都市圏において、中心都市の倉敷市が他の市町と広域連携を推進するにあたり、その施策を検討する外部人材でつくる会議体である。同都市圏にある８商工会議所、７商工会、JA、大学、金融機関、基幹病院、鉄道会社等の代表らで構成する。

１月12日、2015年度の懇談会が倉敷市消防局講堂（同市白楽町）で開催され、伊東香織倉敷市長ら市幹部や関係職員も出席し、本年度取り組んできた施策と次年度に計画する施策をまとめた「高梁川流域成長戦略ビジョン」の改訂素案について、倉敷市の事務局から説明を受けた後、懇談会メンバーの間で活発な意見交換が行われた。学識経験者として選任された荒木勝岡山大学地域総合研究センター長は座長を務め、議事を進行した。

▲懇談会の様子

9 学内連携

9-1　ネットワーク・アゴラ

岡山大学大学院社会文化科学研究科の教員が中心となる地域創生ネットワーク・アゴラと当センターはメンバーが相互に重複していることなどから、従来から連携、協力しながら、まちづくり活動を行ってきた。今年度は、荒木勝代表および当センター長の監修のもと「岡山大学版」教科書として『現代公共政策のフロンティア』を出版しその一部の執筆を担当した。

第９章　現代コミュニティと地域経済
－岡山県における事例を中心として－（担当：三村聡）
第11章　フランスにおける学都創成－ストラスブール市における大学と都市のまちづくり―（担当：岩淵泰）
第12章　ポートランドのまちづくり物語（担当：岩淵泰）

また、ポートランド州立大学との連携を深めるため、社会文化科学研究科の学生２名を２週間の短期留学に派遣。かねてよりポートランドのまちづくりについて研究している当センター岩淵泰助教が事前授業を担当した。

9-2　岡山大学若手職員塾

平成27年度の岡山大学若手職員塾は、前半（７月～９月）のテーマを「地域における大学の役割」とし、当センターの前田芳男准教授がコーディネーターと講師を務め、以下の通り３回の研修を行った。

◆第１回　岡山大学の取り組み・地域協働の現状と招来　７月17日（金）@西川アゴラ
◆第２回　熊本大学の取り組み　８月20日（木）@西川アゴラ
◆第３回　地域における大学の役割についての塾生提案　９月25日（金）@J-ホール

第１回は、岡山大学が進めようとしているアクティブラーニングについて、その定義を学ぶとともに、大学での普及促進に向けて職員が何をすべきかを話し合った。第２回は、熊本大学政策創造教育研究センターの阿部美和助教を講師に、熊本大学における大学と地域の連携についての講話を頂き、両大学の共通点や互いに学ぶべき点を話し合った。第３回は、岡山市ESD推進室の職員をゲストに招き、実際に行政と大学がどのように協働できるかを話し合った。ここでの出会いがきっかけとなり、岡山市若手職員と岡山大学若手職員塾メンバーの合同勉強会が始まっている。

9-3　研究推進産学官連携機構（知恵の見本市）

研究推進産学官連携機構が実施する「知恵の見本市2015～もんげ～岡山大学～」において、地域連携をテーマにブースを出展した。「岡山県の産業と連携した長期実践型教育プログラム」と題して、当センターが取組むグローバル実践型教育科目「森林利用グローバルインターンシップ&Co-opプログラム」について、パネルを展示した。

出展の様子▶

9-4　言語教育センターとグローバル・パートナーズ

グローバル・パートナーズが展開するキャンパス・アジア事業で、プログラムの企画を支援することをきっかけにグローバル・パートナーズ、言語教育センター（L-Café）とは、留学生が地域で活動することにおいて、緊密な連携をとっている。

また、当センターが取り組んでいる「留学生のまちづくり」事業では、留学生の地域活動への参加呼びかけをし、UBC（カナダ・ブリティッシュコロンビア大学）のCo-opプログラムの学生受け入れや留学生向けカリキュラムの策定などについても協働体制をとっている。来年度以降も引き続き、これらの事業で連携していく。

9-5　センター教員担当授業科目

教養、専門、大学院	科目区分等	授業科目	担当教員	期	曜	時限	備　考
教　養	主題科目（現代の課題）	フィールド調査の基礎を学ぶ	前田芳男	後　期	木曜	2	
教　養	主題科目（現代の課題）	レポートの書き方講座～フィールドワーク編～	前田芳男	後　期	金曜	3	学生発案型授業
教　養	主題科目（現代の課題）	大学とまちづくり－NPO等との連携を通じて－	荒木秀治	後　期	月曜	1	
教　養	主題科目（現代の課題）	地域社会貢献型学習等支援活動	佐藤大介	通　年その他			
教　養	主題科目（健やかに生きる）	多職種連携と地域包括ケアのワークショップ	浜田淳（大学院医歯薬学研究科　教授）山川路代	後　期その他			
教　養	主題科目（健やかに生きる）	地域高齢者と介護	浜田淳（大学院医歯薬学研究科　教授）山川路代	前　期	木曜	2	
教　養	主題科目（健やかに生きる）	障害予防の科学	山川路代	後　期	木曜	2	
教　養	主題科目（現代の課題）	倉敷市水島から学ぶ地域社会と環境	石丸香苗	前　期	金曜	3	
教　養	主題科目（現代の課題）	グローバル人材育成に寄与する	佐藤大介	通　年	木曜	2	

教養、専門、大学院	科目区分等	授業科目	担当教員	期	曜	時限	備　考
教　養	主題科目（現代の課題）	創造的討論技術を学ぶ	前田芳男	前　期	木曜	2	
教　養	主題科目（現代の課題）	現代コミュニティと地域経済	三村聡	前　期	木曜	2	
教　養	主題科目（現代の課題）	現代コミュニティと地域社会	三村聡	後期集中			
教　養	主題科目（自然と技術）	現代ブラジルの社会と環境	石丸香苗	後　期	木曜	2	
教　養	主題科目（人間と社会）	世界のまちづくり１	岩淵泰	前　期	木曜	2	
教　養	主題科目（人間と社会）	世界のまちづくり２	岩淵泰	後　期	木曜	2	
EPOK科目		Study of Deep Kyoto	山田一隆 宇塚万里子 （グローバル・パートナーズ　教授）	後　期	火曜	5	
EPOK教養科目		日本研究 Japanese Studies	山川路代	後　期	金曜	3	1コマ担当
教　養	英語	総合英語５（リーディング）	佐藤大介	前　期	月曜	2	
教　養	英語	総合英語２	佐藤大介	前　期	月曜	4	
教　養	英語	総合英語２	佐藤大介	前　期	木曜	3	
教　養	英語	総合英語５（ライティング）	佐藤大介	後　期	木曜	3	
教　養	英語	総合英語２	佐藤大介	後　期	金曜	3	
教　養	英語	総合英語５（ライティング）	佐藤大介	後　期	金曜	4	
専　門	医学部保健学科	ヘルスプロモーション入門	山川路代	後　期	金曜	2	2コマ担当
大学院	社会文化科学研究科	地域フィールドワーク論演習（ポートランド）	岩淵泰	特　別	火曜	2	2コマ担当
大学院	社会文化科学研究科	ヨーロッパ都市論	岩淵泰	前　期	火曜	2	
大学院	社会文化科学研究科	自治体経営戦略論	三村聡	前　期	水曜	7	
大学院	社会文化科学研究科	地域創生特別講義	三村聡 岩淵泰	後　期	金曜	7	4コマずつ担当
大学院	医歯薬学総合研究科	社会医歯科学	山川路代	前期集中			1コマ担当
大学院	公衆衛生学修士（MPH）コース	旅行医学	石丸香苗 山川路代	後期集中			１コマ（石丸） ２コマ（山川）担当
大学院	先進基礎科学特別コース	組織マネジメント論	三村聡	後　期	木曜	4	6コマ担当
大学院予備教育特別コース		プレマスター特別講義	山川路代		金曜	2	1コマ担当

10 実践型社会連携教育プログラムの取組み

10-1　実践型社会連携教育プログラムの定義と評価基準の検討

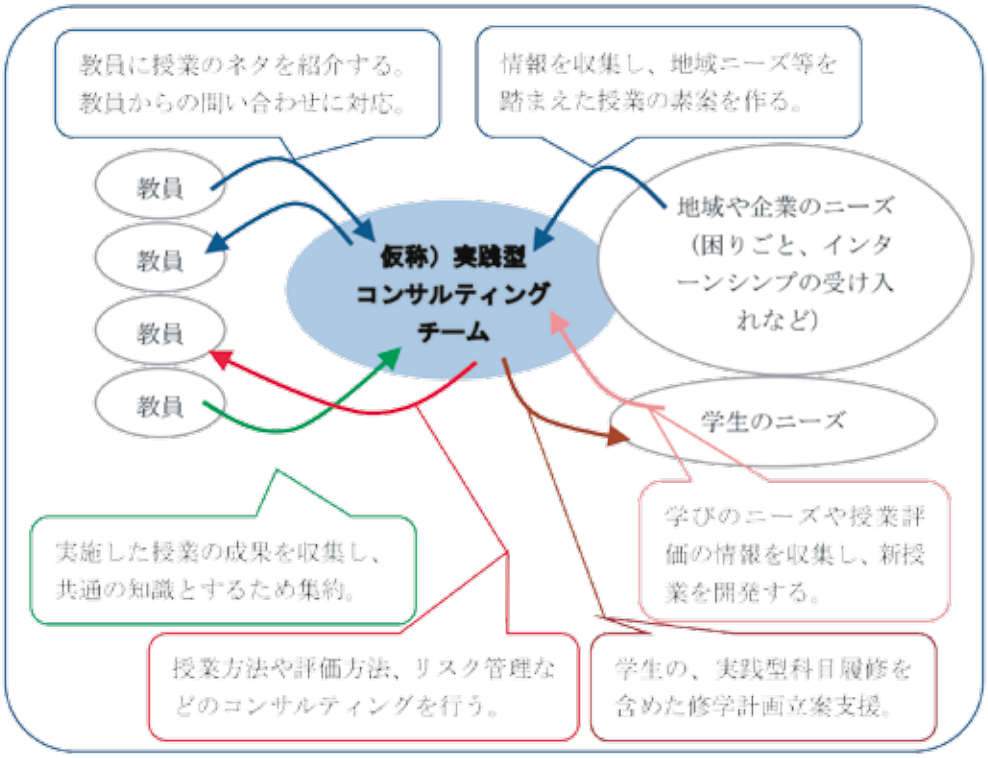
実践型教育科目については、平成26年度から当センターにおいて、その定義づくり、全学で既に行われている実践型に相当する科目の把握、独自のプロトタイプ授業の開発・試行等を担ってきた。平成28年度から、60分授業、４学期制の導入に加え、実践型教育科目が全学的に導入されるにあたり、これまで検討してきた実践型科目の定義と、成績評価や授業自体の評価方法について整理して示し、情報共有するための資料作成を行った。

実践型教育は、近年の様々な大学での予算獲得事業の中に位置づけられている。当初、概算要求（H26－30）に基づく「実践型社会連携教育プログラム」を通した実践人の育成の検討から始まり、当センターがプロトタイプ科目の開発に着手した。ただし、この概算要求は、全国的に27年度末で終了し、28年度より仕切り直しとなるため申請し直した（実践型教育の基本路線は踏襲されている）。平成26年度にSGUに採択されたが、その中でグローバル実践人や高度実践人という概念やアクティブラーニングの導入が打ち出された。さらに、第三期中期計画の中では、倫理教育、実践型社会連携教育の全学展開が謳われている。このように、重層的に諸計画が打ち出された結果、実践型教育、実践知教育、実践人育成など、各予算資料において似たような用語があり、これらの考え方を整理した。

10-2　コンサルティング業務の試行

実践型科目を全学展開していくには、その教授法の開発や指導、全学的な支援体制を担う中心的組織が必要である。その概略を次頁の図のように想定し、当センターの教員において可能なレベルで、コンサルティング業務を試行した。具体的には、全学的な導入が進められているアクティブラーニングに関し、授業の作り方や、アクティブに学ぶ学生チームの作り方に関する研修を行った。

▲研修の様子



10-３　実践型社会連携教育プログラムのリスクマネジメント

実践型社会連携教育プログラムでは、キャンパス外をフィールドとする教授学習活動が、従来のそれに比べて多くなることが見込まれる。平成28年度から、当該プログラムないし該当する教授学習活動が全学的に本格化するにあたり、新たにこうした活動に取り組む教員やそれを支援する職員等の業務が増加することになる。そのなかで、後景におかれがちな取り組み分野ないし業務として、リスクマネジメントがあげられる。リスクマネジメントは、担当科目で新たな試みに挑戦する教員に対しては、安全な労働衛生環境で教育活動に専念するために必要であり、学生に対しては、安心して能動的に学習活動に専念するために不可欠な業務分野である。また、「何か」が起こった時には、当該学生、保証人、マスコミ、現場などへの対応が、連携し整合的に行われることが肝要である。ただ、残念ながら、リスクマネジメントのノウハウは、各部局に分散し、俗人的に蓄積され、全学で統一的な、もしくは相互参照しあうような環境は未整備であるといって差し支えない。

このような状況を改善することは、充実した実践型社会連携教育プログラムの量的質的な豊富化と合わせ、安全な労働衛生環境の下で、安心して学生、教職員が新しいスタイルの教授学習活動に専念できるという、本学の評判（ブランディング）にも直結する。言い方を変えれば、「岡大に行けば、実践力を身に着けてくれるいい教育プログラムがあって、いい人を育てる大学だな」という評判の普及を基盤的に支えるのがリスクマネジメントである。

注意が必要なのは、「何も起こらなくて当たり前」を実現するのは、「何もやらない」ことではない。「何か」に備えることであり、「何か」が起きた時に適切な対応を適時・的確に行うことである。目の前の教育を改善するために、「何もやらない」という選択肢はなく、そのためには、「何も起こらなくて当たり前」を実現するための人的資金的な措置が必要になる。そのための基盤的な取り組みを、平成27年度

に取り組んだ。具体的な取り組みは、以下のとおりである。

Ⅰ．教室外活動を伴う科目等における危機管理について

教室外活動を伴う科目等における危機管理について、他大学の先行事例を参照しつつ、本学の事情を各部局や科目担当者に対する聞き取り調査により、整理した。

教室外活動を伴う科目の実践を大学等で大きく宣伝し、ひとつの「売り」にしている先行事例では、学生や科目担当者である教員など、科目にかかわる直接の当事者のほかに、多くの部局の教職員が直接的、間接的に関与している。ひとつの科目の教室外活動は、当該科目担当者の全責任において催行されるのではなく、部局ないし全学の組織的責任において催行されるという前提で取り組まれていることは強調されてしかるべきところである。

本学の部局や教職員に対する聞き取り調査では、科目担当者は、公益財団法人日本国際教育支援協会「学生教育研究災害傷害保険」に学生が加入していることを前提にしていることが多いが、本学では入学時に加入必須としておらず、教室外活動催行時の確認も不十分である蓋然性が高いことが浮き彫りとなってきた。

また、留学生や旧特別永住者等、日本国籍を有しない外国籍学生の海外渡航を伴う教授学習活動において、独自に積極的に対応できる体制があったり、他部局への照会を求めたりする部局がある一方、当該学生の申告がなければ特段の配慮を行わない、そのような学生が活動に参加することを想定していない、部局もみられた。

こうしたことから、科目担当者に対して、学生の安全確保や安全配慮に対する必要最低限の「手引き」を作成し、必要に応じて参照できる環境を整えること、他部局の取り組み事例を相互参照できる環境を整えていくことの必要性が明らかとなった。

Ⅱ．実践型社会連携教育の推進体制（おもにリスク関係）の整備のための現状調査

上述「Ⅰ.」の結果から、科目を開講する全部局に対して、各部局が保有する「教室外活動を伴う学習、教育活動の（暗黙的、経験的、形式化された）リスク管理に関するノウハウ」、および、「過去に発生を認知した事件事故、ヒヤリハット事案に関する対応状況に関する情報」を、形式知として部局間で相互参照できるようにするため、現状調査を実施した。

実施経過・計画

2015年７-12月　当センターとおもな関係部課との事前の打合せ（照会項目と調査方法の吟味）
2016年１月14日　正課におけるキャンパス外活動に関するリスク管理実態調査に関する打合せ（学務企画、学生支援、安全管理の各課との合同チームの組成）
2016年１-２月　当センターから各部局に照会をかけ（当センター運営委員会にて提起・依頼）、回答を集約（照会フォームへの記入、返却、関連資料の提供）
2016年２-３月　当センターにおいて整理、分析し、必要に応じて追加取材
2016年４月以降　当センター運営委員会にて現状報告と今後の対応について提案

実施体制（合同チーム）

学務部　　学務企画課　　課長　坂本　泰彦
　　学生支援課　　課長　東　　政文
安全衛生推進機構　　教授　宮﨑　隆文
安全衛生部　安全管理課　　課長　大島　康男
地域総合研究センター　　准教授　山田　一隆
総務・企画部　社会連携推進室　室長　近藤　一彦、主任　渡部　英広
本件の事務所掌は、社会連携推進室。

これら、「Ⅰ.」と「Ⅱ.」のおもな成果は、制度面、組織面など、年度ごと（あるいは、学期ごと）に更新されうる内容を多分に含んでいるため、機動性が高い方法で、情報発信することとした。今年度末の段階では、さしあたり、実践型社会連携教育の手引書シリーズ「実践型社会連携教育科目の全学導入に向けて②　実践型社会連携教育科目　リスク管理　（Ver. 0）」に収録した。

10-4　平成27年度開講の実践型社会連携教育科目の概要（AGORA教員実施分）

■10-4-1　倉敷市水島から学ぶ地域社会と環境

1　本科目の目的

本授業では３回のフィールドワークや学外講師による講義とワークショップを通して、「水島」という地域で起こった公害という問題にかかわる「環境」と「地域社会」に焦点を当てた。

コンビナートが出来る前の水島の地域社会、公害の概要とそれが水島に与えた影響、水島の地域住民とは誰を指すのか、企業はどのような経過で公害を出し、企業人たちはどのような気持ちで、何に取り組んできたのか。そして、各々の立場の人たちが公害という環境問題を乗り越えた、水島の地域社会の今と未来の姿はどんなものなのか？多角的な視点から客観的・公平に物事を観察・検証し（批判的思考力）、自ら考えることで自分の意見を形成する能力を付けることは、社会を構成する一員となった時に、正しい意思表示や行動となって表れると期待している。

公害患者・企業・行政・地域で生きる人々など、多角的なまなざしから水島の環境と地域を考え、将来学生が「企業人」そして「地域人」となった時に、それぞれの考え方や行動の源となる倫理観を涵養することを目指した。

2　実施体制

本科目は平成 26 年度に「実践型社会連携教育プログラム」の第一弾として、行政・財団・企業・地域の方々に、講義やフィールドワークでのご指導をいただき行う、座学とフィールドワークが一体となって学びを得る授業の形で開講。講義は、公益財団法人水島地域環境再生財団（以降みずしま財団）、倉敷市、水島商店街、黒崎漁協、コンビナート企業や企業 OB の方々のご協力を得た。担当教員は、本科目を平成 26 年度に第一弾として開講した当センターの三村聡副センター長・教授から、平成 27 年度は当センター環境領域担当の石丸香苗准教授が引継いでいる。

環境に対して大枠から学んだ昨年度から、今年度は水島という地域へフォーカスを絞り、外部協力者の方々の構成も、より水島の地域に密着した方々へと大幅に変更をした。まず、大気汚染公害を語る上で欠かせない患者会の方々、企業に於いて環境対策に尽力されたコンビナート企業 OB の方々、水島の地域の中心であり歴史を支えてきた水島商店街の方々、玉島湾の移り変わりの中で生業を続けられて来た漁業関係者の方々、現在の水島の協働体制のはじまりであった和解に係られた弁護士など、水島でこそ学べる社会と環境の在り方を深く学んでもらうための布陣に揃っていただくことが出来た。

・塩飽　敏史 氏（みずしま財団）
・藤原　園子 氏（みずしま財団）
・石丸　香苗（地域総合研究センター准教授）
・鷹野　郁子（地域総合研究センター研究員）

3　授業スケジュール

本科目の授業効果の目的として、多角的な視点から客観的・公平に物事を観察・検証し、自ら考えることで自分の意見を形成する能力を付ける（批判的思考力）ことを挙げる。

表 1　各回の授業の概要とポイントおよび講義担当者

回	日	内容	着目ポイントと授業の目的	講義担当者
1	4 /10（金）	ガイダンス 水島の地域開発と公害	• 水島授業の全体像 前半はこの授業の目的と流れの説明。後半は水島の公害問題の発端と背景や、地域開発との関連によって導入する。	石丸 塩飽氏
2	4 /17（金）	公害患者のQOL	• 公害が人の生活に及ぼした影響 公害患者の実情や、QOLについて知り、次のフィールドワークに向けて予備知識を得る。	藤原氏
3	4 /25（土）	フィールドワーク AM　鴨が辻展望台からの水島 PM　患者の方とのお話	• 公害を経て水島で生きるということ 水島を取り巻く空気・水・景観などの環境がどんなものか、俯瞰で感じた後に、そこで生きる患者の方々の暮らしや心に接する。	藤原氏、塩飽氏、患者会の方々
4	5 /16（土）	フィールドワーク AM　企業の環境対策 PM　水島の町見学 　　企業人の取組１	• 企業による環境対策・現在の人々の暮らし 企業が現在どんな取組をして水島の環境保全に配慮しているか、企業人の公害に対する感情や努力について知る。水島の町の現在と暮らしを知る。	サノヤス・ヒシノ、福留氏、藤原氏、塩飽氏
5	5 /22（金）	倉敷市の環境行政	• 行政による環境対策 行政による、みずしまの歴史を踏まえた、住民の生活を良くするための取組を知る。	倉敷市環境政策課、塩飽氏
6	5 /30（土）	フィールドワーク AM　漁業から見た水島 PM　企業人の取組２	• 現在の人々の暮らし・企業による環境対策 水をキーワードとして、漁業を通した地域の現在や、過去の重油流出事故への企業の対策などを学ぶ。	黒崎漁協、古川氏、藤原氏、塩飽氏
7	6 / 5（金）	和解について	• 乗り越えた上に皆で何を作り上げていくか 今までの授業の経験を総和し、過去の過程を経て、和解へ至り、その後の主体間コミュニケーションが持続的な水島の創造のために必要ということを理解する。	石田氏、鷹野
8	6 /12（金）	主体間コミュニケーション オープンハウスに向けた準備	• 自主性を持ち考える 水島の問題はどんなところから来ていたと思うか。どうしていれば防げたのか。この授業で感じたことを自分の考えを通して表現する	藤原氏 石丸、鷹野
9	6 /26（金）	オープンハウス	成果発表	

本科目では学生らはまず、患者側の視点から水島の大気汚染公害を見る。公害患者の QOL の講義につづいてフィールドワークで大気汚染公害患者の方々と直接、話をすることで、学生らは患者の立場としての視点を得ることができる。次に企業側からの視点へ移り、コンビナート企業の環境対策や、企業 OB の方の環境対策の体験談を通して企業の視点を得た。続いて、行政の立場から環境と市民を守る倉敷市の対策を聞き、公害患者や企業以外のステークホルダーの立場を知った。更には水島商店街や黒崎漁協を訪れ、地域の人々の言葉に耳を傾け、水島の古今を知ることで患者でも企業でもない、第三の水

島の人々からの地域への眼差しや日々の生業の姿があることに気づく。それぞれの多様なステークホルダーの視点を得たのち、それらすべての人々が形成する主体間コミュニケーションについて学び、ロールプレイングでは自分とは異なった視点に立つと、どのように考えることが出来るのか、また異なった視点の人々によるどのようなコミュニケーションが良い社会の形成に必要なのかを考えた。

この一連の流れの中で、多様な視点の存在への気づきとその視点への想像力に思いを馳せられるための構成とした。表１は、各回の授業の概要とポイント、講義担当者を一覧にして学生に初回配布したものを示す。

本科目では毎回班ごとにディスカッションや感想のシェアを行ったため、可動式の机を用いることが出来、オープンな雰囲気で学習が可能な図書館のラーニングコモンズで実施した。最終回のオープンハウスも同様にラーニングコモンズを用いて発表を行った。その他にも、履修学生は当センターの実践型社会連携教育 Web システムに登録し、フィールドワーク前の連絡事項や、次回授業に向けての準備などについて担当教員からメールで連絡を受ける仕組みを設けた。

４　これからの展望

水島では本授業で取り上げた多様なステークホルダー、企業・地域・NGO などの参加による、環境学習を通じた人材育成・まちづくりを考える協議会が設立され、当センター三村聡副センター長・教授が委員として加わっている。また、今年の夏に協議会から派生した環境学習推進ワーキンググループでは、当センター石丸香苗准教授と当センター鷹野郁子研究員が参加しており、今後も水島との繋がりを強めることで、本科目を通した学生教育に還元していきたいと考えている。さらに、本科目に関連した新しい科目を開設し、学生たちが水島の地域を訪れ、環境学習教材となるようなものを作り上げていくような授業の内容を検討している。現在、試行として、上記ワーキンググループを中心に、学生への環境学習教材の見本として映像資料の自主製作を試みている。

また、今年夏には国際第三セクター学会（ISTR）にてみずしま財団と共同で人材育成・まちづくりを考える協議会に関した学会発表を行った（付録２参照）。本科目の活動は、山陽新聞や情報誌「環境」などにも取り上げられており、本学の実践型社会連携教育の活動や効果を広げていきたいと考えている。今後も水島の地域と環境学習を通じた協力体制を強めるとともに、実践型社会連携教育の開発と周知に努めていきたい。

▲班ごとに分かれて患者さんに色々なことを拝聴

▲発表資料を作成する学生たち

■10-4-2　地域社会貢献型学習支援活動

【基本情報】

科目区分							学期				単位		
主題科目（現代の課題）							通年				6単位		
履修学生内訳													
学年	文	教	法	経	理	医	歯	薬	工	環	農	MP	合計
1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
2	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	2
3	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1
4	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
合計	1	0	2	1	0	1	0	0	0	0	0	0	5

【担当教員および支援体制】

●主担当教員	地域総合研究センター	佐藤　大介	助教
●協力教員	大学院法務研究科	西田　和弘	教授
	キャリア開発センター	中山　芳一	助教
●連携教員	地域総合研究センター	前田　芳男	准教授
●地域人	総社市社会福祉協議会	石原　寛大	自立相談支援員（非常勤講師）
	総社市社会福祉協議会	吉岡　亨祐	生活困窮支援センター長（非常勤講師）
	総社市社会福祉協議会	天野　　豊	主任（非常勤講師）
	総社市社会福祉協議会	中倉　将皓	社会福祉士（非常勤講師）

【授業概要】

本授業では、総社市および総社市社会福祉協議会が実施する学習等支援教室「ワンステップ」（毎週火／金曜日 19：00 ～ 20：30，総社市総合福祉センター）において、１年（５月～翌年２月）という長期にわたって、中学生を対象に学習支援や相談援助（進路の悩みや人間関係等）などの活動に取り組み、その中で地域社会に潜在化する家庭環境が持つ課題への支援または具体的な対策について考え、理解を深めていくものである。支援にあたっては、原則として学生の担当曜日を固定するが、支援生徒は固定しない形を取った。また、学習等支援の内容については、毎回「実践型社会連携教育授業科目 Web システム」を活用し、必要な連絡や学習等支援活動の記録を作成してもらった。なお、岡山県立大学保健福祉学部の学生 17 名も「ワンステップ」での学習等支援にボランティアとして積極的な支援をしてくれた。

また、実践的な活動をするにあたり、学生に対して、学習支援の心得（良き理解者となること、活気・夢・希望を与える、適度な距離感を持つ等）や中学生とのコミュニケーションのとり方（個に応じた支援、褒める、連絡先の交換禁止等）、守秘義務や事故・怪我発生時の対応について初回の授業（５月９日）で説明を行った。

【授業実施内容】

１　土曜日勉強会

平成 27 年５月 12 日～平成 28 年２月９日の間、火曜日および金曜日に学習等支援をワンステップにおいて実施した（ただし、祝日やお盆、年末年始を除く）。この学習等支援の内容を深化させるため、３回「土曜日勉強会」を以下のとおり実施した。

●第１回「支援内容の見直し、対策を考える」（６月 27 日）

学生は「地域社会が取り組む地域の子供に対する支援に関する新聞記事（2014 年４月以降、WEB 記

事不可)」を５件以上クリッピングし、その内容についてプレゼンテーションを行った。その中で、非行防止やフリースクール、ICT リテラシーや教育格差など様々な問題に対して目を向け、そこからワンステップにおける支援内容・方法の見直しについて協議を行った。その結果、以下の３つの提案を学生が行った。

①みんなで話し合ってルールを作る。

②学力向上の勉強と興味を広げる勉強にメリハリを付けて両立させる。

③振り返りノートを作る。

●第２回「ワンステップのルールを考える」（10 月 31 日）

第１回勉強会で提案のあった「みんなで話し合ってルールを作る」活動を行った。この勉強会には、ワンステップに参加している中学生や岡山県立大学生も参加した。勉強会ではまず、中学生の「将来の夢」を模造紙の中心に書いてもらい、その周りに、そのために何をしないといけないのか、さらにワンステップで今何ができるのかについて中学生と大学生が模造紙に付箋を貼りながら話し合いをした。それぞれの夢の実現のためにワンステップをよりよくするためのルールを参加者全員で話し合い、以下の６点をルールとした。

①月１回は学習以外の行事を行う。

②学校の授業で分からなかった所に印を付け、ワンステップで確認する。分からない問題をそのままにしない。

③学校で使っている教科書・ノート・問題集・資料集をワンステップに持ってくる。

④危険な遊びは禁止。

⑤ワンステップの時間（19：00 ～ 20：30）はゲーム等は禁止。金曜日のみゲームの持込ができ、ワンステップ前であればゲームをしても良い。

⑥国語・数学・英語を重点的に学習する。

●第３回「地域社会で子供が安心して暮らせる環境を考える」（１月 23 日）

学生は「地域」「子供」「教育」のキーワードに該当する本を１冊各自読むよう初回の授業で指示しており、勉強会ではその本についてブックレビューをしてもらった。ブックレビューでは、学校と塾と地域の役割、個を尊重し寄り添うことの重要性、外からの異質を取り入れることでの変化が生まれること、伝統的つながりの学力向上への良い効果などについて発表があった。学生が講読した書籍は以下のとおりである。

①志水宏吉 .（2014）.「つながり格差」が学力格差を生む . 亜紀書房 .

②岩佐礼子 .（2015）. 地域力の再発見〔内発的発展論からの教育再考〕. 藤原書店 .

③新井郁男 .（1990）. 学校と塾や地域との間―子どもはどこで学ぶか（シリーズ教育の間）. ぎょうせい .

④下野新聞子どもの希望取材班 .（2015）. 貧困の中の子ども：希望って何ですか . ポプラ社

２　中学生の岡山大学訪問（オープンキャンパスと同時開催）（８月７日）

中学生に大学進学に対してより一層具体的なイメージを持ってもらうため、岡山大学オープンキャンパスにあわせて、ワンステップに参加している中学生が岡山大学を訪問し、履修学生が構内を案内した。参加した中学生は、「地球科学の講義を聞いたが難しかった」、「キャンパスやグラウンドが大きかった。１つの町のように感じた」、「イメージと違って、大学が面白い場所だと感じた」、「留学の話しが聞けて

よかった。奨学金制度も充実していると感じた」、「図書館でのゲームが楽しかった」「学食が美味しかった」などの感想があった。また、この活動の意義について学生と意見交換をした。中学生とワンステップではできない会話ができたり、中学生の生活を垣間見れたりしたほか、大学生から留学の実体験を聞いたり、入試に対して勉強のイメージを中学生が持てた等意義深いと感じていたようである。

3　成果報告会（2月6日）

学生は参加した関係者や一般に対して「地域社会で子供が安心して暮らせる環境」について、小グループでのプレゼンテーションおよびディスカッションを行い、実践を通して学習したことと考察したことをさらに深める機会となった。

【成果と課題】

平成 26 年度後期より開講した本授業であるが、昨年度はワンステップでの学習支援を通じた社会貢献活動に主眼をおいてきたが、今年度は「教育」をキーワードに、ワンステップの教育的効果を一層高めるための工夫を学生が実践を通して考えていった。特に、学生はワンステップを居場所として学習空間として中学生にとって重要な場所となるためには、中学生やその保護者が夢を共有し、そのための空間を自分たちが考えていくことが重要だという示唆をした。この点はワンステップでのルール作りにも反映されており、また、学生が開発した「振り返りノート」でも保護者へのコメント欄を設けるなど、より教育効果の高い学習環境へと進化させることができたと感じている。

課題として、現在単位取得を目指す学生（岡山大学）とボランティアの学生（岡山県立大学）が混在している。大学コンソーシアム岡山の単位互換制度などを活用し単位取得が可能なように配慮していく必要があり、その場合は、教育のみならず福祉の視点を取り入れた授業展開が必要である。また、平成 28 年度からの 60 分授業・4 学期制への移行や実践知区分の授業時間割など、学生の履修環境も大きく変化することが予想されるため、学生派遣の体制についてもしっかりと検討・対応することが必要である。

■10-4-3　大学とまちづくりーNPO等との連携を通じてー

実施時期：平成27（2015）年度後期
領　　域：まちづくり
担当教員：荒木秀治（岡山大学地域総合研究センター特別准教授（実践型社会連携教育プログラム））

実践型社会連携教育授業の第一弾であるこの授業は、平成26年度後期に引き続き二度目の教養教育プログラムとして実施した。高度成長期の単線的な生き方ではなく、低成長ではあるかもしれないが、多様な価値観を受容することができつつある社会の現状を肯定的に捉え、自らの思考に基づきキャリアをまさにデザインすることのたのしさやよろこびが存在することを大学・非営利組織とまちづくりの関係の中で認識することを目的とし、学外講師を招いたオムニバス形式の授業に実践活動（フィールドワーク）前半・後半を含む、総合的な地域学習プログラムとして受講生21名に提供した。

担当教員は、高等教育行政、非営利組織マーケティング、学習科学の研究とまちづくりの実践に携わってきた経験と専門性を活かし、荒木秀治特別准教授（実践型社会連携教育プログラム）が務めた。非常勤講師は、担当教員がこれまでNPO等の民間非営利組織活動への参画の中で構築してきた岡山県内で活発に活動しているNPO等とのネットワークを活用し、学生との年齢が近い20代、30代中心のメンバー

中心に活動している民間非営利組織等から代表等（NPO法人タプララサ、NPO法人岡山NPOセンター、NPO法人だっぴ、公益財団法人みんなでつくる財団おかやま）を招き、講義を委嘱した。また、地域人としいて岡山市ESD担当者等の多彩な関係者に講義で意見を出してもらい、実践活動では、前半には有機生活マーケットいち、満月BAR、みんなでつくる財団おかやま、後半にはおかやまバトン、NPO法人だっぴ、岡山NPOセンターの各取組に参加する中で様々なまちづくり・市民活動を経験することができた。

＜地域から学ぶことの意義：多様な社会課題を実感し、生活することと学ぶことの関係を統合させ学習する意義を学ぶ＞

グローバル社会への移行、人口減少社会の到来、ライフスタイルの多様化、新興国の台頭、雇用制度の変化等、日本を取り巻く環境の変化が顕在化し若者が夢や将来像を描きにくい状況にある。その様な中、高度成長期の単線的な生き方ではなく、低成長ではあるかもしれないが、多様な価値観を受容することができつつある社会の現状を肯定的に捉え、自らの思考に基づきキャリアデザインしていくこと、自らの成長に合わせ社会移動が可能なあり方への模索が重要になってきている。

そのため、岡山の公共分野におけるNPO等民間非営利組織の活動を通じて、多様な社会課題を実感し、なかでもまちづくりは自分事であることを学び、そこに携わる魅力的な人材の活動やキャリアを通して、自分自身を構成する要素であるまちをはじめとする環境への関心と生涯に渡る主体的学びを統合することの重要性に気付き、学生達の多くが持つ創造的潜在能力を活かしていくことを目指した。

＜授業の流れ＞

全体を講義形式と実践活動で構成している。まず第１回で「大学とはどのような存在なのか」、「NPO等民間非営利組織とは」を認識した後、第２回から第５回では岡山で実際にまちづくり活動を行っているNPO関係者等からの「各団体がめざしているものを各々の団体の組織的特性（NPO、財団法人、任意団体）等も踏まえ、そのメリット・デメリット」、「連携教員が各団体に所属するようになったきっかけ」について講義・意見交換を行った。今年度は、昨年度から内容を改善し、プレ実践活動として講師と受講生が輪になって自分の考えをパネルに書いてそれぞれ発表する「ぷちだっぴ」を行い講師の成功した話、苦労した話、仕事に対する思いなどを聞きながら仕事に対する見方、自分たちの本音、人生の指針などを話し合うことで授業への導入を促した。また、第３回では「有機生活マーケットいち」への体験参加を実施し非営利組織や多様な生き方の存在に実際触れるなかで、実践活動（前半）に向けての心構えの形成を行った。

実践活動（前半（６、７回）・後半（11～13回）は単なるイベント活動とならないよう配慮し、前半は「学生の協調性の育成（学生同士や社会とのネットワークの構築）」、「社会課題を認識し責任感を感じる」、「コミュニケーション力を伸長し自己肯定感を強める」、後半は『まなぶ・はたらく．くらす』という各観点を意識しながら「コミュニティへの関わりの実感」、「自己表現を通じた批判的思考力の醸成」、「学習動機を高めることによる学習態度の改善」につなげる設計とした。

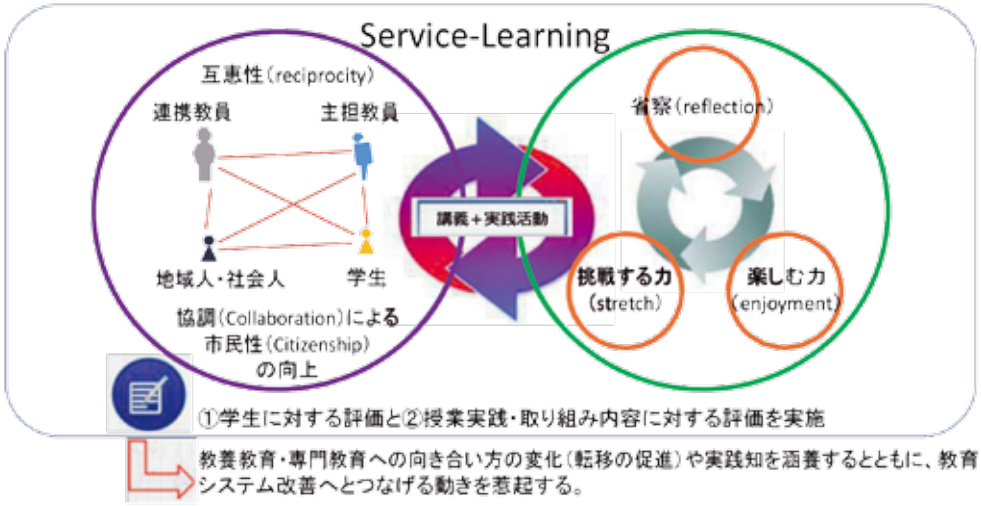
各項目は「全米青年リーダーシップ評議会（NYLC）」の掲げるサービスラーニングの教育目標にも近似している。

第９回は大学生が先行して行っている様々なまちづくり活動を知り、第10回では講義と実践活動（前半）の学びについて、あらためて「身の回りの社会課題」を踏まえながらNPOの役割について考えた。

少し自分の生活を見直してみれば、自分の身の回りにも、たくさんの課題が見つかることを通じ「NPO法人は課題があるから活動がある。組織のために、活動があるのではない。活動のために、活動はあるのではない。」という言葉の意味を受講生は実感した。この様にこの講義で得た経験と知識をもとに振り返り、中間の総括を行った。

第14回と第15回は、これまでの授業で学んできた内容を内在化させるための振り返りとしてワークショップを実施し、これまで経験・考察したことをもとに、これまで関わったや知った非営利組織の紹介を受講生が模造紙にまとめ、発表、オープンハウスを実施し、カリキュラム全般を受講生や講師陣、非営利組織関係者間で、共有化し課題認識を行った。

岡山大学における実践型社会連携教育プログラムの考え方をベースとした「大学とまちづくり」の構造モデル



図：岡山大学における実践型社会連携教育プログラムの考え方をベースとした「大学とまちづくり」の構造モデル

＜授業の成果＞

以下から本カリキュラムが目指した方向性を概ね達成できたものと想定される。受講生は、講義と前半・後半の実践活動を通じて社会・地域が抱える様々な矛盾を認識し、その上で「まなぶ」、「はたらく」、「くらす」というテーマを通じて「大学がまちづくりを通じて、地域にいかに関わることができるか」ということについて主体的に考え、振り返ることを通じて自分なりに新しい価値観を内在化していった。昨年度に比して、導入をより自然に入ることができるように丁寧に設計したことが奏功し、受講する専門科目への向き合い方への変化を表明している学生や関係した非営利組織への参画を表明する学生、社会へ出てからの自分の姿から逆算した学び方を相談する学生が多数出ている。

実際、学生のレポートやふり返りシートには「この授業で大学生と非営利組織や地域との関わりを学んでいく中で、自分が今まで思っていた、できることを何かしたいというもやっとした思いがだんだん具体的になっていきました。」、「自分がやりたいと思ったことは留めずにやろうと言える人になります。この講義を通して様々なNPO団体と関わることができたり、自分の理想のまちづくりについて新しい考え方ができたことに感謝したいと思います。」、「この講義を通して、これから自分を成長させる沢山のものを得ることができました。色々な委員会や団体に自ら飛び込み、自分の役割を増やしています」、「これまでの授業でいろんなところで、いろんな活動を、社会的に見れば些細なことかもしれないが、

それに問題意識を持って活動している団体を学び、知ることができた。この授業で学んだことを今回限りにすることなく、NPOやボランティアに参加していこうと考えている」等の声が記されている。

また、外部講師からは「学生のレポートのするどい指摘には今後の活動に参考に出来るところがあり感謝している」、「自分の活動や興味について個別に相談に来てくれた」と感想を述べるように参加者相互が学び合う互恵の関係を構築することができたと思われる。

＜受講状況＞

学生の募集に当たっては、実践活動実施の関係上、定員を25人に限定したところ100人超の受講希望者があったが、調整の結果最終的には21人が履修した。県内外の出身者、幅広い学部からの履修登録であったが、岡山県への理解やまちづくり経験がない学生が大半であったが、数人はボランティアやまちづくり経験も有している状況であった。出席状況は非常に良好で、なかでも実践活動は前半後半とも全員参加であった。

履修者数：21人（男子18人、女子３人）
学部内訳：文学部２人、教育学部１人、法学部６人、経済学部６人、理学部２人、医学部保健学科１人、工学部４人、環境理工学部１人

＜受購生の評価方法＞

本プログラムのような授業科目はカリキュラムの設計・実施に相当の労力が求められる。一方で評価については、一般的には客観的な評価基準を設定することが難しいとされ、教員側は悩みながらも漠然とした評価基準のもとに成績を付けている。学生側もどの様に授業に臨めばよいか自分の中に目標を描ききれずにただ受講している傾向が見受けられる。したがって学習成果や成績評価を可能な限り定量化する手法の開発も重要な課題である。本授業科目においては毎回、ふり返りシートを用い授業での学びを省察してもらい、提出を求めた。また、この授業の目的である「社会における大学の役割を理解し、大学のまちづくりへの関わり方について考察する」、「現代社会における大学の役割、大学が地域にいかに関わることができるか」ということについてこれまでの講義、なかでも実践活動(後半）を踏まえ、自分自身でテーマ（「まなぶ」、「はたらく」、「くらす」から１つ）を選択し、2500字以上4000字以内のレポートを課した。レポート及びふり返りシートの評価にあたっては検討の結果、カナダで実践されるICEモデルを導入することとし、教える基礎知識（Ideas）の間のつながり（Connections）を適切な質問と指導を通じて理解させ、さらに自らの体験に結びつけた知の応用（Extensions）へ発展させる、主体的な学びを質的に評価するためICEルーブリックを「大学」「NPO」「実践活動」「社会課題」「実践型社会連携教育プログラム」の観点で作成し「Ideas」「Connections」「Extensions」の各段階に達しているかで評価を行った。その上で個々の学生の成績は、受講態度を含む出席状況、提出物に加え実践活動等の行動点を総合的に判断し採点した。

＜関係者・団体＞

担当教員：荒木秀治（岡山大学地域総合研究センター特別准教授（実践型社会連携教育プログラム）、国家公務員）

連携教員・非常勤講師：

河上直美（NPO法人タブララサ理事長、株式会社いち代表取締役社長、@ｎｕｎ代表）

石原達也（NPO法人岡山NPOセンター副代表理事、NPO法人みんなの集落研究所代表執行役、公益財団法人みんなでつくる財団おかやま理事、NPO法人遠足計画代表）

武田悠佑（満月BAR代表、ＮＰＯ法人タブララサ、岡山大学病院）

柏原拓史（NPO法人だつぴ代表、公益財団法人岡山県環境保全事業団）

石田篤史（公益財団法人みんなでつくる財団おかやま代表理事、SPOxT代表）

実施支援：山田一隆（岡山大学地域総合研究センター准教授）

協力者・団体等：

高橋真一（有機生活マーケットいち）

渡辺　泉（岡山NPOセンター主任アドバイザー）

北内はるか（岡山NPOセンター主任アドバイザー）

河原彩花（NPO法人だっぴ）

森田悠太郎（おかやまバトン、岡山大学環境理工学部３回生）

畑野美香（おかやまバトン、岡山大学教育学部３回生）

山本悠理（おかやまバトン、岡山大学教育学部２回生）

景山菜摘（MACHIFES、ノートルダム清心女子大学４回生）

山地涼子（MACHIFES、ノートルダム清心女子大学４回生）

長宗武司（おかやま百年構想、岡山大学経済学部４回生）

▲実践活動

▲オープンハウス

■10-4-4　多職種連携と地域包括ケア

Ⅰ　科目概要

(1) **開講時期**　後期その他・集中

事前講義、一泊二日の合宿（土日）、市民講座（土か日）

(2) **領域**　医療

(3) **履修対象**　学部１・２年生／定員 25 名

(4) **教員**

岡山大学医学部　教授　浜田淳（主担）

岡山大学歯学部　助教　水谷慎介

岡山大学地域総合研究センター　助教　山川路代（コーディネーター）

岡山大学地域総合研究センター　准教授　石丸香苗（合宿のみ）

(5) **非常勤講師**

川崎医療福祉大学医療福祉学部　准教授　竹中麻由美（来年度から任用予定）

笠岡市健康医療課　主任　保健師　西江雅子（来年度から任用予定）

(6) **地域人**

NPO 法人かさおか島づくり海社

(7) **実習先**

笠岡市、笠岡諸島

Ⅱ　授業の概要

(1) **授業の目的**

岡山県内の市町村に、多種多様な専門分野からなる岡山県下５大学・専門学校の学生と教職員が一泊二日で合宿し、地域の方々とともに、地域の医療・介護の問題、まちづくり（地域包括ケア）の問題について議論する。効率的に議論を進めるための手法として、ワークショップを用い、市全体及び地域の問題に対する解決策を見つける。一連の授業のまとめとして、市民公開講座を行い、知識をもとに現場経験を振り返る場を設ける。

(2) **学習目標**

本授業では、市全体及び地域の問題、まちづくりの問題を理解し、話し合い、解決方策を見つけることを目指す。学生は、地域に赴き、現場の問題に直接触れることによって、通常の講義形式の授業では得られない実践的な問題解決能力を身につける。また、他学の学生や教職員、地域の方々との交流を通じて、自分以外の専門領域の人の考えを尊重しながら議論する力を身に付ける。

Ⅲ　授業実施内容

回	内　　容
1	事前講座
2～14	合宿（於：笠岡市北木島） ■1日目 2　笠岡市高齢者共同生活住居見学 3　北木島の概要説明、NPOの島づくり活動の紹介 （NPO法人かさおか島づくり海社・理事長　嶋本浩二 氏） 4　アイスブレーキング 5～7　実習（フィールドワーク） 8　まとめ（翌日の発表準備） 9　北木島をムービーで振り返り ■2日目 10　島の高齢者事業の紹介「支えます！家族のように」 （NPO法人かさおか島づくり海社・副理事長　森本洋子 氏） 11　「島しょ部の地域包括ケアとは」 （笠岡市健康医療課保健師　西江雅子 氏） 12　グループ発表 13～14　ワークショップ
15	市民講座

1　講義

【日　時】平成27年10月22日木曜日5時限（16：15～）

【場　所】岡山大学地域総合研究センター（AGORA）学生活動共用スペース

【内　容】介護保険制度と地域包括ケア（担当：浜田）

フィールドワークの技法、実習オリエンテーション（担当：山川）

2　合宿

【テーマ】「島の高齢者の暮らしを考える」

【目　的】将来、医療系を目指す学生に専門的な視点だけではなく、島の歴史や産業背景、「いつまでもこの島で元気に暮らし続けるために」と各島のつながりや島づくりなどを通じて広い視野・姿勢を身に付ける。

【期　間】平成27年10月24日土曜日～10月25日日曜日

【場　所】笠岡市北木島

【宿泊所】笠岡市北木島宿泊研修所「石切りの杜」

【参加者】

岡山大学からの参加者　31名

（内訳）　学生　27名（男子14、女子13）、教員　4名

（学生の学部内訳）

医学部8、歯学部1、薬学部1、農学部2、経済学部5、法学部2名、環境理工学部1、社文研2、医歯薬（大学院）3、プレマスター留学生2

＊うち授業履修者は8名：（内訳）医学部6、経済学部1、環境理工学部1

川崎医療福祉大学学生　6名（男子3、女子3）、教員　1名

社会人　3名（男性2、女性1）

NPO法人かさおか島づくり海社の関係者　8名

笠岡市役所健康医療課　1名

新見公立大学（25日のみ。当該大学の活動として参加）学生10名、教員1名

【スケジュール】

10 月 24 日土曜日

●笠岡市高齢者共同生活住居見学

●北木島の概要説明、NPO の島づくり活動の紹介

NPO 法人かさおか島づくり海社・理事長　嶋本浩二　氏

●アイスブレーキング：伝言ゲーム　水谷

●実習（フィールドワーク）

島の高齢者の暮らしについて考えるために、５グループに分かれて、各実習先を訪問し、観察とインタビューを通じて、情報収集を行った。必要に応じて、写真やビデオで記録を残すように促した。合宿二日目に、グループごとに、収集した情報をパワーポイントにまとめて発表した。

１グループ：デイほほえみ見学・聞き取り（５名）

２グループ：グランドゴルフ聞き取り、地区踏査（９名）

３グループ：デイすみれ見学・聞き取り（５名）

４グループ：灰干し、きずな便聞き取り（９名）

５グループ：今岡の丁場見学、北木西公民館にて聞き取り（９名）

●まとめ（翌日の発表準備）

●北木島ムービー鑑賞

10 月 25 日日曜日

新見公立大学看護学部学生 10 名と合流

●島の高齢者事業の紹介「支えます！家族のように」

NPO 法人かさおか島づくり海社･副理事長、海社デイサービスだんだんの家（白石）･うららの家（真鍋）管理者　森本洋子 氏

●「島しょ部の地域包括ケアとは」

笠岡市健康医療課保健師　西江雅子 氏

●グループ発表

●ワークショップ

３　市民講座

【日　時】平成 27 年 11 月 22 日日曜日 13：00 ～ 16：00

【場　所】笠岡市中央公民館

【参加者】

岡山大学からの参加者　10 名

（内訳）学生７名（男子５、女子２）、教員３名

川崎医療福祉大学教員　１名

笠岡市の愛育委員・民生委員の方々　45 名

笠岡市役所健康医療課　３名

笠岡市役所介護長寿課　１名

【プログラム】

(1) 簡単な趣旨説明（浜田）

(2) 話題提供

竹中「住民が主人公となる地域包括ケアを実現するために」

水谷「在宅歯科診療、口腔ケアへの理解のために」

浜田「笠岡の地域包括ケアを考える」

(3) ワークショップ「笠岡市の各地域の課題」

参加者を５グループに分け（各班に学生と民生委員、愛育委員が入る）、各グループでは、民生委員や愛育委員の方々を中心に地域がかかえる、地域包括ケアにまつわる問題と解決策を話し合った。学生は、これまでの講義、ワークショップで経験したことを踏まえ、地域の方々に質問をし、問題を掘り下げて、配布するパソコンに話し合いの結果をまとめ、発表の準備をした。発表はパソコン（パワーポイントなど）を用いてスライドの枚数に上限は設けず、発表時間を有効に使うようにした。

(4) 総括

笠岡市役所長寿支援課　鈴木氏

笠岡市役所健康医療課　西江氏

岡山大学　医学部医学科　浜田　淳　教授

▲ワークショップの様子

▲地域の住民から情報を収集する学生

Ⅳ　評価

合宿への出席と市民講座の出席、レポート（感想文）の提出によって評価した。

レポートとして、学生は合宿及び市民講座後の「地域包括ケア」に対する所感を A4 用紙 1 枚程度にまとめ、提出した。

評価のポイントとしては、講義、合宿及び市民講座のワークショップに主体的に参加したかどうか、合宿及びワークショップに関するレポートの内容（この授業を経験して自分がどのように感じ、考え、変化したかなど）を総合的に勘案した。

Ⅴ　備考

・履修者が少なかったため（8 名）、当センターのメーリングリストを使って、学生対象に合宿参加者を募集したところ、21 名の参加希望者があった。

・シラバスに土日の合宿と市民講座の参加を授業履修の必須要件としていたが、履修者が少なかったため、市民講座に参加できない学生にも履修を許可し、代わりに合宿のインタビュー内容のレポート提出を課した。

■10-4-5　創造的討論技術を学ぶ

平成 27 年度前期一般教養科目「創造的討論技術を学ぶ」では、金銭管理教育を考えることを全体を通した課題とし、15 コマの授業を大きく３つのステージに分けた。

【第１ステージ】 １～８回	講義形式で学生がグループ討論の技術を体験しながら習得
【第２ステージ】 ９～13回	習得した討論手法を用いた金銭管理教育のためのワークショップを企画
【第３ステージ】 14～15回	企画したワークショップを学外の専門家等を対象に実施

その過程で適宜、教育効果を評価するための質問紙調査や学生のレポート作成が行われた。成果報告会に該当する第３ステージでは、消費者教育の研究者、岡山県消費生活センター、岡山市役所、消費者教育 NPO などの職員にも参加してもらい、受講生と活発な意見交換を行った。グループ討論は、学生が相互に刺激し合い、価値観や生活体験の違いを感じ、発想を広げてくことに有効であった。消費者教育について学生が教える立場に立って学習を企画したことで、意思決定の手順を主体的に学ぶことができ、学習効果が高まることも認められた。この成果は、「消費者教育の手法としての討論技術の開発」と題した論文にまとめ消費者教育学会に投稿した。なお、特別ゲストとして、米国オレゴン州ヨシダソースグループの吉田潤喜会長を招聘し、本授業の受講者ほかの学生に特別レクチャーをしていただいた。

▲成果報告会

▲ヨシダソース会長特別講義

■10-4-6　フィールド調査の基礎を学ぶ

平成 27 年度後期の一般教養科目「フィールド調査の基礎を学ぶ」の一環で、西川緑道公園の人気マルシェ「有機生活マーケットいち」では、出店者や買い物客に聞き取りを行った。この科目は、学生を現場に出し、地域の課題解決に関わらせることで社会に関心を持たせ、同時に実践的なスキルと学生同士で学び合うセンスを修得することを狙っている。

例えば、マルシェ開催の情報をどのようにして入手したかについて聞いたところ、①常連客は、マルシェの関係者の口コミなどが多かったが、②今日初めて来たというような新規の客は、「マルシェに来たことがある友人のツイッターで知った」など、市民同士の情報交換により入手している人が多いことが分かった。主催者は、③最近は常連客ばかりが多く、イベント自体がマンネリ化してきた、④ＳＮＳを使った主催者側からの情報発信を強化しなければならない、と考えていたが、学生の調査結果を聞いて、実態が見えていなかった

と気づいた。

調査結果は、マルシェの実行委員会や岡山市役所に対して学生が報告し、関係者と意見交換した。この意見交換で厳しい質問を浴びせられることで、学生は大きく力を伸ばし、次の学びの視座を得ることができた。それゆえ、大学は、学生の希望に対応する科目を体系的に準備する努力をしなければならない。さらに、学生のレポート類をデータベース化することが望まれる。そのデータが蓄積されれば、後輩たちが、これを踏み台にしてさらに深い学びができるはずである。卒業した後も、岡山で学んだ記憶を刻んだ礎石としてこのデータベースにアクセスできればうれしいだろう。このような総合的なシステムが構築されれば、岡山大学独自の教育と言えるだろう。

■10-4-7　レポートの書き方講座～フィールド調査編～

平成 27 年度後期の一般教養科目（学生発案型授業）「レポートの書き方～フィールド調査編～」では、岡山大学津島キャンパスの駐輪問題をテーマに、学生たちが放置自転車やルール違反、マナー違反の自転車を数えたり、既設駐輪場・スペースの収容能力を調べたりして、その実態と改善策をレポートにし、大学に提出した。

▲学生の調査の様子

白線で囲った駐輪スペースの幅 10 m当たりの駐輪台数が 20 台を超えるとアタマだけ突っ込みや、ケツ、半ケツはみ出し駐輪が発生するなど、現場に出ると次々に発見があり、その面白さを知ると、学生は「あれも調べたい、これも確かめたい」と能動的に考え行動するようになる。教室内の座学では、このような学びを演出することは難しい。

実際に調査した結果に基づいて作成したレポートは、何度も添削を重ね、修正させることでレポートの書き方を修得していった。この経験は、後の専門での研究や論文作成に役立つと期待される。ここで作成したレポートを英語に直す作業を正規の英語の授業と連動させれば、グローバル実践人の育成の効果もあるだろう。

■10-4-8　グローバル人材育成に寄与する

【基本情報】

科目区分							学期		曜日・時限			単位	
主題科目（現代の課題）							通年		木曜・２時限			４単位	
履修学生内訳													
学年	文	教	法	経	理	医	歯	薬	工	環	農	MP	合計
1	0	0	1	1	0	0	0	0	2	0	0	0	4
2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
合計	0	0	1	1	0	0	0	0	2	0	0	0	4

【担当教員および支援体制】

●主担当教員	大学院教育学研究科	小山　尚史 准教授
●協力教員	大学院教育学研究科	Gardner Scott 准教授
	高等教育開発推進機構	石井　一郎 UAA
●連携教員	地域総合研究センター	佐藤　大介 助教

●地域人　岡山県県民生活部国際課　信江　幸雄 課長（非常勤講師）
岡山県県民生活部国際課　片岡　始美 副参事
岡山県県民生活部国際課　西山　竜一 副参事

【授業概要】

岡山県が「新おかやま国際化プラン」に掲げている「多彩な主体による国際感覚豊かな人づくり」の一環として実施する中学生を対象としたプログラム「English Camp」に学生ボランティアとして企画立案から参加することを通して、現代の国際社会と地域への貢献の意義を再考察し実践する。自らのグローバル人材についての意識を高めると共に、その育成についても多様な考え方・とらえ方により実践を行う。こうした活動を通して、国際人としての子供を育成するマインドを醸成し、実践知を養うことを目指した。

【授業実施内容】

本授業では、学生にグローバル人材育成について自ら考え自ら実践してもらうため、テーマに対して各自１冊ずつ本を講読し、その内容についてクラス内で共有すると共に、English Camp でのプログラム開発に活用してもらった。

日　付	内　　容
４月９日	授業概要説明・English Camp説明
４月30日	グローバル人材育成を考える⑴「グローバル人材とはどのような人材なのか？」 【学生が講読した本】 坪谷ニュウエル郁子.（2014）. 世界で生きるチカラ - 国際バカロレアが子どもたちを強くする. ダイヤモンド社. エデュケーショナルネットワークグローバル教育推進室.（2014）. グローバルな子どもの育て方. 実業之日本社. マンフレッド･B･スティーガー著, 櫻井公人, 櫻井純理, 高嶋正晴 訳.（2010）. 新版 グローバリゼーション. 岩波書店.
５月14日	学校教育における英語教育とグローバル人材育成
５月28日	グローバル人材育成を考える⑵「グローバル人材に求められる力・能力とは？」 【学生が講読した本】 那珂通雅.（2013）. 世界で勝つグローバル人材の条件. 幻冬舎. 江川雅子.（2014）. 世界が実践している「いま」必要な思考法「６つの壁」を越える力. KADOKAWA/中経出版. ロバート・ビスワス＝ディーナー 著, 児島修 訳.（2013）.「勇気」の科学 ～一歩踏み出すための集中講義～. 大和書房. 坪谷ニュウエル郁子.（2014）. 世界で生きるチカラ - 国際バカロレアが子どもたちを強くする. ダイヤモンド社. 中嶋嶺雄.（2011）. 世界に通用する子供の育て方. フォレスト出版.
６月11日	異文化交流（理解）・国際交流（理解）
６月25日	グローバル人材育成を考える⑶「グローバル人材に必要な能力はどう伸ばす？」 【学生が講読した本】 飯野厚 著, 岡秀夫 編.（2011）. グローバル時代の英語教育―新しい英語科教育法. 成美堂. 青木順子.（2001）. 異文化コミュニケーション教育―他者とのコミュニケーションを考える教育. 渓水社. サンドラ サヴィニョン著, 草野ハベル清子, 佐藤一嘉, 田中春美 訳.（2009）. コミュニケーション能力―理論と実践. 法政大学出版局.
７月９日	岡山県の国際化への取組 １．国際化とは ２．岡山県が国際化に取り組む意義 ３．岡山県の国際化戦略 ４．皆さんへのメッセージ
７月23日	これまでのEnglish Campの取り組み、今年度のEnglish Campプランの紹介
８月10日	JETオリエンテーションへ参加（岡山県庁）

日　付	内　　容
８月28日	キャンププログラムを考える (1) 学習指導案を参考にする
９月８日	キャンププログラムを考える (2)
９月18日	キャンププログラムシミュレーション
９月26日 ９月27日	１泊２日 English Camp 2015（玉野スポーツセンター） 【学生が開発したプログラム（詳細は表下）】 みつけよう！伝えよう！仲間！―考え方は１つじゃない― ●Activity 1: Animal Planet ●Activity 2: Let's Find Friends!
10月１日	English Campのふりかえり、中学生のアンケート分析
10月８日	岡山県の国際化プランを考える (1) 国際化プランについて理解を深める
10月29日	岡山県の国際化プランを考える (2)
11月19日	岡山県の国際化プランを考える (3)
11月28日	成果報告会（岡山国際交流センター５階会議室 (3)）

【学生が開発したプログラム】

プログラムの開発では、学生は授業や読書を通じて、中学生を対象としたグローバル人材育成のための活動を２つ考えた。

●目標

(1)　グローバル人材育成としての目標

①英語を使うだけではなく、言葉の壁を超えて、積極的に自分のことを伝えたり、相手のことを知ろうとすること。

②文化の違いや価値観の多様性に気付くこと。

③目標達成に向けて、最後まで諦めずに成し遂げようと頑張りぬくこと。

④英語で表現できなくても、笑顔でジェスチャーをすることで相手に理解してもらうことが可能だと知ること。

(2)　活動目標

①積極的に人と関わり、輪の中に入っていく（積極的態度）。

②自分の思い、考えをジェスチャーや絵など様々な方法で伝えようと努力する（発信力）。

③表情、相づちで相手の話を聞こうとする姿勢を見せる（傾聴力）。

● Activity (1) アニマルプラネット "Animal Planet"

・お互いに持っているカードについてあらゆる観点から共通点を探し、できるだけ多くの人を集めてグループを作る。
　e.g. 四足歩行、哺乳類、肉食、茶色、毛がある、角がある、etc.

・カードの動物名は伝えてはいけない。当てられるのは OK。

・言葉は英語のみ、わからない場合はジェスチャーで表現し伝える。

・できるだけ大きなグループに参加することを目指す。ただし、どこのグループにも入っていない人を作らない。競うものではなく全員で協力して取り組む。

● Activity (2) 仲間探しゲーム "Let's Find Friends"

・互いに質問することで相手と自分の共通点を探し、出来るだけ多くの人を集めてグループを作る。
　e.g.「～持ってる？」「～好き？」「～（する）できる？」「～したことある？」

・コミュニケーションの方法は英語のみとする。（ジェスチャーは有り）

・自分のことを伝えなければならない、相手のことを知ろうとしなければならない状況に身を置くことで、積極性や相手のことを知ろうとする力を高める。
・外見で判断できず、聞かないとわからないことで尋ねること。国籍に関する質問は NG。
・素直に答えること。
・最初に組んだペアとは活動中常に一緒にいること。

【成果と課題】

本授業は最初の授業で履修者が極端に少なく、追加の募集を行うこととなった。通年型の科目であるため学生の目には触れにくかったことが原因のようである。最終的には４名の学生が履修した。授業開始当初、学生にとってのグローバル人材とは「英語が話せる」ということへの意識が強かったが、この授業を通して、コミュニケーション力や異文化理解、あきらめない気持ちなど、様々な力がグローバル人材に必要であることを学んだ。また、English Camp でのプログラムを考えるのも、最初はイメージが全く沸いていないようだったが、授業内外での議論を重ねていく中で、２つの活動を開発し、細部に渡るところまでその意図や目的を考えながら企画を行った。また、English Camp では、外国人も参加しているため英語で活動を進めていく必要があり、活動説明文や進行など英訳作業にも真剣に取り組んだ。中学生には難しい英語では日本語を使う、また目線に気をつけるなど、活動だけではなく進行役としての工夫も随所で見られた。中学生を対象に行ったアンケートから「グローバル人材に必要な力」に対する意識の変容も見られ、学生の取組みは一定の成果があった。さらに、岡山県の国際化プランに対しても、子どもを対象にどのようなプランを展開すべきかについて成果報告会で県職員の前で発表するなど、この授業を通して得られた知見を生かすこともできた。

今後の課題として、成果報告会のアンケートで指摘があった「英語を媒介しない国際交流の方法」についても今後授業の視点として取り入れていく必要がある。また、より一層連携を強化しながら、子どもへのグローバル人材育成に貢献していきたい。

■10-4-9　現代ブラジルの社会と環境

1　本科目の目的

ブラジルは日本の 22.5 倍におよぶ国土を誇り、その広大な土地に相応しい多様で豊かな自然と天然資源を持つ国である。1500 年にポルトガルにより先住民が住んでいたブラジルが発見され、アフリカから奴隷を輸入し、近代までポルトガルのほか、イタリア、スペイン、ドイツ、ロシア、オーストリア、シリア、ポーランドそして日本など、様々な国から移民を受け入れ、彼らが混じり合うことで現代のブラジルという国が作られてきた。そのため、自然も人種も、また社会構造も高い多様性を誇る。

本科目では、教養科目であることから、知識獲得に主眼を置かず、現代ブラジルを構成する多様性や、それを鏡として見る日本の姿、また日本在住の外国人という私たちの社会の中の多様性を見つめるものとする。ブラジルというテーマを通して自らの社会や環境、文化との「違い」を認識するとともに、その違いがどのような歴史的・社会的背景から生まれるのか、その違いを私たちがどう捉え、考えるべきなのかについて意見形成することを目指す。

近年、大学教育の中でグローバル人材養成の重要性が叫ばれているが、グローバル人材たる資格の一つは、自分と他者との差異の背景を想像し、その差異が生まれる理由を理解し、差異を認める力ではないだろうか。異なる宗教間の憎しみや、特定の人種や民族に対する偏見など、社会の歪みを生み出すものの根幹には、自分と違うものへの不敬や排除の気持ちがあるように感じる。この授業では、多様なブラジルの姿を通して、色々な「差異」について考えてもらうことを目的とした。

2　担当・協力者

本科目は、岡山大学の中でブラジルとかかわりの深い、当センター石丸香苗准教授と、文学部言語科学専修コース中東靖恵准教授の二人の教員で開発を行った。石丸准教授はブラジルアマゾンで貧困層の森林利用と農業生産の研究を行ってきた。中東准教授は南米日系移民社会における日本語の変容と日本語教育を研究し、ブラジルの日系社会でも長らく調査をされている。担当はそれぞれ、石丸准教授が講義６回とフィールドワーク１回、中東准教授が講義２回とフィールドワーク１回を担当した。

フィールドワークは、一回目は中東准教授がコーディネーターを務められる総社市の「ちいきでつながるにほんごきょうしつ」に、二回目は倉敷市のブラジル料理店サボロザ（店主・水上マーレイさん）に受け入れていただいた。

3　授業スケジュール

授業は８回の講義、２回のフィールドワークと１回の発表準備で構成し、各回の授業は、担当する教員によって異なる構成とした。

石丸准教授担当分の講義は、大きく４部に分けて行われた。まず、その日の授業に関連した２- ３問からなる小テストを行い、学生にその問題を自分で考えてもらう。続いて授業の中でその問題に関する話題を取り上げ、自分の解いた答えとどのように違うのかを知る。その後、簡単なポルトガル語の会話を 10 分練習し、最後に５分間でその日の授業の感想や質問を提出するものとした。フィールドワークは昼食をはさみ半日の行程で行った。中東准教授の講義は、通常と同じく 90 分の講義で構成され、２回分の講義とフィールドワークに対してレポート提出を課した。フィールドワークは、朝から始まり昼過ぎまでの半日の行程で行った。

表1　授業のスケジュール

回	日にち	内容	担当
1	10/1	ガイダンスとブラジルの歴史概論	石丸・中東
2	10/8	多様な人種と地方色	石丸
3	10/15	ブラジル社会の格差	石丸
4	10/22	ブラジルに渡った日本人たち	中東
5/6/7	11/1	フィールドワーク　（総社市日本語教室）	中東・石丸
8	11/5	日本の中の異文化社会	中東
9	11/12	ブラジルの教育と流儀	石丸
10	11/19	ブラジルの様々な開発	石丸
11	12/3	アマゾンの自然と人と農業	石丸
12	12/9	次回研究発表に向けた資料収集・作成	石丸・中東
13/14/15	12/12	フィールドワークと研究発表（倉敷市ブラジル料理店）	石丸・中東

4　今後の展望

来年度も引き続き中東准教授と、より高い学びを提供できるような授業を構築し、この科目を開講することを考えている。今年度の学生の様子として、授業中に下を見ている学生が多かった。その理由として、評価に入れる授業後の振り返りシートを、授業を受けながら書いている学生が多いことが判明した。この授業は知識を蓄積しその正解不正解を問うためのものではないため、授業中に正解にかかわる情報は提供されない。教員が求める正解に沿った答えを返そうとするのではなく、授業を聞いて、考えた後で自分の意見を形成してもらうために、来年度からは振り返りシートを事前に配布するのではなく講義終了時に配布し、時間の余裕をもってシート記入時間に充てるように変化するように計画をしている。また、来年度から60分授業が始まるため、2コマをあてると120分の中で、意見を発表してディスカッションの時間を設けることも考えている。

▲総社市にほんごきょうしつで外国人の方と会話をする学生

▲ブラジル料理の研究発表をする学生

■10-4-10　障害予防の科学

Ⅰ　科目概要

(1)　**開講時期・曜日・時限**　後期・木曜日・２時限

(2)　**領域**　医療

(3)　**履修対象**　学部１・２年生／定員 20 名

(4)　**教員**

岡山大学地域総合研究センター　助教　山川路代

岡山大学薬学部　教授　狩野光伸

岡山大学大学院環境生命科学研究科　教授　津田敏秀

(5)　**非常勤講師**

社会福祉法人岡山市社会福祉協議会　主事　藤村息吹

(6)　**地域人**

東新田がんばろう会　代表　藤原きみこ

若葉会　代表　安永和子

鳴南地区会おしゃべりサロン　代表　蜂谷和美

(7)　**実習先**

東新田公会堂（南区箕島）

若宮会館（中区新京橋）

西辛川町内会鳴南集会所（北区西辛川）

Ⅱ　授業概要

(1)　**授業の目的**

講義・演習・地域訪問（フィールドワーク）を行い、高齢者の障害とそれに対する地域の取り組みを理解し、現場（地域）から介護予防の課題を抽出し、それに対する解決策を検討する。

(2)　**学習目標**

介護予防のために、高齢者や高齢者の住まう地域に何が必要か、それに対して社会全体としてどのような支援が必要か、自分は何ができるか、地域・個人の課題を抽出し、課題から解決策を導き出す力を身に付けることを目標とする。

Ⅲ　履修状況

履修者数　15 名（男子６名、女子９名）

（学部内訳）経済学部４名、環境理工学部４名、医学部３名、教育学部１名、理学部１名、薬学部１名、工学部１名

Ⅳ　授業実施内容

⑴　スケジュール

回	内　　容
1	ガイダンス（山川）
2	講義：科学―仮説の立て方（環境・津田）
3	講義：論理学―効果的な議論の仕方（薬学・狩野）
4	演習：地域と医療・介護の課題について議論する（薬学・狩野）
5	講義：障害を理解する
6	講義：調査法1（データの集め方）
7	講義：高齢者サロン事業に関する話題提供と質疑（岡山市社会福祉協議会・藤村）
8／9	実習：高齢者サロンの見学とインタビュー（各サロンの担当者）
10	講義：調査法2（データのまとめ方）
11	演習：インタビューの実践練習
12	演習：高齢者サロンに対するニーズ調査計画の立案
13／14	実習：計画したニーズ調査の実施
15	演習：調査結果のまとめ
16	テスト：報告会（オープンハウス）

⑵　実習内容

実習１回目では、各サロンで行われている活動に参加した。そこでは施設や高齢者の特徴を知ることを目的に、高齢者と一緒に活動を体験した。実習２回目では、地域の課題や課題解決の方策を考えるために、サロンの代表者やサロンを利用する高齢者、サロンのある地域の町内会長にインタビューを行った。

実習は前半（１グループ）と後半（２グループ）に分けて行い、１回目、２回目ともに、各グループに教員あるいはティーチングアシスタント（TA）が引率した。

⑶　報告会（オープンハウス）

地域の実習先の方々（９名）を迎え、まず学生がグループごとに実習報告を行った。次に学生が提案した地域の課題とそれに対する解決策について、地域の方々と意見交換した後、地域の方々の意見をふまえて修正した結果を発表した。

Ⅴ　評価

実習への出席は必須とし、講義への出席を 70%、報告会での発表に対する評価を 10%、課題（地域サロンの課題とそれに対する解決策）のレポート（まとめ）を 20% とした。

レポートは、実習先の状況、参加者のニーズを知るために聞き取ったこと、それらに対する自分の考え、その地域の現時点あるいは将来的な課題、課題解決のために必要なこと、が明記されているかを評価のポイントとした。

▲インタビューする学生たち

■10-4-11　地域高齢者と介護

教養主題科目「地域高齢者と介護」

Ⅰ　科目概要

(1)　**開講時期・曜日・時限**　前期・木曜日・２時限

(2)　**領域**　医療

(3)　**履修対象**　学部１・２年生／定員 20 名

(4)　**教員**

岡山大学医学部　教授　浜田淳

岡山大学地域総合研究センター　助教　山川路代

(5)　**非常勤講師**

岡山市保健福祉局医療政策推進課　主任　守安正和

医療法人佐藤医院　リハビリテーション部　理学療法士　主任　平井忍

医療法人佐藤医院　介護福祉士、ケアマネージャー　圓山典洋

(6)　**地域人**

医療法人佐藤医院　医院長・医師　佐藤涼介

(7)　**実習先**

医療法人佐藤医院デイケア・デイサービスセンター

Ⅱ　授業の概要

(1)　**授業の目的**

本授業の目的は、行政職員や介護従事者との議論、介護現場の体験を通じて、高齢者介護分野に明るい人材（職業人・地域人）を育成することである。高齢者にとっては、学生の訪問や学生が企画した活動が、精神・心理的に良い刺激となることから、身体及び精神機能の活発化だけでなく、生活の質（QOL）の向上にもつながる。また、学生の新鮮な発想や疑問は、介護従事者の学習意欲や意識を向上させるとともに、より質の高いサービスの提供につながるものと期待される。

(2)　**学習目標**

本授業では、介護をテーマに取り上げる。地域の通所施設での介護実習を通じて、地域高齢者の介護問題を理解し、地域で出来るだけ長く自立した生活を送るために役立つサービスの具体的な企画を立案し、実践する。

Ⅲ　履修状況

履修者数　19 名（男子 10 名、女子９名）

（学部内訳）教育学部９名、理学部５名、医学部３名、工学部１名、農学部１名

Ⅳ　授業実施内容

⑴　授業スケジュール

回	内　　容
1	ガイダンス（山川）、講義：医療・介護とまちづくり（浜田）
2	講義：地域とかかわるとはどういうことか？（浜田）
3	講義：岡山市の医療・介護の現状把握（岡山市医療政策推進課・守安氏）
4	ワークショップ⑴：岡山市の問題をどう解決するか？（浜田）
5	講義：高齢者通所（介護・リハビリ）施設の紹介と地域高齢者のニーズ（佐藤医院・理学療法士・平井氏，ケアマネージャー・介護福祉士・圓山氏）、実習説明（山川）
６／７／８	実習⑴：介護実習（佐藤医院デイケア・デイサービスセンター） ※４班に分かれて、１班と２班が前半、３班と４班が後半
9	講義：エビデンスに基づく高齢者介護（山川）
10	演習：高齢者を対象とした体操・脳トレプログラムの企画立案、実習説明（山川）
11／12／13	実習⑵：企画したプログラムの実践 ※４班に分かれて、１班と２班が前半、３班と４班が後半
14	ワークショップ⑵：高齢者介護の現場で感じたこと（浜田、山川）
15	ワークショップ⑶：総括的な議論（浜田、山川、岡山市・守安氏、佐藤医院・平井氏、圓山氏）

⑵　実習内容

実習１回目では、通所サービス（デイケア、デイサービス）の利用者の特性、並びに全体的な活動の流れを知ることを目的とした。入浴介助（着替え）、リハビリ、看護、施設での活動をローテーションで体験した。実習２回目では、１回目の実習をもとに、グループごとになるべく多くの人が参加でき、できるだけ心身の健康の維持・増進につながるような活動（体操などレクリエーション及び脳トレの２種類）を企画し、実践した。

実習は前半（１グループ）と後半（２グループ）に分けて行い、１回目、２回目ともに、各グループに教員あるいはティーチングアシスタント（TA）が引率した。

⑶　報告会（オープンハウス）

岡山市から守安氏、佐藤医院から平井氏と圓山氏を迎え、「高齢者が生きがいを持って暮らせるようにするために、何かいい方法はないか？」という題目について、自助、互助、共助、公助で持続可能・実施可能なことをグループで議論し、発表した。まずグループ内で意見を出し合い、次に、守安、平井、圓山各氏にインタビューし、情報収集した後、グループの意見をまとめ、発表した。

Ⅴ　評価

実習の出席は必須とし、評価は実習の受け入れ担当者（佐藤医院デイケア・デイサービス各主任）とレポート課題による。

実習の受け入れ担当者は、経済産業省の社会人基礎力評価基準表を用いて、学生一人ひとりの実習中の様子を評価した（授業評価としては使用せず）。レポート課題として、学生は、今までの授業後の感想文を前半（１から４回まで）と後半（14，15 回）の記載内容を比べて、気づいたこと、考えたことなどをＡ４用紙１枚程度にまとめ、提出した。

評価のポイントとしては、講義に主体的に参加しているかどうか、実習に真摯に取り組んでいるかどうか、レポートの内容（この授業の講義や実習を経験して自分がどのように感じ、考え、変化したかなど）を総合的に勘案して評価した。

Ⅵ　備考

・土曜日２回の実習の出席を必須としたが、専門科目と日程が重なってしまった。そのため、あらかじめグループ分けし、同じグループで同じ実習先で実習を行う予定だったが、予定変更を余儀なくされた。
・実習予定の土曜日に、部活の試合やサークルの行事と重なる学生が見受けられたため、実習日の変更をするなどして対応した。

▲デイサービス利用者とレクリエーションをする学生たち

■10-4-12　森林利用グローバルインターンシップ

１．森林利用グローバルインターンシップの概要

ブリティッシュコロンビア大学（UBC、カナダ）の Co-op プログラムは、修学期間を５年に延ばした上で、５回の長期就業体験（各４ヶ月）を経て、実務経験を地域・企業にフィードバックするプログラムである。これは本学が目指すグローバル実践型教育の一つのヒントとなる教育システムである。そこで、平成 27 年度から岡山県内の企業および岡山県の協力を得て、本学学生と UBC の Co-op 学生が共同して受ける実践型教育を実施した。

そのための実施概要を図１に示す。本学の森林利用グローバルインターンシップは UBC の Co-op in Okayama と共同した３週間のインターンシップとして実施する。受け入れは岡山県内の５企業、１機関と岡山大学で設立した林業教育コンソーシアムとする。岡山大学は本学学生への事前教育、事後教育を実施すると共に、UBC 学生の事前教育も担当する。Co-op in Okayama は６月、７月、８月の３ヶ月間実施し、その間に UBC 学生は３カ所の事業所で３週間づつの実務体験をする。本学学生はそれぞれ１カ所の事業所で３週間の実務を UBC 学生とともに体験する。それぞれの事業所での最終日には体験成果の報告を行うと共に、Co-op in Okayama の最終日（８月 28 日）には本学学生と UBC 学生の全員が最終成果発表会で報告をし、成績評価を受ける。さらに、本学学生は引き続き就業体験の成果をフォ

ローアップするための事後評価を受ける予定である。UBC 学生は帰国後 UBC での成果報告会で最終評価を受けるが、そこへ本学からも参加する。

以下はそれぞれの活動の詳細である。

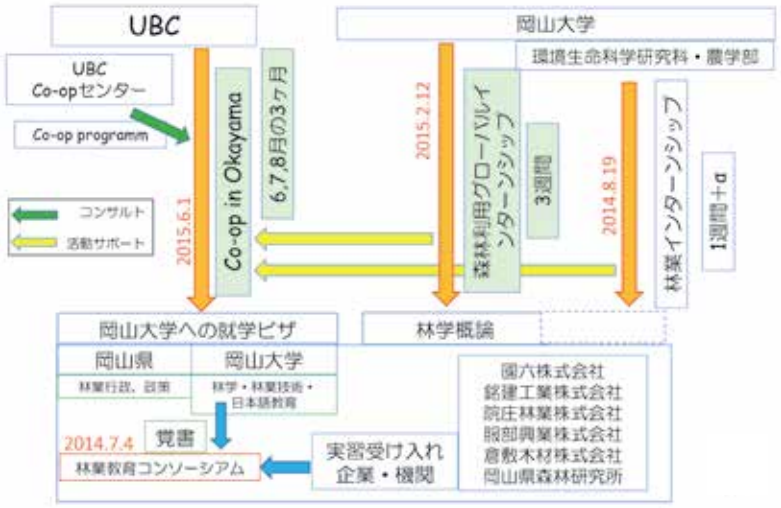


図 1　2015 年度の森林利用グローバルインターンシップ実施概要

2．学生募集

4 月 7 日の教育学部から 4 月 13 日の医学部まで、教育学部、文学科、理学部、環境理工学部、農学部、グローバルマッチングコース、医学部、教育学研究科、社会文化科学研究科、環境生命科学研究科で授業内容を説明し、6 学部から 15 名の応募があった。応募資格は TOEIC480 点以上で、森林や林業、地方創生や村づくりに関心を持つこととし、4 月 23 日に英文解釈や英会話を含む面接と書類選考によって、文学部、理学部、農学部、環境理工学部から合計 9 名の学生を採択した。その後さらに面接を行いながら、5 月 1 日には派遣する企業・機関を確定した。

3．林業教育コンソーシアム

5 月 13 日に本学で第 2 回林業教育コンソーシアムを開催し、受け入れ先での作業内容や休日の過ごし方についての確認を行うと共に、事前教育の内容について検討した。その後、派遣企業と学生の初めての顔合わせを行い、双方から企業の概要説明や学生の目的意識などについての情報交換を行った。

4．事前教育

参加する学生は全員、林業、林産業についての基礎的知識を全く持っていないため、派遣先での業務の内容を理解し、確実に作業をこなすため、さらには企業活動の内容を把握し、積極的に就業体験から社会システムを学び、対処の仕方を体得するためには、林業、林産業に関わる最低限の知見を修得しておく必要がある。そこで、5 月 13 日と 16 日の 2 日間にわたって表 1 に示すような内容の事前教育を実施した。まずガイダンスで本科目の目的を説明した上で、林学、林産学についてのそれぞれ合計 360 分と 120 分間解説を行った。授業の時間が短すぎたことや、授業内容が不十分、不適当であった面が多々あり、来年度に向けて大きく修正をしなければならない内容であった。

なお、UBC 学生と共同で作業をする際には、本学学生は派遣先の社員（作業の指導者）と UBC 学生

とのコミュニケーションを円滑にする役割が大きい。そこで、林業、林産業に特有の専門用語の英日対訳の用語集（630 語）を作成し、利用させることにした。

表１　森林利用グローバルインターンシップ事前教育カリキュラム

資料 0−9 森林利用グローバルインターンシップ事前教育カリキュラム					
月日(曜日)	時間	授業名(分)	授業内容	担当者	担当者所属
5/13（水）	16：30～17：00	ガイダンス (30)		吉川 賢	岡山大学大学院・環境生命科学研究科
	17：00～17：30	林学概論3 (30)	徳用林産、育種	石井 哲	岡山県農林水産総合センター森林研究所
	17：30～18：30	林学概論1 (60)	土木、砂防	石丸香苗	岡山大学地域総合研究センター
5/16(土)	9：30～10：30	森林概論1 (60)	木の文化、景観生態学	坂本圭児	岡山大学大学院・環境生命科学研究科
	10：30～11：30	森林概論2 (60)	森林生態学、樹木生理学	吉川 賢	岡山大学大学院・環境生命科学研究科
	11：30～12：00	林学概論2 (30)	造林(測樹、土壌、保護)	吉川 賢	岡山大学大学院・環境生命科学研究科
	13：00～14：00	林学概論4 (60)	機械(伐木運材、機械)	片桐智之	岡山県農林水産総合センター森林研究所
	14：00～15：00	林学概論5 (60)	林業法律、森林経理	伊藤勝久	島根大学大学院・生物資源科学研究科
	15：00～16：00	林産学概論1 (60)	木材の性質、加工	大谷慶人	高知大学大学院・総合人間自然科学研究科
	16：00～17：00	林産学概論2 (60)	改良、保存、製造	大谷慶人	高知大学大学院・総合人間自然科学研究科

５．UBC 学生への対応

UBC の森林学部林産工学分野所属の２年生と４年生の２名の男子学生が６月２日に来日した。彼らは岡山大学農学部の特別聴講学生として来日し、ビザの取得などを含む受け入れの事務的手続きはすべてグローバルパートナーズで行った。

岡山大学生と共同した企業での作業は表３に示すように６月 15 日からとして、それまでの３日から 12 日までの８日間は、グローバルパートナーズの協力を受けて、日本での生活や作業のための導入教育を行った（表２）。特に日本語と日本文化についての教育に重点を置いた。

表２　UBC 学生への導入教育のカリキュラム

6月			3	4	5			
オリエンテーション	3日間		コンソーシアムメンバーとUBC学生の自己紹介	ガイダンス GI学生と顔合わせ キャンパスツアー	野外実習「日本の森林」			
			絢野	吉川	坂本			
6月				8	9	10	11	12
日本文化	5日間	午前		Japanese Language and Culture	Japanese Language and Culture	林業政策（岡山県庁）岡 担当者：且	Japanese Life and Culture through Film	Activities at L-Café
		午後		Activities at L-Café	Anthropology of Japan	岡山県立博物館 特別授業 「日本の木の文化」	Japanese Mind and Culture	農学部見学
		夕刻		Intercultural Communication	Sociolinguistics: Japanese Society and Languages	城下ステーション まちなかキャンパスでの交流	Tourism and Culture in Japan	

６．企業での就業体験

６月 15 日の國六㈱と服部興業㈱を皮切りとして、表３に示すように３週間ずつの就業体験を行った。いずれも本学学生１名か２名と UBC 学生１名がチームとなって作業をするもので、それぞれの受け入れ先での就業内容は次のように多岐に及んだ。

服部興業：概要説明、安全教育、作業計画の説明（0.5 日）、チェーンソーの使い方とメンテナンス講習（0.5 日）、伐倒講習（0.5 日）、選木・伐倒・集材・造材作業（６日）、炭焼き（１日）、今週の振り返りと次週に向けて（0.5 日）、木材市場、バイオマス発電用バイオマス置き場、真庭木材事業協同組合、チップ工場見学（0.5 日）、三尾寺神木見学（0.5 日）、ワイヤー編み（0.5 日）、作業用車両のメンテナンス（0.5 日）、作業現場調査（0.5 日）、コスト試算（0.5 日）、報告会（0.5 日）。

國六：概要説明、施設紹介、あいさつ回り、安全教育、重機等練習（0.5 日）、新庄中学校訪問（0.5 日）、

おが屑加工製品工場見学（0.5 日）、除草作業（１日）、木材市場、製材所見学（0.5 日）、住宅建築会社、真庭市役所見学（0.5 日）、家具会社見学（１日）、原木市場、製材市場、製材プレカット工場見学（１日）、天然林、モザイク状植林現場（0.5 日）、森林セラピーロード見学（0.5 日）、中間報告会（0.5 日）、ハーベスタ作業見学（0.5 日）、中学生を対象にした報告会とその準備（１日）、伐倒・集材・造材作業（４日）、蒜山高校訪問（0.5 日）、天然林ハイキング（0.5 日）、重機メンテナンス（0.5 日）、伐倒依頼箇所の視察（0.5 日）、本社関係者に伐倒デモンストレーション兼報告会（0.5 日）。

院庄林業：概要説明、安全教育、工場見学（0.5 日）、製品についての説明と日本とカナダの林産業に関する意見交換（0.5 日）、フィンガージョイント工程（３日）、ヒノキ検品（１日）、ラミナ講習（0.5 日）、植林地見学（0.5 日）、ムラトリ工程（１日）、伐採現場見学（0.5 日）、板削り工程･仕分け工程（1.5 日）、プレス工程（１日）、伝統家屋の見学（0.5 日）、仕上げ工程（１日）、梱包（0.5 日）、品質管理（１日）、まとめと報告会（１日）。

銘建工業：概要説明、安全教育、集成材（CLT）に関する講義（１日）、工場見学（１日）、CLT 製造加工（５日）、図面から模型作成（２日）、CLT 住宅温熱環境測定（0.5 日）、木造建築事例見学（0.5 日）、バイオマスチップの含水量測定（１日）、大型製材所見学（0.5 日）、伐採現場見学（１日）、関連資料の英訳（0.5 日）、研修のまとめ（0.5 日）、報告会（0.5 日）。

倉敷木材：概要説明（0.5 日）、棚卸後の整理（0.5 日）、講義：倉敷木材の歴史、日本の木の文化（0.5 日）、伝統的建築物巡り（0.5 日）、製材（１日）、ラジオ番組出演（0.5 日）、ソファーのリメイク（１日）、大工道具と作業工程の説明（0.5 日）、日本の大工仕事（７日）、上棟式（１日）、住宅建設の現場見学（0.5 日）、道具箱作成（0.5 日）、文化財補修現場の見学（0.5 日）、報告会（0.5 日）。

岡山県農林水産センター森林研究所：木材加工研究室の概要説明（0.5 日）、美咲町町村林の見学（0.5 日）、原木・製品市場、建築現場、プレカット工場見学（１日）、伐採、玉切り（0.5 日）、木造準耐火･耐火建造物の可能性セミナー参加（0.5 日）、柿渋試験（１日）、含水率測定（１日）、木のせん断破壊試験、木の弾力性からヤング率測定（0.5 日）、リンドウ栽培見学（0.5 日）、木質材料の腐朽診断（0.5 日）、CLT の剥離試験（0.5 日）、林業研究室施設及び研究紹介（１日）、シカ獣害調査（１日）、炭焼き（0.5 日）、マツ林毎木調査（0.5 日）、コンテナ苗木の育成状況確認（0.5 日）、カシノナガキクイムシ調査（0.5 日）、間伐効果についての調査（0.5 日）、岡山甘栗の生育状況調査（0.5 日）、ナラ枯れ状況調査（１日）、キノコ菌の DNA 解析（１日）、報告会（１日）。

これらの作業をする傍ら、土曜日、日曜日の休日を利用し、ブナ林の視察や出雲地方への小旅行などを経験した。

表３　５企業、１機関への派遣時期と作業内容

國六	6月	曜日	月	火	水	木	金	土	日
		日	15	16	17	18	19	20	21
		メンバー	Hugh Grady・纐田桜子						
		用件	実習開始挨拶 村内挨拶まわり 村の主要施設見学 草刈機、ユンボ運転練習 草刈清掃業務	新庄中学校にて木工教室の見学 ヒノキ(株)の製造現場見学	草刈業務 伐倒作業 フォワーダ運転練習	木材市場見学 製材所にて製材工程見学 大工業者訪問 カーピングアーティスト訪問 高度な木材加工技術で建設された公共施設の見学	オーダーメード家具会社訪問 新庄中学校にて劇団鑑賞 中間伺い(坂本)	出雲大社、足立美術館を見学(三木)	自由
	6月	曜日	月	火	水	木	金	土	日
		日	22	23	24	25	26	27	28
		メンバー	Hugh Grady・纐田桜子						
		用件	伐倒作業	伐倒作業	木材・製材市場見学 製材・プレカット工場見学 國六所有天然林見学 ブナ林の機能についての解説 OHK取材	伐倒作業 モザイク状植林エリアの見学 森林セラピーロード見学	中間報告会 中間伺い(荒木、吉川)、交流会(荒木、三村、吉川、三木、近藤、内藤、綿野)	湯原温泉、湯原小学校見学、木山神社、木山寺を見学(森(真庭市役所)近藤、内藤、綿野)	自由
	6月/7月	曜日	月	火	水	木	金	土	日
		日	29	30	1	2	3	4	5
		メンバー	Hugh Grady・纐田桜子・西中麗奈						Hugh Grady 塩野谷英明 隅崎陽真
		用件	伐倒作業 ハーベスタ作業見学	伐倒、作業道建設 蒜山高校訪問	新庄中学校での発表準備 國六の森縦走	重機メンテナンス 伐倒、作業道建設作業 新庄中学校での発表(コーププログラムに関して)	作業現場視察と草刈 國六本社と関連会社関係者に実演報告 評価(坂本、綿野) 岡山へ移動	自由	自由、移動 Hughさん、塩野谷さん、隅崎さんが原田旅館にチェックイン
服部興業	6月	曜日	月	火	水	木	金	土	日
		日	15	16	17	18	19	20	21
		メンバー	Matt MacQueen・岡　香菜子・植田真紀						
		用件	午前:会社紹介(服部)、山林部紹介(川原)、RSK取材、チェーンソー目立て講習(安東)、午後:選木作業	午前:コスト管理、伐倒の講習(安東)、午後:伐倒作業	選木、伐倒作業、チェーンソー目立て作業	炭焼き作業	造材作業 中間伺い(荒木、三村) 岡治(荒木、三村、三木)	出雲大社、足立美術館を見学(三木)	自由
	6月	曜日	月	火	水	木	金	土	日
		日	22	23	24	25	26	27	28
		メンバー	Matt MacQueen・岡　香菜子・植田真紀						
		用件	伐倒作業	伐倒作業	木材市場、バイオマス発電用バイオマス置き場、チップエ場視察 伐倒・玉切り作業	伐倒・集材作業	三尾寺での神木見学、ワイヤー作り、中間伺い(三村、綿野)夕方にMattさんと岡さんが帰阪	自由	自由 夕方、マットさんと岡さんは落合山荘に戻る
	6月/7月	曜日	月	火	水	木	金	土	日
		日	29	30	1	2	3	4	5
		メンバー	Matt MacQueen・岡　香菜子・植田真紀						Matt McQueen 瀬崎景己
		用件	伐倒・集材	伐倒・集材、チェーンソー目立て	作業用車両のエンジンオイル交換作業、伐倒作業、	伐倒、集材、チェーンソー目立て	伐倒・集材作業 コスト分析 報告会 評価(吉川) 岡山へ移動	自由	自由と移動 マットさんと瀬崎さんは岡庄林業の社宅に入居

銘建工業	7月	曜日	月	火	水	木	金	土	日
		日	6	7	8	9	10	11	12
		メンバー	Hugh Grady・塩野谷英明・隅崎翔真						
		用件	概要説明、安全教育	工場見学	CLT製造・加工		CLT製造・加工 挨拶訪問（荒木、三村、吉川、三木、綿野） 中間伺い（坂本、石丸） 宿泊（坂本）	鳥取大学演習林、大山登山、ブナ林散策（坂本、大住（鳥大））	自由
	7月	曜日	月	火	水	木	金	土	日
		日	13	14	15	16	17	18	19
		メンバー	Hugh Grady・隅崎翔真・塩野谷英明						
		用件	CLT製造・加工		図面から模型を作成		CLT住宅温熱環境測定、 木造建築事例見学 中間伺いが台風で中止	自由	自由
	7月	曜日	月	火	水	木	金	土	日
		日	20	21	22	23	24	25	26
		メンバー	Hugh Grady・隅崎翔真・塩野谷英明						
		用件	祭日	真庭バイオマス発電所 （受入チップの含水率測定）	伐採・製材見学（高知）		報告会 評価（吉川） 岡山へ移動 Hughさんが津島宿泊所にチェックイン 懇学金受領	自由	自由 Hughさんと福岡さんが源田旗館にチェックイン
院庄林業	7月	曜日	月	火	水	木	金	土	日
		日	6	7	8	9	10	11	12
		メンバー	Matt MacQueen・瀬崎景己						
		用件	概要説明 工場見学 安全教育 製品についての説明と日本とカナダの林産業に関する意見交換 日報作成	プレカット工場、美松日産農林株式会社見学 FJ（フィンガージョイント）とムラトリ工程視察 久米工場見学 JAS規格の説明 日報作成	FJ工程見学 FJ工程実務研修 日報作成	FJ工程実務研修 レポート作成	ヒノキ検品 挨拶訪問（荒木、三村、吉川、三木、綿野） レポート作成 中間伺い（吉川）	鳥取大学演習林、大山登山、ブナ林散策（坂本、大住（鳥大））	自由
	7月	曜日	月	火	水	木	金	土	日
		日	13	14	15	16	17	18	19
		メンバー	Matt MacQueen・瀬崎景己						
		用件	ラミナ講習 水田さんの山を見学 レポート作成	ムラトリ工程見学、実務 レポート作成	伐採現場見学 仕分け実務 レポート作成	板削り工程 仕分け実務 中間伺い（石丸） レポート作成	プレス工程 レポート作成	自由	自由
	7月	曜日	月	火	水	木	金	土	日
		日	20	21	22	23	24	25	26
		メンバー	Matt MacQueen・瀬崎景己						
		用件	祭日	日本の伝統家屋の見学 仕上げ工程 レポート作成	仕上工程 梱包 レポート作成	品質管理 レポート作成	報告会 評価（坂本） 岡山へ移動 Mattさんが津島宿泊所にチェックイン 奨学金受領	自由	自由 Mattさんと下山さんが倉敷ゲストハウスにチェックイン

森林研究所木材加工研究室	7月/8月	曜日	月	火	水	木	金	土	日
		日	27	28	29	30	31	1	2
		メンバー	Hugh Grady・福岡千明						
		用件	木材加工研究研究室の概要説明 OHK取材 美咲町の町村林見学	見学 ・津山総合木材市場 ・軸組み工法による住宅建築現場 ・製材、集成材、プレカット工場（院庄林業）	伐採、玉切り（美咲町） 木造準耐火・耐火建造物の可能性セミナー（岡山県農林水産大学校、赤磐市）	精油による悪臭となるアンモニアの吸収能測定 木材のせん断破壊試験 木の強力からヤング率測定	木材の水分含量測定試験 中間伺い（綿野）	自由	自由
	8月	曜日	月	火	水	木	金	土	日
		日	3	4	5	6	7	8	9
		メンバー	Hugh Grady・福岡千明						
		用件	樹皮を剥いた載荷後でのリンドウ栽培技術の見学 木質材料の腐朽診断	炉乾燥による木材含水率の測定試験 CLTの剥離試験機械を使った含水率測定	研究室間での移動（荷物と自転車の運搬、綿野） 林業研究室の紹介 ナラ枯れん原因になる昆虫の計	森林におけるシカによる被害状況の調査	炭化試験 骨木調査 中間伺い（綿野） 移動：福岡さん⇒岡山市、Hughさん⇒倉敷ゲストハウス	アスエコカフェで講演（13:30～15:00） OHK取材 Hughさんは荷物をアゴラに預けて夜行バスで東京	自由
	8月	曜日	月	火	水	木	金	土	日
		日	17	18	19	20	21	22	23
		メンバー	Hugh Grady・福岡千明						
		用件	・コンテナ苗の育成状況確認 ・ナラ枯れの原因となる虫の調査	・間伐の影響調査 ・岡山甘栗の生育状況調査	ナラ枯れ調査	キノコのDNA分析	林業研究室・木材加工研究室での報告 評価（石丸、荒木と綿野が参加） 岡山へ移動 奨学金受領	自由	自由

倉敷木材	7月/8月	曜日	月	火	水	木	金	土	日
		日	27	28	29	30	31	1	2
		メンバー	Matt MacQueen・下山将樹						
		用件	概要説明 掃部後の整理	倉敷木材の歴史 日本の木の文化に関する講義 五重塔、吉備津神社見学	木材を指定の長さにカット 木材の表面を削る ラジオ番組出演	柱の加工 上棟キットで家の組立 ソファーの塗料塗り	ソファーのリメイク 大工道具の説明 墨付け 中間倒い（石丸）	自由	自由
	8月	曜日	月	火	水	木	金	土	日
		日	3	4	5	6	7	8	9
		メンバー	Matt MacQueen・下山将樹						
		用件	材木への墨付け 墨付けした木材に穴をあける マルノコで余分の部分をカット	土台となる木材の加工 屋根の垂木を置く部分の加工	接合部の加工 隅木を置く部分の加工	柱の加工 仮組み立て	ほぞの加工 隅木、垂木を置く部分の加工 中間倒い（吉川、三村） 下山さんは電車で岡山へ移動	アスエコカフェで講演（13:30～15:00） OHK取材 Mattさんは荷物をアゴラに預けて夜行バスで東京へ	自由
	8月	曜日	月	火	水	木	金	土	日
		日	17	18	19	20	21	22	23
		メンバー	Matt MacQueen・下山将樹						
		用件	ほぞの加工 火打ち土台、火打梁の加工	上棟式の準備と参加	家の建設の段階見学 垂木、隅木の加工 住宅模型の仮組立	道具箱の作成 古民家の改築現場見学	住宅模型の組立 報告会 OHK取材 評価（荒木・絢野） 岡山へ戻る	自由	自由

7．報告会

本学での成果報告会に先立って、８月 26 日、27 日の２日間発表指導を行った。

成果報告会は８月 28 日（金）13 時より、岡山大学国際交流会館１F　交流ラウンジで開催した。研修先企業の現場担当者をはじめ、学内のグローバル・ディスカバリー、長期インターンシッププログラム担当の教員、林業関係者など計 67 名が参加した。

学生発表は本学学生と UBC 学生の２部構成とし（図２）、本学学生は企業ごとに 15 分で学生１名～２名が発表を行い、それぞれの受け入れ事業所の担当者から感想や質問が行われた。第二部で UBC 学生２名がそれぞれ 30 分で服部興業・院庄林業・倉敷木材での研修と、國六・銘建工業・森林研究所での研修について、企業の活動改善のための提言を含めて、成果を発表した。英語による口頭発表の内容理解を助けるために、スクリーンに日本語と英語の２種類のスライドを投影した。本学学生の場合と同様に、発表後、受け入れ事業所の担当者から感想や、彼らの提案に対する質問などが行われた。

図２　グローバル実践型教育プログラム成果報告会のポスターとプログラム

UBC 学生は９月初めに帰国し、９月 30 日に UBC で日本での就業体験について、４年生は口頭で、２年生はポスターセッションで発表した。彼らはこの発表と日本から送られた評価書をもとに、成績評価が行われた。

▲ UBC における林学と林産学の Co-op 教育への参加企業

▲ Co-op in Okayama の UBC での発表風景

８．実施報告書

平成 27 年３月 19 日に実施された実践型教育国際シンポジウム「森林利用グローバルインターンシップと UBC の Co-op プログラム」の内容から平成 27 年度実施の森林利用グローバルインターンシップの詳細および実践型教育を岡山大学が実施するにあたっての課題と展望をまとめて、平成 27 年度「グローバル実践型教育実施報告書－森林利用グローバルインターンシップ＋ UBC Co-op in Okayama －」を 11 月に作成した。

図３　平成 27 年度「グローバル実践型教育実施報告書」の表紙

10-５　スクールボランティア支援システムの構築

【システム開発の概要】

昨年度より開発を進めている「実践型社会連携教育のためのコーディネートシステム」を活用して、今年度はスクールボランティア支援システムとしてプロトタイプの開発・試験運用を行い、岡山県内のおける学校支援ボランティア等で学生とのマッチングや活動の記録などが可能となるか、実際の運用にあわせた開発に着手した。本システムでは、大学院教育学研究科・教育学部・教師教育開発センターと密に連携を図り、岡山県教育委員会や岡山市教育委員会との連携の一環として開発を進めている。

昨年度は本システムの中心となる３つの機能（マッチング、ｅラーニング、ポートフォリオ）の設計を中心に行ったが、今年度は実際の運用に合わせながらシステムの処理内容を系統的に関連させる検討を行った（図１～図９）。これらの図は最終的な運用の流れを想定した処理となっているため、今年度すべて機能化したわけではないものの、仕様に添った内容で外部委託し、試験運用が可能なシステム構築を進めた。また、岡山大学周辺の岡山市立の小・中学校での試験運用（後述）に向けて、岡山市学校支援ボランティア事業での運用に合わせた形で、岡山市教育委員会生涯学習課と協議を重ね調整を行った。平成 27 年 10 月までに試験運用ができる環境を整え、以下の形でウェブサイトを立ち上げた。

主題（和名）	教育支援・学習支援ボランティア
英語表記	VALEO - Volunteer Activities for Learning and Education in Okayama-
副題	学校園と学生がつながるポータルサイト
URL	https://valeo.agora.okayama-u.ac.jp

【システムの運用試験】

本運用試験は岡山市教育委員会が実施する「学校支援ボランティア事業」と岡山大学が連携し、「岡山大学スクールボランティア支援システム」として以下の３つ目的で実施した。

①「岡山スクールボランティア支援システム構築に係る業務仕様書」に定義された仕様どおりに正しく機能するかどうか。

②操作性や運用手順について、実際の学校支援ボランティア事業における利用者の業務に利用可能なものとなっているか。

③学校支援ボランティア事業の合理性・効率性の向上につながっているか。

また、個別の以下の機能についてユーザーレビューや機能評価を実施した。

⑴　マッチング機能

・学生はユーザー登録を行い、マッチング項目を登録できること。
※個人情報はサーバーには保存されず、所属大学担当者へ通知される。
・学校園がボランティア依頼をウェブ上で登録できること。
※ウェブ上での掲載については教育委員会の承認が必要となる。
・学校園は学生ボランティアをウェブ上で検索し、活動への参加を促すようメールを送信できること。
・学生は希望項目とマッチする依頼情報をメールで受信できること。
・学生はウェブ上に掲載された依頼情報に応募（エントリー）できること。
・学校園はエントリーした学生について受け入れを承認するか拒否するか選択できること。

⑵　e ラーニング機能

・学校園はボランティア依頼に対して必要な事前研修があれば、ウェブ上で指定できること。
・当該ボランティア依頼にエントリーするためには学生は必要な事前研修を受講済みであること。
・教育委員会および大学は、対面方式による事前研修を受講した学生ボランティアについて受講完了をチェックできること。

⑶　ポートフォリオ機能

・依頼活動終了後に学校園はボランティア活動についてポートフォリオを作成できること。
・依頼活動終了後に学生はボランティア活動についてポートフォリオを作成できること。

本試験運用には、岡山市教育委員会をはじめ、岡山市立津島小学校、岡山市立伊島小学校、岡山市立御野小学校、岡山市立岡山中央小学校、岡山市立京山中学校、岡山市立岡北中学校、岡山市立岡山中央中学校の７校に参加協力してもらい、岡山大学の利用者登録をしている学生約 30 名に対して、活動依頼などをシステム上から①ボランティア活動の依頼、②学生ボランティアとのマッチング、③研修の実施、④活動の報告（ポートフォリオ作成）を行ってもらった。協力依頼に際しては、各校長先生への事業趣旨説明および別途実務担当教員への操作説明などを行った。また、学生に対しても利用登録のための説明会や掲示などを学内で行い、協力学生の参加を募った。

試験運用は以下のスケジュールで実施した。当初試験運用は 11 月からの開始を予定していたが、学生の利用者登録が想定より少なかったため、継続して学生への登録周知・広報活動を行い、２ヶ月遅れて１月からの試験運用となった。

10 月～　　学生に対して本システムの試験運用および説明会について周知。
10 月 28 日　学生を対象に本システムの利用説明会を学内で実施。

11月6日・13日	協力校の校長に対して趣旨説明を実施。
11月～1月	岡山大学の全学生および岡山市学校支援ボランティア登録学生（岡大生のみ）に利用者登録について依頼・周知。
1月5日・6日	協力校のボランティア担当者に対して操作説明を実施。
1月6日～3月	システム試験運用。

【来年度に向けて】

現在の開発は汎用的なシステムの構築ではなく、汎用化させるための詳細仕様確定のための開発となっている。本試験運用中に発生した障害や不具合、機能や仕様の修正提案が必要な内容を精査し、「コーディネートシステム」としての構築を進めていく予定である。また、スクールボランティア支援システムとしての運用では、試験運用では協力校と岡山大学での活用であったが、より多くの学校園や学生に利用してもらうよう、教育委員会や学内での調整を図ると同時に、岡山大学は岡山県教育委員会や岡山市教育委員会と連携し、岡山市以外の市町村での学校園や県内の他大学をも巻き込みながら、包括的なスクールボランティア活動の基幹システムとしての運用を目指していきたい。

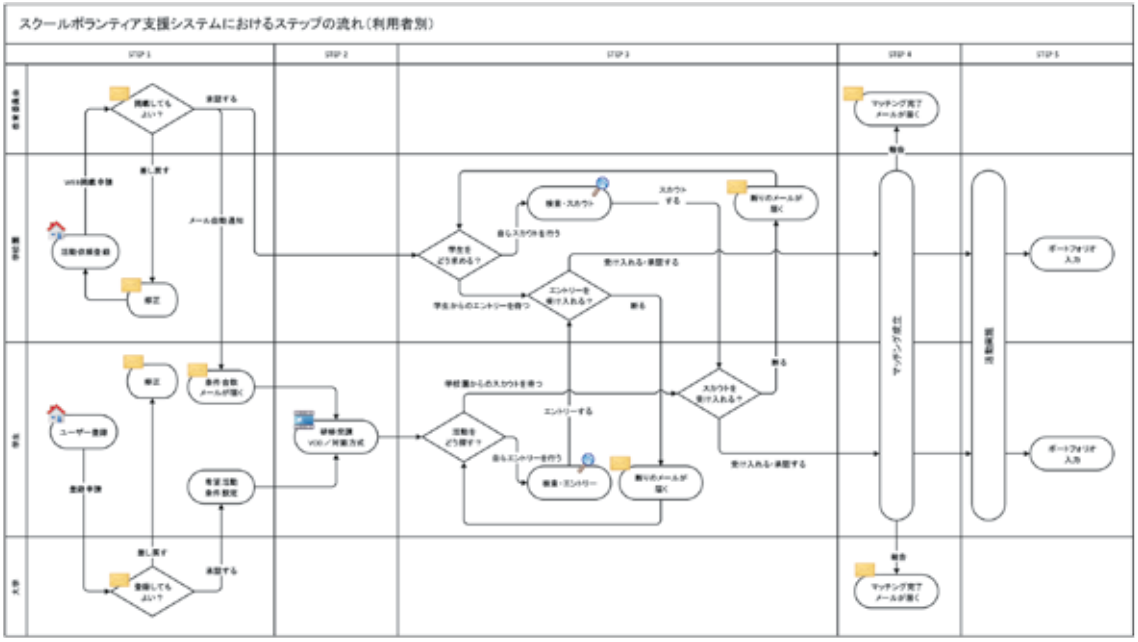


図1　スクールボランティア支援システムにおけるステップの流れ（利用者別）

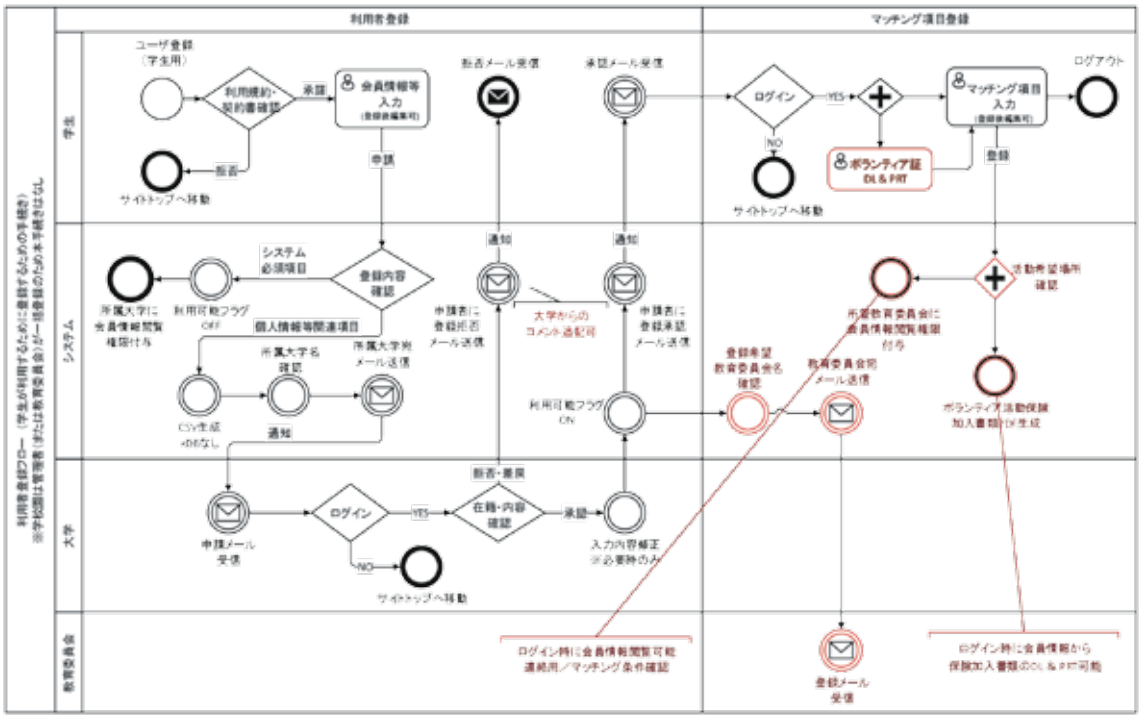


図２　利用者登録フロー（学生が利用するために登録するための手続き）
※学校園は管理者（または教育委員会）が一括登録のため本手続きはなし

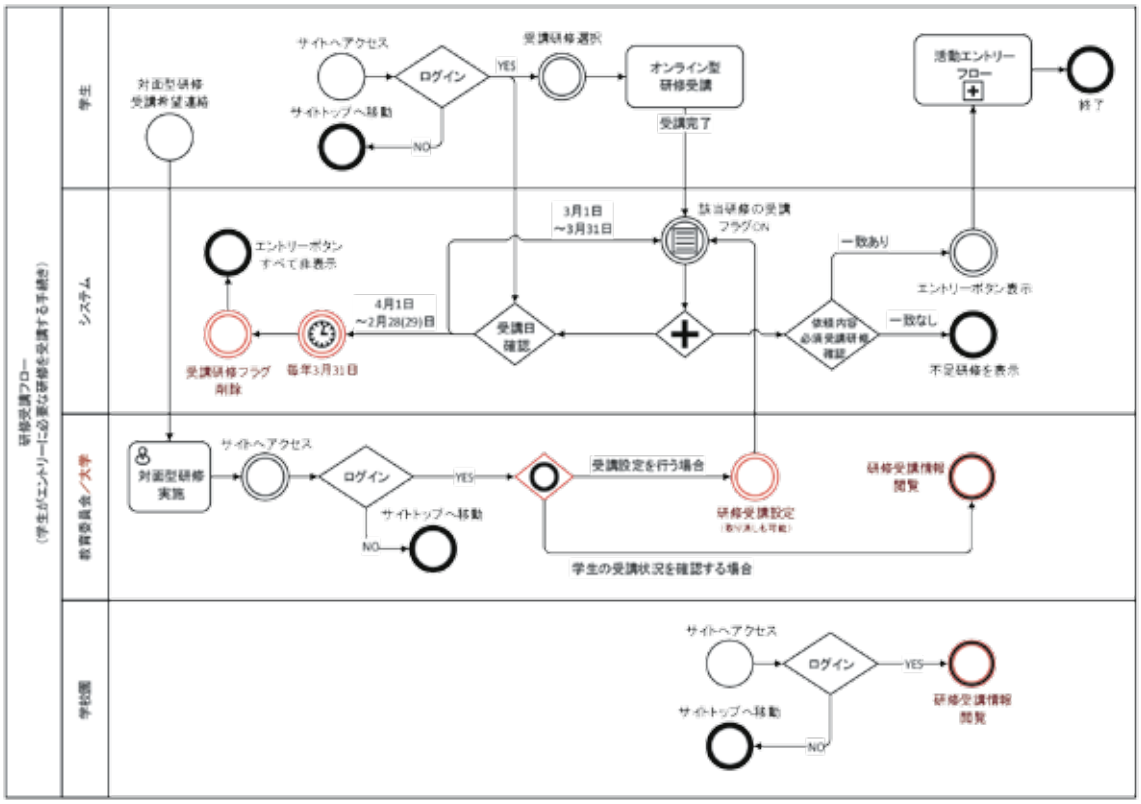


図３　研修受講フロー（学生がエントリーに必要な研修を受講する手続き）

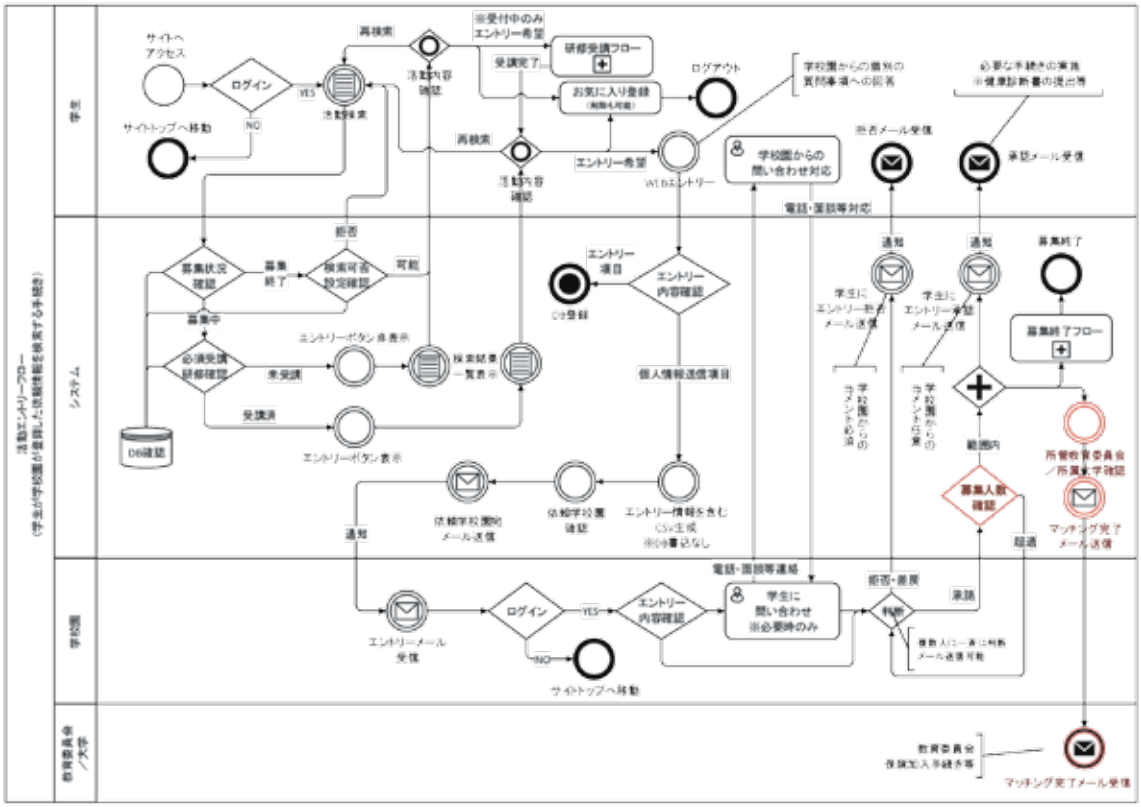


図４　活動エントリーフロー（学生が学校園が登録した依頼情報を検索する手続き）

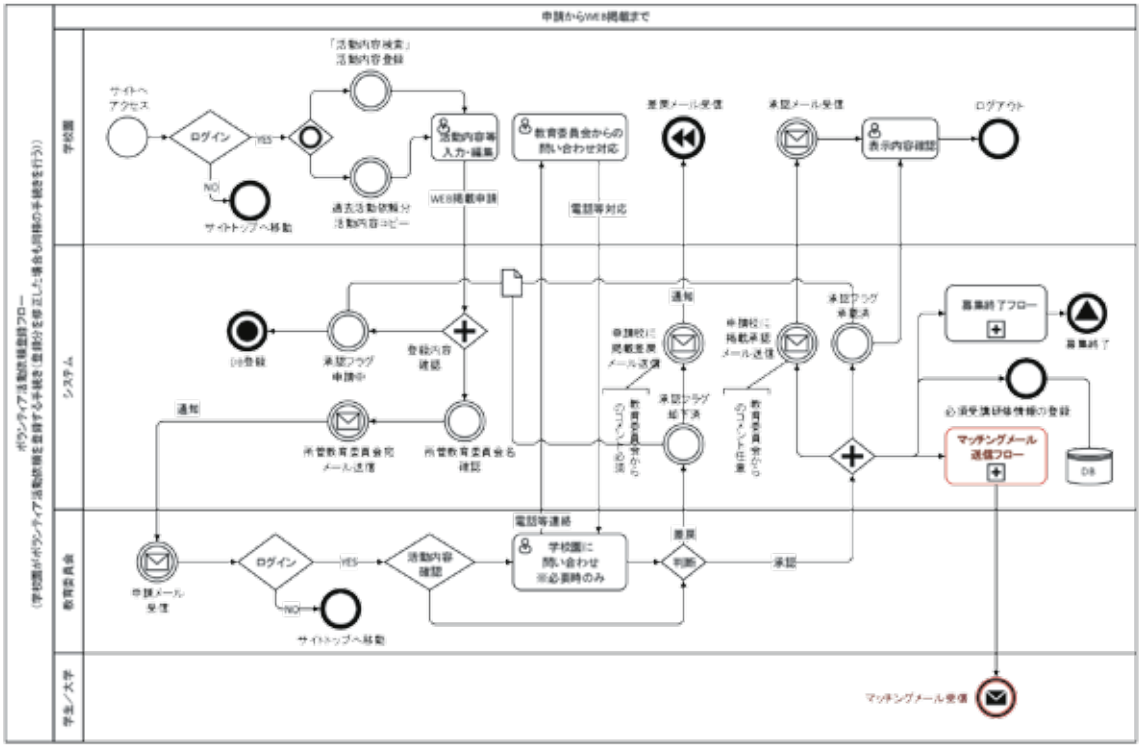


図５　ボランティア活動依頼登録フロー（学校園がボランティア活動依頼を登録する
手続き（登録分を修正した場合も同様の手続きを行う））

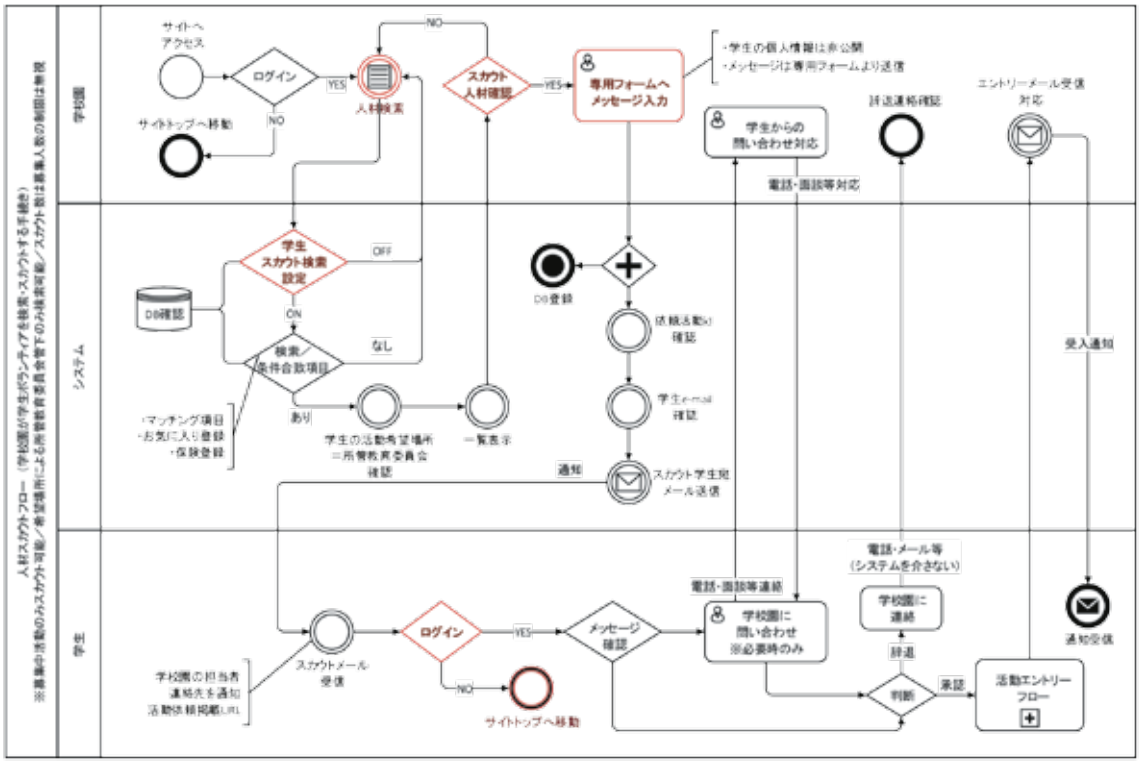


図６　人材スカウトフロー（学校園が学生ボランティアを検索・スカウトする手続き）
※募集中活動のみスカウト可能／希望場所による所管教育委員会管下のみ検索可能／スカウト数は募集人数の制限は無視

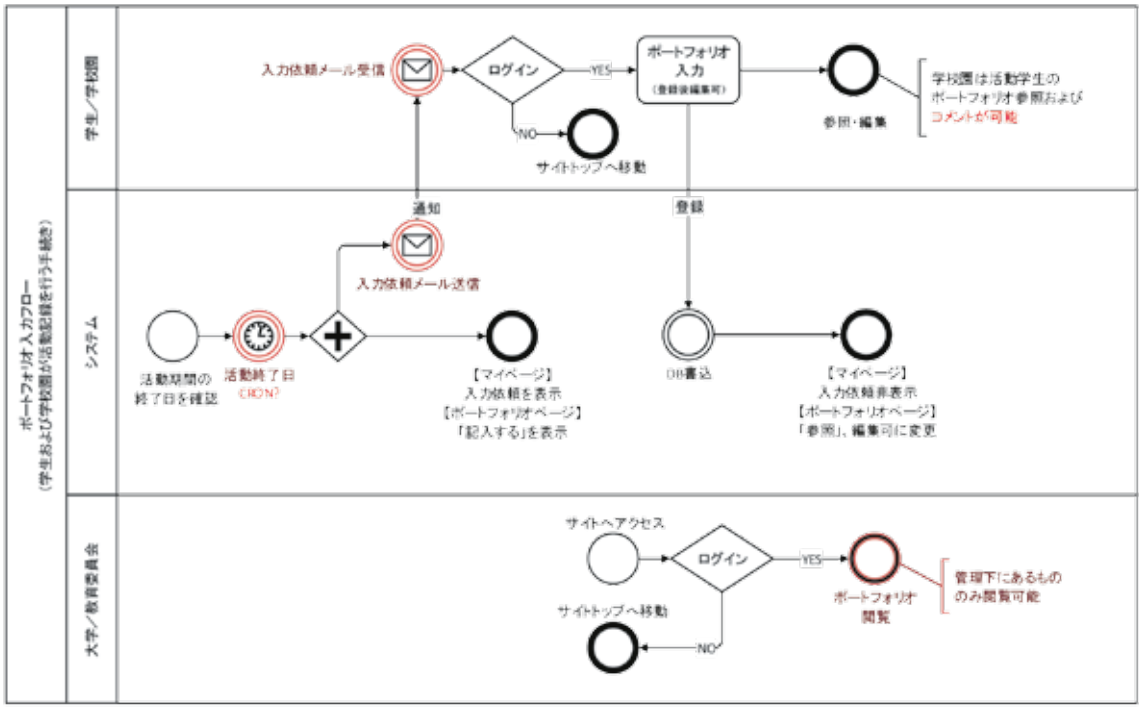


図７　ポートフォリオ入力フロー（学生および学校園が活動記録を行う手続き）

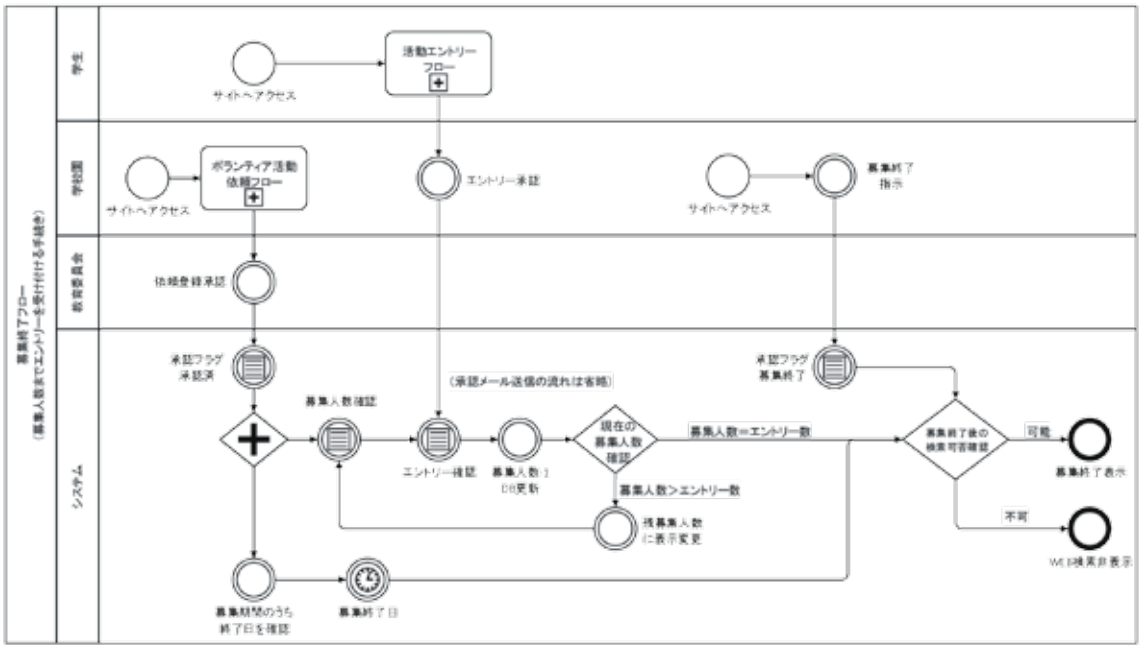


図８　募集終了フロー（募集人数までエントリーを受け付ける手続き）

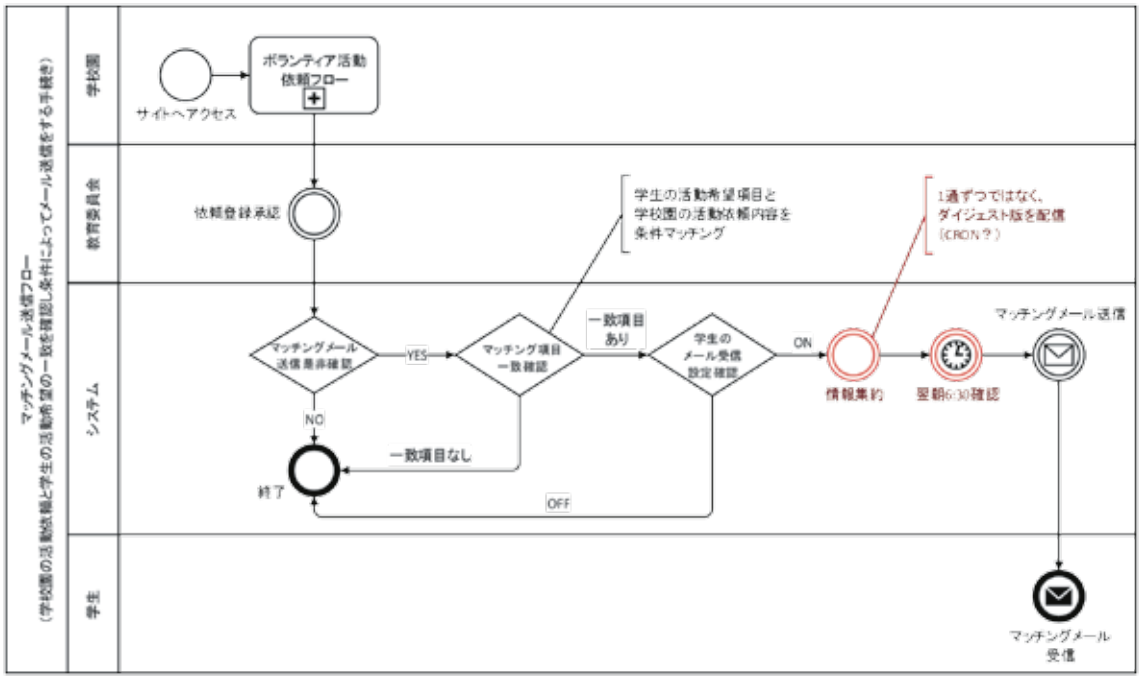


図９　マッチングメール送信フロー（学校園の活動依頼と学生の活動希望の一致を確認し条件によってメール送信をする手続き）

11 新聞メディア等掲載一覧

【新聞】

2015/4/2	山陽新聞	「元気創生戦略本部」が発足　井原市顧問に三村氏
2015/4/2	産経新聞	「元気いばら創生戦略本部」設置
2015/4/2	読売新聞	井原に元気を　市戦略本部　特産PRや少子化対策
2015/4/6	山陽新聞	先進的都市づくりを学ぶ　ポートランド視察
2015/4/11	山陽新聞	学生まち取材班　活動振り返る
2015/4/16	山陽新聞	人口減対策で施策推進、元気創生本部が初会合
2015/4/16	山陽新聞	「交通政策参考になった」市長ポートランド視察成果
2015/4/23	山陽新聞	全米一住みたい街　ポートランドの秘密＜上＞
2015/4/24	山陽新聞	全米一住みたい街　ポートランドの秘密＜下＞
2015/5/12	山陽新聞	岡山大まちなかキャンパス「中国医学～『経絡』の使い方入門～」
2015/5/15	山陽新聞	仏の大学連携　都市づくりを学ぶ　岡大シンポ
2015/5/17	山陽新聞	みずしま財団設立15年　問い続ける青い空の意味
2015/5/23	山陽新聞	公共交通生かしたまちに　15日シンポ講演要旨
2015/5/29	山陽新聞	旭川周辺活性化へ　産官学が「戦略会議」
2015/6/4	山陽新聞	ティーチイン岡山
2015/6/9	公明新聞	地方創生に挑む　岡山・井原市　市民協働で戦略づくり　三村教授コメント
2015/6/16	山陽新聞	岡山で毎月「ESDグローカルCafe」
2015/6/17	山陽新聞	検証イオンモール岡山半年
2015/6/19	山陽新聞	地域版総合戦略　コンベンション誘致
2015/6/21	山陽新聞	三村教授講演要旨　JR岡山駅西口活性化
2015/6/23	山陽新聞	まちなかキャンパスLOHAS　イベント告知
2015/6/29	山陽新聞	高梁川流域学校開校　「歴史、文化　次代に」倉敷でシンポ
2015/6/30	中国新聞	矢掛町江良　小さな国際交流スタート　岡山大留学生ら里山満喫
2015/7/2	山陽新聞	岡山大学七夕祭2015（Li☆Luck）　告知
2015/7/3	日刊木材新聞	岡山大学実践型教育プログラムにUBCの学生が参加
2015/7/4	山陽新聞	高梁川流域学校　開校記念シンポ（倉敷）荒木センター長パネルディスカッション発言要旨
2015/7/4	山陽新聞	「ポートランドでのまちづくり視察報告会」@西川アゴラ　岡山市　林恭生交通政策課長講演要旨
2015/7/7	山陽新聞	まちなかキャンパスLOHAS「アーユルヴェーダ的すがすがしい一日の過ごし方」イベント告知
2015/7/9	山陽新聞	井原創生戦略会議　委員ら意見交換　市地域創生戦略顧問　三村教授
2015/7/9	山陽新聞	矢掛・江良地区　住民の会　留学生交流で地域元気に　岩淵助教がコメント
2015/7/12	山陽新聞	新市民会館はどこへ⑤まちづくりの視点　岩淵助教コメント
2015/7/17	山陽新聞	「新市民会館」千日前へ　三村教授コメント
2015/7/19	山陽新聞	コンベンション誘致　市、岡山大と連携強化　22日協定

2015/7/23	山陽新聞	市と岡山大が連携協定　コンベンション誘致強化
2015/7/23	産経新聞	「コンベンション」誘致で連携　岡山市、岡山大と協定締結
2015/7/25	山陽木材新聞	留学生を受入れ　県内企業で職業体験
2015/8/1	山陽新聞	元気いばら創生戦略本部　三村聡戦略顧問に聞く
2015/8/2	山陽新聞	新・地域考　オピニオン「岡山カルチャーゾーン」30年どう生かす地域の宝　三村教授コメント
2015/8/3	山陽新聞	滴一滴　ヴァンソン藤井さんの講演内容引用
2015/8/6	山陽新聞	福島の小中高生ら来岡　おかやまバトン招待
2015/8/7	山陽新聞	大学コンソーシアムと県　人材育成へ連携協定
2015/8/9	山陽新聞	矢掛・江良　岡山大留学生ホームステイ受入　伝統文化紹介
2015/8/10	山陽新聞	学生ボランティア「おかやまバトン」最後の被災者招待
2015/8/14	山陽新聞	超小型EV公用車実験（コムス）市職員　導入なら利用は８割
2015/8/14	山陽新聞	消費者教育題材　教員向け講座　前田准教授指導
2015/8/18	山陽新聞	まちなかキャンパスLOHAS　イベント告知
2015/8/19	山陽新聞	奉還小判君神社（奉還町商店街）「おかやま百年構想」代表長宗さんコメント
2015/9/3	山陽新聞	岡山商工会議所活性化協初会合　新市民会館で議論
2015/9/8	山陽新聞	岡山大まちなかキャンパスLOHAS「本場インドのヨーガの魅力」
2015/9/17	朝日新聞	基準地価　「イオン」勢い鮮明　三村教授コメント
2015/9/18	山陽新聞	国際医療勉強会ILOHAの夏プロジェクト報告会
2015/9/27	山陽新聞	イングリッシュキャンプ　県内中学生31人参加
2015/10/1	山陽新聞	18歳選挙権　県選管など初シンポ21日岡山大
2015/10/1	山陽新聞	矢掛町江良地区大人みこし60年ぶり奉納
2015/10/3	山陽新聞	矢掛町江良地区住民グループ岡山大留学生をクリ拾いに招待
2015/10/18	中国新聞	多国籍でわっしょい　矢掛・江良地区みこし60年ぶり復活
2015/10/22	読売新聞	18歳選挙変化の起点　大学連合体と行政シンポ
2015/10/22	山陽新聞	岡山大で18歳選挙権シンポ　有識者ら導入効果分析
2015/10/22	山陽新聞	「18歳選挙権」生かそう　岡山大で初シンポ
2015/10/26	山陽新聞	ファジー讃岐戦　大橋ダービーPR　奉還町大学生がのぼり
2015/10/28	山陽新聞	商店街にシーガルズ　岡山奉還町　タペストリーお目見え
2015/11/7	山陽新聞	岡山大留学生トーク　母国語で魅力発信
2015/11/9	山陽新聞	熱気、活気　街輝く（岡山マラソン、三村先生コメント）
2015/11/12	山陽新聞	西川筋　滞留者が増加　岡山大地域総合研究センター「市民まち歩き満喫」
2015/11/12	山陽新聞	福山・小中学校再編　教育、地域のかたち（前田先生インタビュー）
2015/11/29	山陽新聞	地域とともに歩み貢献　倉敷で大原父子研究会（三村先生コメント）
2015/12/5	山陽新聞	追跡　イオンモール岡山１年　周辺店の苦戦目立つ
2015/12/19	山陽新聞	ティーチイン岡山　スマホ適正利用議論　県教委に案提出
2015/12/19	山陽新聞	米ポートランド学ぶシンポ　まちづくり　ヒント探る

2015/12/21	山陽新聞	宮城の中学野球部招く　おかやまバトン　県内２中と試合
2015/12/22	山陽新聞	地方創生にスポーツを　岡山でシンポ　クラブ関係者ら意見
2015/12/26	山陽新聞	中山間に新交通体系　美作・上山で計画　トヨタ設立の基金
2015/12/26	日本経済新聞	ミニEV活用実験に助成　トヨタの基金、岡山・美作で
2015/12/31	朝日新聞	超小型EV活用　中山間地活性化
2016/１/５	読売新聞	サッカーでまちおこし 奉還町商店街と湯郷
2016/１/８	朝日新聞	一般教養に「旅行医学」岡山大、新年度から
2016/１/８	山陽新聞	岡山大まちなかキャンパスLOHAS「一年の健康はアーユルヴェーダにあり！」
2016/１/13	山陽新聞	矢掛の園児とたこ揚げ満喫　岡山大留学生ら訪問
2016/１/14	山陽新聞	16年度成長戦略策定へ　高梁川流域連携中枢都市圏
2016/１/21	山陽新聞	水辺空間活用 イベント継続　旭川再生会議
2016/１/23	山陽新聞	生物、異文化に理解を　池田動物園、大原美術館　来月、ESD講座
2016/１/29	山陽新聞	美術館でESD!?倉敷市大原美術館にて
2016/２/７	山陽新聞	流域の文化連携を　倉敷で高梁川ミーティング
2016/２/13	山陽新聞	山陽新聞さんデジコラム　地域総合研究センター岩淵助教担当
2016/２/16	山陽新聞	地域で実践的教育を「高梁川ミーティング」討論会

【その他】

2015/７/17	新庄中学校　学校だより	UBC学生中学校訪問
2015/８/20	岡山・備後　経済リポート	岡大の留学生が矢掛の町おこし　岩淵助教インタビュー

【テレビ】

2015/５/19　瀬戸内海放送（KSB）
スーパーJチャンネル：岩淵泰助教が自治体FACEBOOK活用についてコメント

2015/６/15　西日本放送（RNC）
News Every.：前田芳男准教授が岡山市中心市街地回遊性についてコメント

2015/９/25　岡山放送（OHK）
みんなのニュース：三村聡教授が市民会館移転よる表町商店街活性化についてコメント

2015/９/26　岡山放送（OHK）
特別番組「地域のよき頭脳であれ～岡山大学・グローバル実践型教育」

2015/９/29　岡山放送（OHK）
なんしよん？特集「グローバル化する岡山大学」森林GIとポートランドまちづくり

2015/９/30　瀬戸内海放送（KSB）
スーパーJチャンネル：留学生のまちづくり～矢掛町江良地区栗拾い～

2015/９/30　西日本放送（RNC）
News Every.：留学生のまちづくり～矢掛町江良地区栗拾い～岩淵助教コメント

2015/10/13　山陽放送（RSK）
RSKイブニングニュース：矢掛町江良地区みこし復活留学生が担ぐ

2015/10/21　岡山放送（OHK）
みんなのニュース：若者と政治シンポジウムの開催
2015/10/21　瀬戸内海放送（KSB）
スーパーJチャンネル：若者と政治シンポジウム ワークショップ
2015/11/ 3　テレビせとうち（TSC）
特別番組「始動！おかやま最前線～岡山市中心部のまちづくり～」三村聡教授出演
2015/11/16　NHK
もぎたてニュース：RESASを使って地域経済のビックデータを分析、岡大生が発表
2015/12/ 4　RSK（山陽放送）
RSKイブニングニュース：三村聡教授がイオンモール開業1周年についてコメント

地域総合研究センター活動報告書
平成 27 年度

発行　岡山大学地域総合研究センター
〒 700-8530　岡山県岡山市北区津島中 3 丁目 1 番 1 号
TEL（086）251-8491　　FAX（086）251-8491
発行　平成 28 年 3 月

印刷　広和印刷株式会社

※法令に定めのある場合を除き、本書の内容を無断で複製・転載することを禁じます。